

り。且つ近時デルフキにて發見せられたる碑文は、ガリヨが紀元五十二年に代官たりしを示し、能く使徒行傳の年代と相符合す。又エペソに代官(和譯には方伯とあり)ありしを記せるも同じく當を得たるものにして、ハリッヌとペストスを方伯と呼べるも亦然り。又メリタに島長ありしことを記したるが、此の稱號の精確なることも、碑文の證明する所なり。但し此の稱號は、吾人の知れる限りにては、此島に限りたるが如し。

また、ヘロデ・アグリッパは其死する少し前に王と稱せられたり。今之を他の書に由りて研究するに、アグリッパが此の稱號を有したりしは、其在職の最後の三年間にて(紀元四十一年—四十四年)、是れより前の三十年間と、是れより以後幾百年間は、ユダヤに一人も王と稱するものなかりしなり。之に加ふるに、此のアグリッパ王の子も亦アグリッパ王と稱せらる。されど當時のユダヤはペストスの支配せる所なれば、ユダヤの王といふ意味に非ず、他の領地の王といふ意味自ら存す。而もアグリッパは猶太人に對しても一種の官職を帯びたりしもの、如し。是れペストスがパウロの事を王に告げ、恰かも王が之を聽取する權威あるが如くせしにて明かなり。猶是等凡てのことは事實誤まりなし。是れアグリッパはカルキスの王にて、ユダヤの王には非ざりしかど、尙ほ羅馬皇帝より猶太の殿と賽錢の管理及び祭司の長の撰擇とを囑托せられ(猶太人なりしを以て)、斯くして大いに猶太の事件に關係したりしを以てなり(徒十二〇一、二十、廿五〇十三—十四、ヨセファス古事記十八の六、十九の五、二十の一、八、

九)而して此のアグリッパが、公務の場合に其妹ベルニケと事を共にしたりてふ驚くべき一事も、亦事實誤まりなきことなりとす(徒廿五〇十三、廿三、ヨセファス戰記二の十六、傳記十一)。

以上アグリッパ父子に就て説ける所は、悉くヨセファスに由りて證明せらる。随つて少數批評家は使徒行傳著者がヨセファスより材料を得たるなりとの説を主張し、其結果、紀元一百年後の著作なりと唱ふれども、此説は維持し難し。此説は使徒行傳の精確の小部分の説明には可なれども、其残余の大部分は之がため却て説明困難となるを以てなり。かのナウダに關し、又ヘロデの死に關し、ルカがヨセファスと種々相符合せざるが如き、是れ僅かに其一例なるのみ。

次に、ピリビの長官及び下官を呼ぶに用ゐたる上官及び下吏なる言も、恐らく當を得たるものならん。是れ他の地ならば當らざるなれど、ピリビは當時羅馬の殖民地なりしを以てなり。然るにテサロニケにては、長官のことをポリタク、譯して「邑宰」といへり(徒十六〇廿二、卅五、十七〇六)。猶昔の著述家は此の名稱を之と同形にて用ゐしもの一人もなし。此に於てか、使徒行傳著者の此語を用ゐしは誤謬なりと攻撃する人從來是れありたり。然るに、此に一つ是等批評家の思ひ設けざりしことあり。そは此の場所即ち近代のサラニカに、昔より一の弓門あり。それに恰かも此言を有する銘ありて、何某の人々此地の邑宰たりし時、之を建設すと記せることは是れなり。此の弓門は一千八百七十六年破壊せられしが、此の銘を刻せる石は保存せられて、今現に英國博物館にあり(圖書館の近傍、中央館内にあり)。

尙ほ其後若干の碑文發見せられしが、之に由りて見る時は、此語は第一世紀中始終使用せられたりしなり。

尙ほ斯くの如き精確は、只海岸の有名なる場處にのみ限れるには非ず。凡そ記事の及ぶ所には皆同様にして、小亞細亞の内地に關してすら又然り。例せば、イコニオムにては(徒十四〇—一十一)、其爲政者のことを記せざれども、其人民を呼んでギリシヤ人といへるは當を得たり。是れ同處はギリシヤ人の邑なりしを以てなり。又其近傍の邑なるアンテオケとルストラにては、其人民を呼んで人々といへるも亦正し(此のルストラの古跡は、一千八百八十五年に至り漸く發見せられたり)。此語は同處の碑文には往々用ゐられたるを以てなり。又此の著者によれば、ルストラはルカオニアの邑なるも、イコニオムは然らず。然るに是れも近頃に至り正しきことの證明せられたるは、是れ注意するに足る。而して昔の希臘羅馬の記者等が、誤まつて此のイコニオムをルカオニアの邑とせるは趣味あることなり。然り而して、ルストラは、第一世紀中にはルカオニアに屬せしも、第二世紀の初には之と分離せり。此故に後世の記者又は此の地方不案内の人ならんには、右の二の場合とも覺えず誤謬に陥りしならん。

### (二) エヘンの事變

第二の例としてエヘンの事變の記事を一考せん。此にアルテミス禮拜のこと、其像は天より降れるを

信せしこと(恐らくは隕石に少しの細工を加へて像とせしものならん)、其美麗なる神社のこと、之が銀の小模型を護符として用ゐしこと、其禮拜の廣く流行したること、其禮拜者の法外に熱心なりしこと等を記せるは、何れも他の書に記せる所と全く相符合す。

之に加ふるに、エヘンに於て發見せられたる碑文も亦此の記事を保證して驚くべきものあり。即ち是等の碑文に由りて見るに、戲園は公認の公會場たりしなり。又アシアの祭を司る者といふ一種の吏員(即ち競技の監督者なり)ありき。又此のエヘンには別に書記官といふ有名な吏員ありき。又エヘンはアルテミスの殿に事る邑といふ一種奇妙の名を有したりき(此の名稱は從來久しく難問とせられしものなり)。又殿の盜賊と神を謗すこととは、共にエヘンの法律にて、特に犯罪と認められしものなり。又律法に合ふ會といふ語は、エヘンに於て使用せられし一種の術語なりき(徒十九〇廿九—三十九)。斯く瑣細の點まで精確なる所以は、此の記事が事變の實歴者より來り、其實際見聞したることを記載せる爲なりと解釋せざるを得ざるなり。

### (三) 聖パウロの書翰との符合

第三の例は前者と其種類を異にするものなり。借坐パウロの書翰を以て使徒行傳にある聖パウロの傳記に比するに、其多數は使徒行傳記載の教會と人物とに宛てしものにて、隨つて兩者の間には完全に而も自然的なる符合あり。而して此の不用意の符合は、其數非常に多く且つ著しくして、故意に斯く符合

せしめたるものとも思はれず。今之を論ずるに當り、煩を避けて只一通だけに止め、面して羅馬書を撰ぶことすべし。羅馬書は一般に認めてパウロの眞作となすもの、一なればなり。倍此の書翰は、其日付は存せざれど、パウロが第二回ギリシヤ傳道の終期の著作に相違なし。此故に使徒行傳に記載せらるるとすれば、其二十章三節に挿入せらるべきものなり。而して羅馬書中の偶然的記事は悉く此の時日及び場處と相符合せり。

例せば、聖パウロは羅馬書の中にマケドニアとアカヤの施濟を携さへ、エルサレムの貧者救助の爲め其處に赴くものなりと言へり。而して使徒行傳を見るに、一の場合には、聖パウロが此の二州を過ぎりてエルサレムに上れることを記して、施濟のことを記さず。それより數章後には、之に説き及びて、只此の旅濟の何處より出てたるかを説かず(羅十五〇廿五、廿六、徒十九〇廿一、廿四〇十七)。

次に、聖パウロが此時までの傳道旅行は、エルサレムよりイルリコにまで達したりしなり。而してイルリコのことば、使徒行傳の中に曾て記載せられざるを以て、故意の符合は是れなきも、實際は符合せり。即ち種々の記事を綜合して考ふるに、聖パウロはエルサレムより今日小亞細亞と稱せらるゝ地方全体に傳道し、此の羅馬書著作の時までには、マケドニア全体を巡廻したるものにして、マケドニアは聖パウロが此の方面の終點たりしなり。而して此のマケドニアはイルリコと相隣せる州なるを以て、羅馬書の記事は全く之に符合するなり(羅十五〇十九、徒二十〇二)。

其他尙ほ種々なる符合ある中に、今其二三を擧ぐれば、聖パウロが當時已に羅馬に歸住し居たるプリスキラ及びアクラに對する友情は其一なり。其久しく羅馬に至らんことを望み、而してエルサレムに上京の後ち此志を果さんとの意ありしは其二なり(羅十五〇廿三、廿五、十六〇三、徒十八〇二、十九〇廿一)。エルサレムに至らば如何なることの起るべきかを疑ひ、其出發に當りて意氣甚だ揚らざりしは其三なり。羅馬書を著はせし時、テモテ、ガヨス、シシバテロなどの之と共に在りしは其四なり(羅十五〇三十、十六〇廿一、廿三、徒二十〇四、二十二)。

是等凡ての文句に就て注意すべきは、是等凡ての符合は悉く皆故意にあらずといふこと是れなり。是れ今の論證の全部なり。而して只以上の如き文句を擧げただけにては、人或は是れ双方同一なり、一方は他方を模寫したるなりと思ふことなすとせず。されど、若し其類似の文句を前後の文句と比較するの勞を取らば、其然らざるを悟るべし。他語以て之を言へば、使徒行傳の記者は何人にもせよ、是等諸點の材料を羅馬書より得たるにはあらず、獨立に之を知れるなり。若し然りとすれば、其中に聖パウロの計畫、感情及び旅行範圍等を記せるより考ふるに、此の著者は羅馬書の著者の親友ならざるを得ず。而して羅馬書は、前にも言ひし如く只證據の一例に過ぎざるなり。

斯く瑣細、不用意の筒合は其數多けれど、一層明白の符合は之を見ることを得ず。否、使徒行傳と加拉太書との間には、齟齬と覺しきものも是れなきにあらず。勿論是等の齟齬は、之を調和することを得ず

とすれば如何。使徒行傳は後世の偽作と言ふべきか、然らず。夫れ使徒行傳の記者若し後世の人ならば、加拉太書を承知せしに相違なく、又其讀者が、之を承知せることを承知せしに相違なし。而も尙ほ著者は加拉太書と矛盾せるが如きことを記述することあるべきか。

論じて茲に至れば、使徒行傳の精確に就ての證據を約言するを得べし。抑も前掲の諸例は是れ只多くある中の見本に過ぎず。此外使徒行傳著者は、エルサレムをも、アテナスをも、亦エペソをも承知せるものなり。而して聖パウロがカイザリヤよりイタリアに到るの航海記事は、種々の地名、氣候、地中海の風向き、水夫の用語及び習慣等を初めとして頗る精確なれば、記者が自ら實際せし航海を記録せるなりとは、是れ各派の批評家の皆認むる所なり。之を要するに、使徒行傳は其叙述徹頭徹尾精確にして、其記者は同時代の人に非ずとは殆んど信じ得べからざることなりとす。

(乙) 其一致

次に講究すべき問題は、此書は一人の著作なりや、將た合作なりやといふこと是れなり。此書の或部分は、人の能く知れる如く一人稱の複數を以て記述せらるゝが故に、普通に「我儕」段落と稱せらる(徒十六〇九—四十、二十〇五—廿一〇十八、廿七〇—廿八〇十六)。之が説明として最も明了に又普通に採用せらるゝものは、此の記者はパウロの此の部分の旅行中、其同行者なりきと言ふものは是れなり。而して内部の證據を以て見るに、此の我儕段落も、其他の部分も共に同一の著者の手に成れるを確證す。

第一に、此の兩部分の用語頗る相似たり。其文体の類似せる點また尠からず。大切の單語及び措辭にして、新約書中第三福音書の外には何處にも是れなきも此の兩部分に共存するもの、四十以上に及ぶ。こは實際驚くべき事實にて、別記者説を主張する人さへ、尙ほ此の編輯者は我儕段落を多少自己の文体に書き改めて之を書中に編入せらるなりと言ふ程なり。されど斯ることをなすは非常なる文才を要することにて、且つ又我儕なる語を其儘に存し置くといふことも解すべからざることなり。是れ寧ろ何よりも先きに書き改むべき點と思はる。さればハルナクの如き批評家は却て一步を進め、此の文体の一致は非常に密接なるが故に、實に同一人の手に成れる而已ならず、また同時頃に成れるに相違なしと言ふ程なり。

又此の二の部分の間には聊か歴史上の聯絡もあり。例せば、前の諸章には、七人の一人なるピリポの關係せし事項及び此の七人が撰擧せられたる理由等を記載せり。而も著者は實際其場にあらざりし爲、是れよりも大切のことにして記録に漏れたるもの尙ほ多かるべし。而して是等凡ての事情は、我儕段落の偶然の一句、能く之を説明す。即ち其中に、ピリポと數日滞在したりとの句あれば、記者は勿論此時に一切の事情を聞知したりしなり。されど、記者は只その確かに知れることをのみ記録すること、其常なるが如くなるを以て、例ひ大切の事件にても自ら精確に知らざることとは之を書き漏らしたるものゝ如し(徒六〇五、八〇五—十三、廿六—四十、廿一〇十、路一〇三)。其他、前の部分がピリポのことを記

して、如何にも乾燥無味なるカイザリヤに至れりとの一句を以て之を結び、其理由と目的とを説かざる所以も亦明了なり。是れ後に記者がピリポに面會せる地なるが爲なりとす。斯くの如く使徒行傳は全卷一致あるものなるに、何故なれば批評家は之を分解せんとするかと問ふものあらん。其理由他なし、勿論奇蹟に關しての同時代の人の證言を打ち消さんとするにあり。蓋し使徒行傳は全体として幾多の奇蹟を記載せり。而も其眞作たる證據は、或點に於ては頗る有力にして、之を否定すべからざるものあり。此に於てか、眞作の證據特に有力にして、奇蹟の數又確かに少き我儕段落のみ之を眞實と認めんとす。即ち論者はいふ、我儕段落は是れ聖パウロの一同僚の原作に係れる奇蹟を載せざる日記なり。然るに第二世紀の一記者之に幾多の奇蹟の記事を加へて世に公けにし、且つ全体を自己の文体に書き改めしなりと。

されど此説は到底之を承認するを得ず。第一に此説は近眞的ならず。是れ斯くの如き日記が多年何人の耳目にも觸れざりしは疑はしきことなる而已ならず、後世の記者が斯る僞本を出版して何人にも看破されざる道理もなければなり。第二に論者自己の立場より見ても不精確なり。是れ我儕段落にも實際若干の奇蹟ありて記載せられたればなり（徒十六〇十八、廿六、廿八〇六、八、九）。且つエペソの事變の如き、種々有力なる眞作の證據も亦是れあり。第三に此の説は凡ての證據に背反す。是れ此書が舊書たる證據全卷に沿くして、自ら此書の一一致を證するのみならず、終始一致の證據また掩ふべからざるものあるを以てなり。

(丙) 其著者

倍此の書の精確と一致とを認むる以上は、其著者を斷定するに殆んど何の困難もなし。而して我儕段落に由りて考ふるに、記者は聖パウロの同行者として處々に旅行し、羅馬に渡航せることもありて、且つ同所に二年間パウロと共に滞在したるなり。此外又著者は聖パウロの朋友なりと認むべき別の理由あり。そは著者が聖パウロの演説を傳ふる記事是れなり。抑も聖パウロには數通の書翰あるを以て、其文体用語は吾人の熟知する所なり。而して使徒行傳中に記載せらるる聖パウロの演説なるものを見るに、其性質は純然たるパウロ的なり。其アテナスの演説なるものは特に然り。即ち其文体は非常に聖パウロのそれに類似し、我儕段落中にあるに非ざれども、其眞作たることは反對批評家さへ尙ほ認めざるべからざる所なりとす。

然るに、此に一奇とも言ふべきは、著者は聖パウロの書翰を知らざるが如くなること是れなり。少くとも是れより一文をも引用せる所なし。又著者は聖パウロの傳記中に一回だも其書翰を書きしことを記載せず。今此の第二の事情のみより考ふるも、使徒行傳は如何ほど舊き書なるかは明かなり。而して、是れに第一の事情を加へて考ふれば、著者が聖パウロの用語を知るに至れるは、其書翰を讀みて然るに非ず、直接之に親炙して然るを知るべし。換言すれば、著者は聖パウロの親友たりしを知るべし。

然るに、論者は之に對していふ、是等の演説の中にも記者自身の用語の痕跡あるものありと。されど此の痕跡あらば如何。著者若し聖パウロの演説を聞き、後ち其覺書又は記臆に由りて之を書けりとせば、時々自身の用語を交ふるは蓋し自然のことならずや。況んや、使徒行傳記載の演説なるものは、只實際の演説の梗概なるに於てをや。例せば、聖パウロはアテンスに於て三十分以内の演説をなせしとも思はれず。然るに、使徒行傳記載の演説は三分にも足らざるなり(徒十七〇廿二—三十一)。而して三十分間の演説を三分に短縮せんとすれば、必ず演説者の用ゐざりし言を挿入せざるべからず。然らざれば其筆記は支離滅裂となる恐れあり。

又著者の醫師なりしことは、間接に此書によりて吾人の知る所なり。之が證據は夥しけれど、此の事實は已に一般の認むる所なるを以て、委しく之を論ずるの必要なし。只左の如く一言せば充分ならんと思はる。曰く、特に希臘の醫學者の使用する單語及び措辭は、使徒行傳に二百一ヶ所、第三福音書に二百五十二ヶ所ありて、其多くは絶対に醫學者のみの用ふる言なり。而して此中の少數を除けば、他は新約書中の他書には用ゐらるることなしと。例せば、記者は復活に多くの證ありといへり。而して此に證と譯せられし言は、醫學者が曖昧なる症候に反對して確實の症候の意味に往々使用する言にて、又特に此の意義を顯す言なり。又記者は萬物復興のことを説きたるが、此に復興と譯せられし言も純然たる醫語にて、身体若しくは四肢の完全なる快復を意味するなり(徒一〇三、三〇廿一)。

果して然らば、之を内部の證據よりいへば、此の記者は聖パウロの親友にて、且つ醫師なりと斷言するを得べし。又聖パウロの一の書翰に由りて見るに、此人の名は愛する醫者ルカなり(西四〇十四、門廿四)。之が證據として記載すべきは、此の哥羅西書も、亦腓利門書も(聖パウロは腓利門書にもルカを其侶と呼べり)、共に羅馬より發送せるものにて、即ち前にも記せし如く、使徒行傳著者が其處に彼と共に滞在せし時のことなり。且つ著者は最後まで其處に聖パウロと共に居りしもの、如く、即ち惟ルカのみ我と倍にありと記されたり(提後四〇十一)。而も聖パウロの愛する、而して忠信なる友人たるルカは、一回も使徒行傳中に其名を記載せられず。是れルカが此書の著者たるが爲ならずんば非ず。而して使徒行傳中には、聖パウロの友人にして、其名を記載せられたるもの少からず、而も一人として此書の著者らしく思はるるものは非ざるなり(徒十五〇廿二、廿〇四)。

之に加ふるに、此の書の著者は(第三福音書の著者と共に)、最初より有名なりしに相違なし。是れ此の書の受領者たるラヨビロは確かに地位ある信者にて、此書の何人より來れるかを承知するを要し(例ひ何等かの理由にて緒言に署名はなくとも)、又之を承知せる以上は、之を秘する筈なき故なり。さればアイレニアス及びムラトリ正經の證據によれば、第二世紀の頃には此の書を聖ルカのものとして認め、其他の何人のもとも認めざる事、是れ教會一般の信仰なりしが、此の信仰は特に大切なり。而してルカが、此の著者たることの有力なる傍證なりとす。

## (丁)時代

此書の年代も粗ぼ精確に之を判定するを得べし。即ち此の年代は自ら其突然たる結尾に含まれたるものなりとす。蓋し使徒行傳の最終の記事は、聖パウロの審問を受ける前、二年の間羅馬に居住せしとあり(即ち紀元五十八年—六十年。從來は之を六十一年—六十三年となせしが、こは三年の誤算ありとは今日一般の認むる所なり)。されば使徒行傳は、此の審問に就ても、聖パウロの釋放に就ても、其後の旅行に就ても、又第二回の審問及び殉教に就ても(恐らくは紀元六十四年キロ帝の時代に)、一言も説く所なし。されど使徒行傳にして若し是等の事件後の著述ならんには、必ず之を記録したる筈なり。特に聖ペテロと聖パウロの殉教は之を記録したる筈なり。是れ此の兩使徒の殉教は、古人の記録に據れば共に羅馬に於てありしとにて、此書の如き、主として此の兩人の勞役を記せるもの、結尾としては、至極適當なるを以てなり。

然り而して此書若し聖ルカが其頃即ち紀元六十年に著述せるものとすれば、其結尾の突然にして、それより以上に及ばざりし理由明了なり。是れ其頃には、それより以上のことは未だあらざりしを以てなり。且つ夫れ此の二年間の時日は、之が編輯には頗る適當せる時期なり、加之、彼は審問に先立ち、多少取り急ぎて此の書を其友テヨビロに送付せしこと、思はる。是れ聖パウロと共に、己れも死を宣告せらるべきや否やを知らざる時なればなり。

此の見解は又廿章以下廿八章に記されたる前數年間の事件を特筆せる理由と見るを得べし。即ち此書が是等の事件後直ちに著作せられたるに非ざれば、斯く特筆する筈なければなり。蓋し是等の事件は、其後の數年間の事件に比するに、左迄大切なるには非ず。然るに著者は此の大切なる事件に就ては一言だも之を記せず。却て聖パウロの捕縛及び審問の前期間のことは、丁寧之を記し、ルシアスよりベリクスに、ベリクスよりベスタスに、それよりアグリッパに、而して遂に羅馬に至れる順序を細述して漏らさず、而も愈々危機に到達して、聖パウロがカイザルの前に現はれんとするに至り、著者は突然其筆を止め、其判決の善惡如何にさへ言及することなきは何ぞや。斯くの如きは、何人も皆遺憾と感ずる所に相違なし。而も著者若し己にそれより以上の實歴ありしとせば、此に其筆を擱することは有る間敷きことなり。又著者は羅馬への旅行、特に難船のことを頗る綿密詳細に記述せり。此の一事も亦、此書が該難船後、直ちに著述せられたるの一證と見るべし。且つ本書は、前にも已に言ひし如く、全巻を通じて其用語に非常の類同あり、是れ全巻一時の著作たるを證すと云ふべし。

之に加ふるに、著者が羅馬政府に對しての態度も、此書が後世の作に非ざる有力の一證なり。即ち此書は、終始羅馬の裁判官及び官吏等が基督教徒を待遇するに公平を以てしたること、否深切を以てしたることを記し、聖パウロのカイザルに對する上告を記して擱筆する際にも、心に有利の判決を期待し、書中一ヶ處も非難または惡感情の徴候を顯せる所なし。而して斯くの如きは、紀元六十四年の大迫害後

には、萬々有る間敷きことなり。是れ此時には、默示録に據りて見るに（其年代は早しと認めていふ）、基督教徒は羅馬を恐るゝこと甚だしく、證<sup>○</sup>を<sup>○</sup>作<sup>○</sup>し<sup>○</sup>者<sup>○</sup>等<sup>○</sup>の<sup>○</sup>血<sup>○</sup>に<sup>○</sup>醉<sup>○</sup>え<sup>○</sup>る<sup>○</sup>もの<sup>○</sup>と<sup>○</sup>看<sup>○</sup>做<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>し<sup>○</sup>ほ<sup>○</sup>ど<sup>○</sup>な<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>ば<sup>○</sup>なり。今之が例として、粗ぼ其事情の類似せる印度反亂事件を一考せよ。例せば、印度の一英人、此の反亂後に當り、カウソルボルの一千八百五十四年迄の歴史を書くにせよ、而して其結尾には、一千八百五十七年に起れる悲劇を豫想せる語氣を漏さず、又其反亂者に對する惡感を聊かも顯さずとすれば如何。斯くの如き歴史は即ち反亂前の著作に相違なしと斷定する外はあらず。今も亦之に同じ。即ち使徒行傳はテロの大迫害前の著作と謂はざるべからざるなり。

紀元七十年のエルサレム滅亡事件よりする論證も其種類之に同じ。即ち使徒行傳にして此の事件の後の著述ならんか、著者が少しも之を知らざるが如くなるは訝かしきことなり。況んや、此の事件は、使徒行傳記載の猶太の律法は異邦の基督教徒に効力なしといふが如き事件と密接の關係あるものなるに於てをや。而して著者は其福音書中に（路十九〇四十三）此の滅亡の豫言を記しながら、曾て此の豫言の照應を記せる所なきを以て、こは殊に注意すべきことなりとす。

是れより以後の年代を主張する多くの批評家は曰く、著者は別に第三の書を作りて其歴史を完成する意志なりしなりと。此説は著者が後の事件を記載せざる説明とはなるも、恰かも之を知らざる如くに書ける説明とはならず。又廿章以下廿八章までの事件を特筆したること、及び前陳の羅馬官憲に對す

る友情の調子等を説明するに足らず。之に加ふるに、此の第三の書なるものは純然なる想像のみ、其痕跡は少しもなく、初代の記者にして之を説ける者も一人だにあることなし。

更に又記載の價值あることあり、即ち聖ルカはアウグスト、テベリオ、クラウデオ等の諸カイザルのことを説く時は、必ず其名を擧ぐるに拘らず（路二〇一、三〇一、徒十一〇廿八、十八〇二）、又其關係ある公人のことを説く場合にも常に其名を擧ぐるに拘らず、使徒行傳の終りに記載せられたるカイザル、即ち聖パウロが將に審問を受けんとするカイザル（テロ）の何人なるかを説かざること是れなり（徒廿六〇三十二、廿七〇廿四、廿八〇十九）。而してテロの時代に著作をなせる人は、斯くの如くに、不圖其名を略することあるは、贅辨を要せざることなりとす。

之を要するに、使徒行傳は、紀元六十年頃聖ルカの著作せしものなること、其證據頗る有力なり。而してこは勿論、路加傳が是れよりも一層舊きものなるを證明す。而してこは又、馬可傳のそれよりも一層舊きものなるを證明す。是れ馬可傳即ち三重傳説の源にて、聖ルカは是れより其材料を得たるは、今日一般の人の認むる所なればなり。更に思ふに、馬太傳も路加傳よりは舊きものならん。果して然らば、使徒行傳は、一面に於て共觀福音書が紀元七十年前の著作なりとの前斷案を證明し、又一面に於ては之に一步を進め（少くとも本書の著者をして）、共觀福音書は紀元六十年の著作なりと斷言せしめんとす（此の年代は多數批評家の認むる年代よりも少しく舊し。されど尙ほ是れよりも舊き年代を認むる批



評家もなきに非ず(例せば、此の問題を非常に詳かに論せしカノン・ホルクスホルクスの如きは、其觀福音書悉く紀元四十二年より五十一年までの間に成れりと主張す)。されど、此は約翰傳の年代に取りては、直接に何の關係も非ざるなり。

### 第十七章 此故にキリストの復活は恐らく眞なるべき事

#### 第三日の復活の價值

##### (甲)叙 事

キリスト出現表

- (一) 齟 齬
- (二) 省 略
- (三) 符 合
- (四) 年代の舊き徵證

##### (乙)證 人

凡て證言の價值は證人に關する四の問題如何に關係す。而して今の場合にては此の各問題の否認は恰かも四箇の重なる説と相照應す。

(一) 彼等の誠實—彼等は其知れる限り眞實を語れるものなりや。彼等が復活を信せしは何の動機もなし、只之を信せし爲のみ。且つ彼等の行爲と苦難とは、其絶對に之を確信したりしことを示す。此故に虚言説は之を棄却して可なり。

(一) 事實に關する彼等の知識—彼等は眞偽を判知すべき便宜を有したりや。曰く彼等は其手近に充分の便宜を有し、又之を使用する丈の力量をも具へたり。此故に古譚説も亦之を棄却せざるべからず。

(二) 彼等の穿鑿—彼等は果して其諸便宜を利用せりや。思ふに彼等は其心狀激昂したりしを以て、之を利用せざりしならん。是れ即ち異象説なるが、此説には非常の困難あり。

(三) 彼等の推理—彼等は果して正しき斷案を下したりや。キリストの出現は、キリスト實際死せざりしなりと謂ひて説明するを得ざるか。是れ即ち昏倒説にして、是れにも非常の困難あり。

### (丙) 結論

基督教の復活説に存すと稱せらるる諸困難。

前の諸章に於ては、四福音書も使徒行傳も共に信實のものなることを斷定せり。換言すれば、此の諸書は實際今日普通に認めらるる人々の手に成れるなり。而して尙ほ之に附言すべきは、聖パウロの四大書翰と聖ヨハネの黙示録とが、前にも言ひし如く、各派の批評家の皆眞作と認むる所なりと言ふことは斯くの如くにして所謂キリストの教訓及び奇蹟には直接的の證言あり、換言すれば、同時代の

人の證言あり。而して其中の或者はキリストの昵近者たりしなり。例せば聖マタイと聖ヨハネとの二人は共に使徒なりき。聖マコと聖ルカとは眞偽を判知すべき稀有の好便宜を有せし人々にて、且つ多少はキリストを識れるならん。聖パウロも亦然り(哥後五〇十六)。

以下少しく彼等の證言殊にキリストの復活に關するもの、價値を講究せん。抑もキリストの復活は、眞實にせよ、眞實ならざるにせよ、基督教の基礎なり。こは四福音書に由りて明かなる而已ならず、一層多く使徒行傳に由りて明かなり。即ち使徒行傳には、使徒等が種々なる境遇の下にありて、或は猶太の議員に對し、或は希臘の哲學者に對し、或は羅馬の方伯に對し、其他種々なる聽衆に對してしたる幾多の短かさ演説あり。而して彼等は、此の演説の殆んど凡てに於て、絶對的にキリストの復活を斷言せる而已ならず、又之を不可争の證據に由りて確證せられし事實として、將た基督教の基礎として高調せり(徒二〇二十四、三〇十五、四〇十、五〇三十、十〇四十、十三〇三十、十七〇卅一、二十六〇六、卅三)。否之が爲に證をなすは、使徒たる者の特別義務なりと言へる所さへあり。聖パウロ亦之を承知したりしもの、如し。是れパウロは其使徒たる資格を主張するに當り、復活に由りて資格を得たるを説き、又自ら之を其教の主眼となすを以てなり(徒一〇廿二、哥前九〇一、十五〇十二—十九)。果して然らば、初代の基督教傳道者はキリストの復活を説きたることは確實なりとす。

而して復活は磔死より起算して第三日にありしこと、彼等の説きたるも亦確實なり(時としては三日

の<sup>〇</sup>後と記せられしことも亦是れあり。されど第三日と三日の後とは異辭同義なること、太廿七〇六十三、六十四を見て明かなり。即ち同處には、キリストの三日の後に甦らんといひし言を、第三日<sup>〇</sup>甦<sup>〇</sup>墓<sup>〇</sup>を守る理由となせり。こは獨り福音書に明記せらるゝ而已ならず、聖パウロも亦之を言へり。即ちパウロは、或處に、キリストの身体は(ダビデのそれと異にして)朽果てざりきといふ事實を基礎として其論證をなしたるが、こは聖ペテロも亦説きたる點にて、數日後の復活といふ意義此中に含めり(哥前十五〇四、徒十三〇卅五—卅七、二〇卅一)。而して此上に尙ほ證據の必要ありとせば、一週の初日を主の日(即ち基督教の日曜日)と定めたること、是れ即ち此一事を争ふべからざる事實たらしめしものなり。果して然らば、吾人は斷言するを得べし、復活の信仰せらるゝ處にては、其第三日に(第三日とは、彼等が墓の虚しきを發見し、主の最初の出現を見たる、若しくは見たりと思へる日なり)起れるなりとの事實も亦信せられたりと。要するに、復活と第三日とは兩々必ず共に信仰せられたるなり。されど此の信仰は果して根據あることなりや。こは以下講究せんとする問題にして、初めには先づ復活の叙事を調査し、次で其最初の證人の證言に及ぶべし。

(甲)復活の叙事

偕復活には總計五種の記録あり。此の五種は皆純然たる獨立的のものにて、決して甲が乙の材料となりしものと思ふを得ず。獨り馬可傳の記録は余り強く主張するを得ず、是れ其最終の數節は、眞作か否

か疑はしきを以てなり。そは兎に角、是れは非常に舊くより基督教徒の信仰せし所を代表するものにて、時としてはアリステオンは之が著者と稱せらる。然り而して、聖パウロの記録は、五種の中恐らく最も有力のものなるが、是れは事件後三十年以内の著述なること、是れ一般の認むる所なり。即ち復活の最も近眞的年代は紀元二十九年にて、書翰のそれは紀元五十四年なり。尙ほ此に一言し置くべきは、聖パウロが特にコリント人に告げしことなり、即ちパウロがこゝに復活に關して説けることは、初めて彼等に傳道せる際(凡そ紀元四十九年頃)にも説きしことなりしなり。又コリント人が之をパウロより受けしと等しく、パウロは其以前に之を他の人々より受けたりしなり。

然らばパウロが初めて之を受けし年代如何といふに、粗ぼ之を斷定するを得べし。是れ聖パウロは、幾多の出現を記したる中に、聖ペテロと聖ヤコブとへの二出現を記したる爲なり。聖パウロは他の處に、此二使徒に面會せるはエルサレムにて、其改悔後三年のことなりといへり(パウロの改悔は紀元三十五年若しくは其以前なり。ハルナツクは紀元三十年となす。即ち磔死の翌年なり)。果して然らば、聖パウロは是れより以前に聞きしことなくとも(加一〇十九)、此時には凡ての顛末を聞きしに相違なし。是れ磔死後確かに十年以内(恐らくは七年以内)のことなり。是れ已に極めて舊き證言にして、是れより舊きものは求めたりとも容易に得らるべきものにあらず。而して若し之に何等かの價値を添ふるものありとせば、そは聖パウロの此點に關する教は、元の使徒たちの教と同様なりといひし自白是れな

り、曰く、我も彼等も此の如く宣傳へ爾曹も亦かくの如く信せりと(哥前十五〇十六)。  
此に種々の記録を採萃するは要なし。只参考上便利のため之を表に顯はして左に掲ぐ。

キリストは前後總計十三回出現し給へるもの、如し。されど此他に尙ほ記録せられざる出現あるかも知るべからず(徒一〇三、十三〇卅一、約二十〇三十は其暗示かとも思はる)。但し次表の(八)(九)は、同一出現か、將た別出現か明かならず。是れ十一人のイエスを見たる時、彼等之を拜したれど、疑へる者もありきと馬太傳に記されたればなり(和譯聖書には此の彼等といふ語略せられたり)。思ふに此の意味は、此場にありし十一人以外の者(即ち五百人中の或者)等、最初眞實のイエスなるや否やを疑へりとなり、是れイエス進みてといふ語より察するに、多少離れて立ち給ひし爲ならん。げにや、此時若し只十一人のみならば、殊更にキリストを拜すとて山に往く必要はなかるべく、一個の室にて充分なるべし。されど幾多の輩、隣村より來集して、其數幾百人にも達したりとせば、廣き山が(恐らくキリストが前に屢次其説教處として用の給へる)此の集會の爲に便宜なりしならん。

キリストの出現表

哥林多前書	馬太傳	馬可傳	路加傳	約翰傳
婦人等虚しき墓に至る 使徒等虚しき墓に至る	廿八〇一八	十六〇一八	廿四〇一十一、 廿二、廿三	二〇一二、 三、十

其後キリストは(エルサレム又は其近傍にて)左の人々に現はれたり	五	六	七	八
(一) マグダラのマリヤ	九、十	九十一		
(二) 數人の婦				
(三) 聖ペテロ	十二、十三	十三一廿五		
(四) エマテの途上クレオパと他の者(恐らくは聖ルカならん)	十四	廿六一四十三		
(五) 使徒等及其他の者(聖トマス缺席せり)				
(六) 使徒(及び聖トマス)次にかりラヤにて				
(七) テマリヤ湖畔にて七人の使徒				
(八) かりラヤにて使徒等	十六一廿			
(九) 五百餘人		十五一十八		
(十) 聖ヤコブ再ひエルサレムにて				
(十一) エルサレムにて使徒等			四十四一四十九	徒一〇四五
(十二) パタニヤにて使徒等及び他の者			十九、二十 五十一一五十三	三六一十一、廿二
(十三) 聖マッコ				九〇三一九

然り而して、五百人への出現はガリラヤに於てのことならざるべからず。是れエルサレムには左程多くの弟子あらざればなり(徒一〇十五)。又是れは豫ての約束によりてせしものならざるべからず。是れ偶然に斯く多数の者の集會する筈なければなり。又彼等は使徒たちの召集に應じて來會せしものならんと思はる。凡そ是等の諸點は、之を馬太傳記載のそれと同出現なりとする副理由なり。

次に一言すべきは、キリストの出現は之を三部類に分つを得といふこと。是れなり。第一部類はエルサレム又は其近傍の出現にて、主として十二使徒に出現し、其期間は八日以上に亘れり。第二部類はガリラヤの出現にて、其中最も大切なるは五百人の兄弟への其れなり。こはガリラヤの弟子たちに對する一種の告別なりとす。之と同時に若しくは之に先だちて、使徒たちへの出現あり。思ふに湖岸の出現は是れよりも尙ほ數日前ならん。而してキリストは此の際山上に出現すべきことを豫約し、且つ兄弟を召集し置くべき時日を指定し給へるならん。第三部類は再びエルサレムの出現にて、其重なるものは十二人への出現なり。されど使徒ならざる者も此中にありき(徒一〇廿二)。斯くて遂に昇天となりしが、是れ即ちエルサレムの弟子たちへの告別なり。此の二回の告別は人往々之を難問と考ふることなきにあらず。されどキリストの復活は其天職の證據とせられたるものなれば、二回凡ての弟子等に出現し、ガリラヤの弟子等とエルサレムの弟子等に告別し給へるは、是れ自然の勢なり。而して使徒等は勿論毎回其場に在りき。

次に此の叙事を一層詳密に調査して第一に感せらるゝは、此の叙事には勿論無數の符合同もあれど、之と同時に往々齟齬もあり、省略もありといふことなり。第二は第一同様に大切なれど、それ程には明かならざるものにて、年代の舊き徴證少からずといふことは是れなり。乞ふ、順次に之を講究せん。

(一) 齟齬

出現の各記事は之を調和すること困難なるは、何人も之を認めざるべからず。されど、こは主として福音記者等が(特に聖マコと聖ルカ)、別々の出現を連続の出現の如くに記せるが爲なりとす。されど福音書の中には他にも此類のこと多く、キリストの別々の言を恰かも一講話の如くに記せると往々あり。而して脈絡貫通せる文句を分割せざるべからざりし場合も亦是れなきに非ず。例せば主人怒て其僕に曰けるは速かに邑の街衢に往きて(中路)僕いひけるは主よ命の如く行き云々(路十四〇廿一、廿二)の如き是れなり。偕て此の廿二節の言は、廿一節に次で直ちにありしもの如く見ゆ。されど此間に間隔のありしことは言ふを待たず。

此故に、馬可傳と路加傳との最終の數節は、別々の折に於ける言を記せしものなるべし。而して聖ルカ自ら此意を暗示せる所あり。是れルカは其福音書に於てはキリストの數回の出現を恰かも數時間内にありし如く記せども(果して然らんには、昇天は夜半にありしものなるべく、斯くの如きは萬々是れあるべからざることなり)、使徒行傳には四十日の間隔ありしと記すを以てなり。思ふに、ルカは其福音

書に於て、是れは別々の折の言なりと説明する必要を認めざりしならん。而して聖ルカのみならず、他の福音書記者等も亦之と同様のことをなせしとすれば、各自の間の齟齬は、よし悉皆解決せられずとも、其多數は解決せらるる言ふべし。

然るに是等の齟齬は、往々にして非常に誇張せらるることあり。例せば前表中の(五)を見よ。路加傳と約翰傳とは共に同一の出現を指せるに相違なし、是れ復活の夜にありしことなればなり。而も一方は使徒たち懼れて靈を見たりと思へりと言ひ、一方は使徒たち喜べりといへり。借問す、こは双方とも眞と認むるを得るか。然り双方とも眞と認むるを得べし、是れ使徒たち最初は懼れて、靈を見たりと思ひしも、後ちキリストが其手と脇とを示すに至り、眞實のキリストなるを確信して、之を喜びしと認定するを得ればなり(而してこの認定は極めて自然の認定なり)。斯くてキリストは坐マコの記事如く其時に彼等の不信仰を尤め給へるならん。

又叙事そのものにある預細の言が、時として齟齬を調和する緒となることあるは驚くばかりなり。例せば、約翰傳を以て見れば、マグダラのマリア獨り墓に來り、中をも見ずして馳せ去りしもの、如し。されどマリアが其時の言に我儕何處に置しや其處を知らずとあるを以て見るに、其時マリアには同行者ありしを知るべく、また中を見て遺骸のなきを發見せしを知るべし。斯くて約翰傳の記事は他の福音書の記事と相符合す。勿論後にはマリアも獨りなりしが、其時には其時の言を用ひて、我(和譯に

此語なし)何處に置しかを知らざれば也といへり(約二十〇一、二、十三)。而して聖ルカが天使のことを或時は人といひ、或時は天使といへるを見れば、他の福音書記者等が此の兩語を用ひたるを怪しむに足らざるなり(路二十四〇四、廿三)。

是れよりも一層大切なる困難は、キリストが婦人たちに對しての命令より生じ來る。キリストの命に據れば、彼等も使徒たちも皆ガリラヤに往きてキリストに遇ふべかりしなり。而もキリストは此日エルサレムに於て彼等に出現し給ふべきは、其自ら承知し給へる所なりしなり。併此の齟齬に對する最も近眞的の説明は、ガリラヤの會見は最初よりの本志なりといふこと是れなり。現に聖書に之を明記せる所あり(可十四〇廿八)。然るに婦人たちは天使たちの告に基き、其驚愕より我に歸りて後(彼等は此の驚愕のため、最初は遁げ去りて一言をも人に語らざりき。可十六〇八)、使徒たちの許に至り、ガリラヤに往くべしと傳ふるや、彼等は之を信せざりき(路廿四〇十一)。此の不信は自ら婦人たちにも反動し、彼等も亦疑惑を起すに至り、再應の調査をなすこと墓に歸りしが、其中の一人だにガリラヤに往くの意志を聊かたりとも有せしものあらざりき。

斯くの如き事情なりしかば、尙ほ何事かの起るべき必要あり。此に於てか、イエスは先づマグダラのマリアに現はれ、次で此のマリアと他のマリアとに現はれ、之に命じて使徒等にガリラヤに往けと傳へしむ。彼等之を傳へたれど、使徒等は此時も亦信せざりき(可十六〇十一)。斯くてキリストは、エマヲの

途上にある二人の弟子に現はれ給ひしが、二人歸り來りて之を他の弟子等に告げし時は、彼等も暫く之を信せざりき(可十六〇十三)。

斯くて後はもはや他にせん術なく、只キリスト自ら使徒たちに現はれ、自ら彼等を確信せしむることあるのみ。果してキリストは同夜彼等の多數集まれる際に之をなせり。思ふに、キリストは此時彼等に告げて、彼等が全く確信するまではエルサレムに止まれと宣ひしならん。是れ彼等がキリストの復活の眞否を疑ひ、互に相争ふ限りは、到底五百の兄弟をガラヤに集めざるべきを以てなり。斯くて更に一週日を費せし後は、最終の懷疑者(聖トマス)も亦確信するに至り、遂に一同ガラヤに向ひて出發せり。果して然らば、是等の齟齬は普通に人の想像する程に重大のものに非ざるなり。

(二)省略

次に省略に就て言はん、新約書中一として出現を悉く列挙せるものはあらず。而してこは人の往々困難と思考する點なり。されど四福音書だけに就ていへば、記者は何處にもキリストの出現を悉く録せりと言へる所なし、是れキリストの譬喩及び奇蹟に就ても亦然り。即ち記者は只若干の例を撰擇して之を記せるのみ。されど記者は如何なる境遇の下に著作せりや詳かならざるを以て、其撰擇の理由を知ること、又往々困難なるを免かれず。例せば、何故一福音書(第三福音書)だけが、放蕩兒の譬喩の如き美麗なる譬喩を記録せりや。又何故一福音書だけが(第四福音書)、ラザロの蘇生の如き注目すべき奇蹟を記録せりや。

き奇蹟を記録せりや。

されど出現のことだけに就ていへば、彼等撰擇の理由必ずしも知り難しとせず。例せば、馬太傳は主としてガラヤ傳道を記するものなるを以て、聖マタイは之を結ぶにキリストがガラヤ山上に出現せし記事を以てせり。又約翰傳はユダヤ傳道を記するを以て、聖ヨハネは之を結ぶに(其最後の一章の加へらるゝに先だち)若干のエルサレム出現を以てせり。次に聖ルカはエマヲ途上の二弟子への出現を記すること最も詳かなりとはいへ(其一人は若しルカ自身なりしとせば、斯くの如きは是れ自然のことなりとす)元來は歴史家にして、次第を爲して萬事を記せし人なれば(路一〇三)、丁寧に其叙事を昇天の時にまで及ばせり。

此故に福音書記者等は各々若干の出現だけを記すれども、其他の出現をも承知せしかも知るべからず。然り彼等は之を承知したりしに相違なし。例せば、聖ヨハネは昇天のことを記せざれども、確かに之を承知したるに相違なし。其理由は、約翰傳の中に二回昇天のことに言及し、人の子の昇るを見よといひ我は我父に昇ると言へばなり。此中、前者はキリストの昇天が有形的昇天にて、使徒たちは之を見んとせしものなるを示す。次に聖ルカは聖ペテロへの出現を記せざれども、偶然之に言及せることあり(約六〇六十二、二十〇十七、路二十四〇卅四)。

然り而して聖パウロの出現目錄は、是れ確かに完全を期して作られしもの、如し。随つてこは實際困

難に相違なし。即ち論者はいふ、此他に尙ほ出現あるか、或は、是れありと想像せられたりとせば、パウロは其著作の際必ず之を傳聞せる筈なり。已に之を傳聞したりとせば、必ず之を記載したる筈なり。是れパウロは出来るだけ完全ならしめんと努めたるものなればなり。パウロが婦人への出現を略するは是れ或は可なり。當時婦人の證言は左迄に貴重せられず、且つ又パウロの言ふ意義にては彼等は復活の證人にあらざるを以てなり（パウロの意義にては、復活の證人とは之を宣べ傳ふる人なり。哥前十五〇十四、十五）。されどパウロが其他のものを省略したる理由如何と。

されど是れにも相當の説明あり。元來キリストは三部類へ出現し給へることは是れ讀者の記憶せらるゝ所ならん。然るに聖パウロは別に箇人への出現二つを擧げたり。そは即ち聖ペテロと聖ヤコブへの出現是れなり。而して聖パウロの之を記したる理由は、初めてエルサレムに於て此の二使徒に遇へる時、直接に其實験を聞きし爲なるべし。若し夫れ聖パウロにして兩人の口づから之を語るを聞くことなくば、何人が之を語りとも信せざりしならんと思はる。然るにパウロは三部類にある他の者への出現をも記せることあり。第一は十二人への出現にて（エルサレムにて）、其次は五百の兄弟への出現（カリヤにて）、第三は凡ての使徒への出現なり。而して此の第三は十二人以上を意味すること明了なり（即ち再びエルサレムに於て）。斯くパウロは三部類への出現を記すれども、決して一部類毎に只一出現だけを記せんとせしにあらず。例へば、此に一人の英人ありて、英國に歸り、第一に父母に會ひ、第二に

兄弟に會ひ、第三に従兄弟に會へりといふに等し。而も實際は一週毎に二回別々に兩親に面會し、僅かに數時間だけ兄弟に面會し、數時間引續きて従兄弟に面會したるなりとも、そは妨げあらざるなり。而して聖パウロは、使徒行傳記載の一演説中に（徒十三〇卅一）キリストは多日の間エルサレムにて出現し給ひしと明言したるが、此の事實は頗る能く上説の見解を保證す。即ちパウロが哥林多書に記したる出現は、部類分けに由りてしたるものなり。出現の一々を記載せんとしたるにはあらず。而して其主意は、只キリストを見たる人數の多きを高調せんとしたるにて、其出現の度數を高調せんとせるには非ず。果して然らば、此の困難も亦解決せられたりと謂ふべし。

（三）符合

以上諸の齟齬と省略とに對して、一方には又大體上の符合といふ事實あり。是れ大切の諸點は凡て皆（第三日のこと、虚しき墓のこと、最初の出現はエルサレムに於てしたること、弟子の中に容易に信仰せざるものありしこと等）各福音書記者の證言する所なるを以てなり。之に加ふるに、各記者また一致して復活そのものことや、キリストが其敵に現はれしことや、來世の状態などを記することなし（若し假作的の記事ならんには、是等の諸點を記したることと思はる）。殊に來世の状態を記したらんには、讀者には熱心歓迎せらるべく、且つ其假作も容易なりしことと思はる。

又出現の順序も各記事皆同じ。例せば、マグダラのマリアへの出現は（其何處に記さるゝを問はず）、何



れの記事に於ても第一に置かれ、次は聖ペテロ、次はクレオバ、次は十二使徒等への出現といふ順序なり。而して各叙事は勿論獨立的にして、其順序も決して當然的の順序に非ざるが故に、此の順序の符合は殊に驚くべきことなり。例せば、小説の作者ならんには、キリストをして先づ其母か、其使徒たちに出現せしめたるならん。マгдаラのマリアの如き無名の人に之を出現せしむるが如きことは決して是れあるべからざるなり。

之に加ふるに、各叙事は互に相照せば、微細の點まで分明すること往々あり。今二三の例を擧げんに、路加傳にはペテロが天使の告を聞きて墓に駆け付けしことを記するも、何故他の人よりもペテロが駆け付けざるべからざりしか其理由を説かず。然るに馬可傳はペテロの駆け付けたりしことを記せざれど天使の告は特にペテロに對するものなりしを説けり。さすればペテロの駆け付けしは其理由明なり。尙ほ之に附言し置くべきことあり、即ち路可傳のその後の言に我儕と僧に有し者といふ言あり(路廿四〇廿四)。此言にはペテロと同行せし弟子、少くとも尙ほ一人ありし意を含みたるが、こは能く約翰傳と符合す。

又馬太傳の記事に據れば、キリストがマгдаラのマリアと、他のマリアとに出現したる時、彼等は直ちに之をキリストと認め、其足を抱き且つ拜せりといふ。而して天使の告に據れば、彼等はガラヤヤ行きてキリストに遇ふべき筈なりしに、今斯く墓邊にて遇ひながら少しも驚ける狀なし。さすれば、之に

先ちて何事かありしに相違なく、而して此の事件は八節前の記事と、八節後の記事とを分割(前にもいひし如く)するものと思はる。然らばそは如何なる事件かといふに、他の福音書によりて之を知るを得べし。即ち約翰傳に據るに、只マгдаラのマリア一人に現はれし記事あり、此時マリアはいと狎々しく、只人間の稱號たるラポニを用ひ、何等敬虔の態度なくして之に捫らんとしたる爲め、叱斥せられたりといふ。而して馬可傳に據れば、此の出現は即ち最初の出現なりしなり。果して然らば、是れより數分の後ち、此のマリアが他のマリアと共に再びキリストに遇ふに當り、少しも之に驚かず、又其態度一變して地上に跪き、其結果足を抱くことを許されて、之を拜し奉れるは怪しむに足らざるなり。

次に聖ルカに據れば、キリストの使徒たちに現はれ給ひし時、彼等は誤まつて之を靈と意へりといふ。然るにルカは之が理由を説かず、而して斯くの如きことは、只一回だけにて幾回も非ざりしことに似たり。而して聖ヨハネは如何といふに是れは此の事件を記載せざれども、能く此の事情を説明するものあり。是れヨハネは猶太人を懼るゝに由り門を閉おきしと記せばなり。キリスト已に閉門せる家の内に突然現はれたりとすれば、彼等が之を靈と意ひたるは怪しむに足らず。然り而して、聖ヨハネはキリストが其手と其脅とを彼等に示し給ひしを記し、別に其理由を説かず。然るに聖ルカの所謂彼等は最初之を靈と思ひしといふこと、其靈にあらざるを確信せしむとて斯くせしといふことは、共に能く此の事情を説明す。斯くの如くにして、各記事は互ひに相説明するものなり。

また聖マコ(或はアリストチオン)の記する所に據れば、キリストは萬國に福音を傳ふべしと命じ、給ひし後ち、「信じてパンテスマを受ける者は救れん」と宣へりといふ、されど馬可傳は是れより前に少しもパンテスマのことを謂はざるなり。然るに聖マタイの記する所によれば、此の命令は只萬國の民を弟子とせよといふにあらず、又之にパンテスマを施せよといふにありき。こは勿論かの聖マコの文句を説明す。只聖マタイが之を擧げざりしは一奇と謂ふべし。

次に聖パウロの説きたる五百の兄弟への出現に就て説かん。福音書記者は一人として之を記せるものなし。されど五百人への出現は、福音書に記載の事項に種々説明を與ふ。例せば、聖ヨハネは使徒たちが(豫期の如くに)エルサレムに止まらずして、却てガリラヤにありしことを記せり。されど何故ガリラヤに往きしかを説くことなし。又聖マタイと聖マコとは、共にキリストの彼等に命じてガリラヤに往かしめしことを記せり。されど何故キリストは之を命ぜしかを説くことなし。然るにガリラヤに集まるべかりし五百人にキリストの出現し給へることは、能く是等の諸點を説明す。加之、聖ルカが使徒たちの復活を宣傳すべき地を列擧せし中に、此のガリラヤを省略せし理由をも説明す。是れ當時ガリラヤには已に多くの證人ありしを以てなり(徒一〇八)。

猶、斯くの如き瑣末の點に、余り重きを置き過ぎて考ふるは宜しからず。而も斯くの如き簡短の各記事が、互ひに種々説明する所あるは、是れ其事實たる明證なり。若し夫れ小説的事件の假作的記事ならん

には斯く相説明する筈は非ざるなり。

(四)年代の舊き徴證

最後に一の面白きことあり、即ち是等の記事特に共觀福音書のそれは、たとひ同時代の記事ならずとも尙ほ頗る舊きものたる徴證ありと言ふこと是れなり。其一例は、聖ペテロを呼ぶに尙ほ其舊名シモンを以てせること是なり。シモンの名を用ゐて其何人を指すかを説明せざるは、蓋し此の記事を其終りとなす。是れより數年の後、聖パウロは是れと同一の出現を説きながら、其時はもはや彼を呼ぶにケバ又はペテロといふ當時の通稱を以てせり。聖ヨハネ又是れより多年の後其著述をなすに際し、精確に之を呼べりといふもの、是れは何人を指すかを説明する必要ありとなせり。「イエスシモン・ペテロに曰けるはヨナの子シモンよ」云々(路廿四〇卅四、約廿一〇十五)。

次に是等の記事に據れば、使徒たちは尙ほイスラエルの國の回復を豫期したるもの、如し。こは使徒たちの誤解にて、昇天後にありてはもはや假作せらるべき必要なことなりとす(徒一〇六、路廿四〇廿一)。

之に加ふるに(而してこは頗る意味深長の點なり)、彼等使徒は此時十一人と稱せられたり。されどこは只彼等が此の數週間だけの稱號たりしなり(太廿八〇十六、可十六〇十四、路廿四〇九、三十三)されば、彼等が斯る稱號を有せしといふことは、須臾にして忘却せられたるが如く、現に聖パウロは此時の

ことを説くに當りて、彼等と呼ぶに十二人といふ通稱を用ゐたり。さればとて此の稱號は誤謬なりといふには非ず、是れ後に十二人の補欠として撰擧せられし聖マツテヤは、終始一同と共に在りしと特別に明記せられたればなり(徒二〇廿二、哥前十五〇五)。此故に其觀福音書に十一人といふ名稱を用ゐられしを以て見るに、原記事は即ち其當時の著作なるが如し。兎に角是等大切の事件に參與せし人々の手に成れるが如し。即ち此の人々は當時使用せられたる稱號を(僅か數週間とはいへ)記憶し、容易に之を忘るゝ能はざりしなり。

尙は又吾人の知れる限りより言へば、第四福音書の記事も(其公けにせられしは、數十年後のことなれど)同じく此の當時の著作かも知るべからず。而して勿論眞實たるの徴證歴然たり。殊に此に記載せんと欲するは、或る事件を叙述する方法の頗る寫實的なることにて、例せば、弟子等が虚しき墓に至れる記事、テベリア湖岸に於ける出現の如き是れなり。記者は(無論イエスの愛せし無名の弟子なり)此の毎に常に其場に在りしは之を信せざらんとするも難し。尙ほこれに次で記載せられし聖ペテロの死狀に關する豫言は頗る漠然たり。斯る豫言は事後に假作せられしものたる筈なきたり。

更に此に記載せられし復活の種類も(勿論非常の困難を伴へども)、同時代の著作たる有力の暗示たり。抑も此の復活は、前にも已に言ひし如く(十三章)キリストの肉體の蘇生にはあらず(恰かもラザロ等の場合の如くに)、却て物質性と靈性とを一種奇妙に結合せし身體の復活なりき。斯くの如き復活を思ひ浮ぶべき材料は、舊約書にもなく、又其他の何書にもあることなし。眞に無比無類のものたりしなり。斯くの如き兩特性の結合は頗る不可解のことにて、實際經驗せるに非ざる以上(若しくは實際經驗せりと信するに非ざる以上)、何人も之を記録せんと欲するに至ることなしと思はる。

次に各叙事が聖パウロの出現目錄の謄寫に非ざること、又は之と符合せしめんと意なきことも、其年代の舊きことの一證なり。此の各叙事若し哥林多前書の公けにせられし後の著述ならんか、記者は斯くの如き大事を記するに、よも之を無視するが如きことなかるべきを以てなり。但し聖ヨハネの如き、其權威の疑ふべからざる大家にありては勿論例外なり。

最後に、各叙事互ひに調和せんとするの意なく、若しくは其齟齬を避けんとするの意なきとも、其非常に舊き著作たることを證す。げに此の記者等は、自ら實際と信せし所を有りの儘に記したるが如く、時としては頗る瑣細の事情をも記載し、少しも困難若しくは反對に對しての備あることなし。斯くの如き支離滅裂の記事は、大奇蹟の實見者は能く之を書き得べしと雖も、決して故意に偽作し得べきものにあらず。さりとて又其後に出でし古譚神話の變形の如くにもあらず。要するに、此の各叙事は、始より終まで絶対に信用すべきものゝ如し。

### (乙)復活の證人

以上已に復活の叙事の講究を終りたれば、以下講究せんとするものは、其最初の證人の證言なり。換言

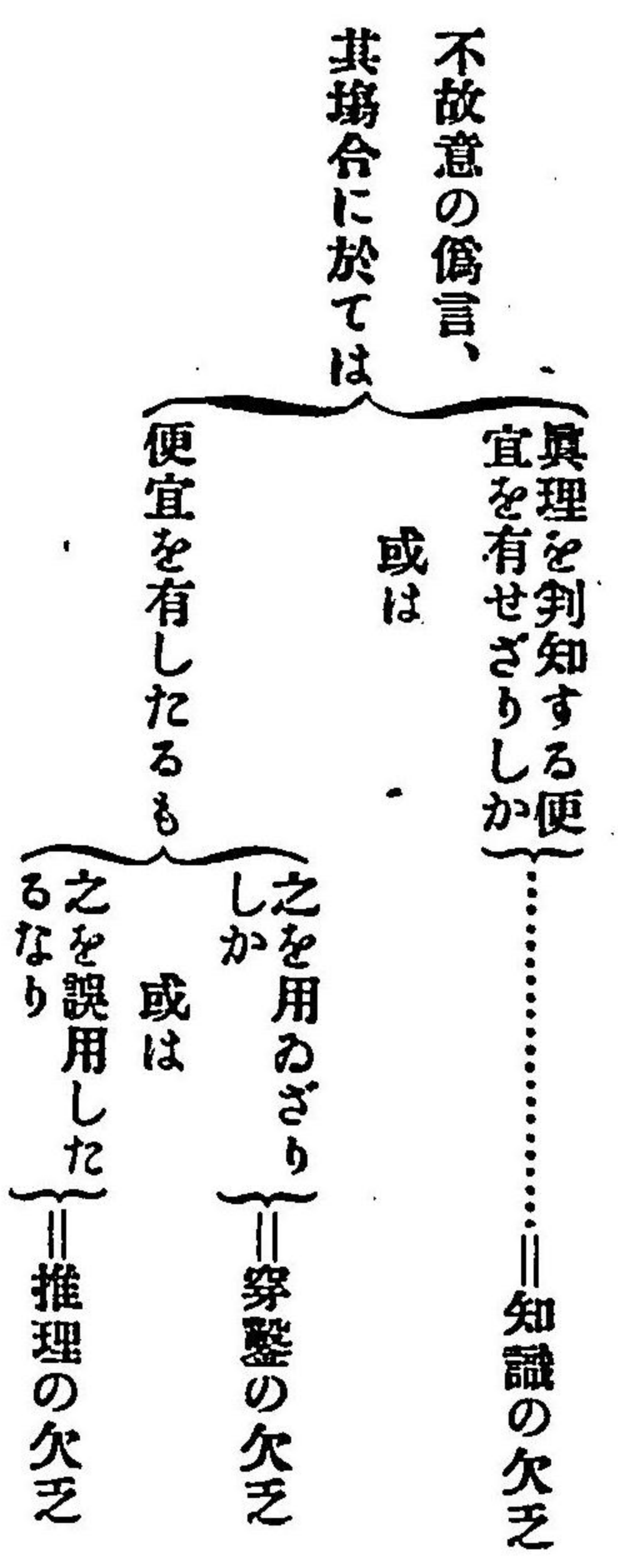
すれば、磔死後尙ほ活けるキリストを見たる者、又見たりといふ者等の証言是れなり。此中には十二使徒もあり、又五百余人の基督信徒もあり。此中の多數は、聖パウロの言ふ所に據るに、其著述の頭尙ほ生存し、随つて其記事の證明をなし得たりしなり。惜今此の人々の証言の價値を詳論するに先だち、聊か証言なるものに就ての通則若干を概知し置くを可とす。例せば此に一つの事件ありて、吾人は未だ之を事實と信せざるも、一證人は之を事實と明言するとせよ、其時吾人の第一に探究せざるべからざるは、此の證人の誠實なり。曰く、此の證人は其知れる限りの眞實を語りしや。第二は事件に關する其知識なり。曰く、彼は眞實を判知する便宜を有せしや。第三は其穿鑿なり。曰く、彼は自ら其便宜を利用せしや。第四は其推理なり。曰く、彼は當然の斷案を下せりや。

次に譬を以て此に用ひし諸語の意義を説明せん。例せば、こゝに一人ありて、自ら昨日倫敦に往けりと言ふとせよ。通常此人に就て取調を要する點は其言の誠實なるや否やの一事にあり。又此人は盲人なりしとせよ、さすれば吾人は自ら其人の知識を調査し、其場處の倫敦なりしや否やを判知する便宜を有せしや如何と講究せざるべからず。次に此の盲人には斯る便宜ありしとすれば（例せば信用すべき友人の同行ありしとすれば）、尙ほ其穿鑿に就て探究せざるべからず、即ち盲人自らは是等の便宜を利用せしや如何と。或は盲人自ら之を倫敦と確信し、之を友人に質問せざりしかも知るべからざればなり。尙ほ此人は兒童なりしと假定せよ、さすれば其理性に就て一應の取調を要す。即ち彼は其見聞に基き

て當然の斷案を下し得る程に充分の教育を受けしものなるや如何と。

次に注意すべきは、人の言の眞理ならざるは必ず左の各項の何れかに該當する爲なりといふことなり。即ち人の説若し眞理ならずば、必ず左の一ならざるべからず。

故意の偽言……………|| 誠實の欠乏  
或は



是に由りて之を觀れば、人の説を否定せんとするに當り、其誠實、知識、穿鑿、推理の如何を取調べざるは、猶ほ一の角度が他の角度よりも大なるを否定せんとするに當り、之と同様か將た小さきかを取調べざると同じ。以下吾人は此の通則をキリスト復活の証言に應用せんとするものなるが、後にも説く如く、此の四點を否認するは即ち四大反對説の何れかに該當す。

(一) 証人の誠實

最初の証人等は皆断言すらく、キリストは死より甦りて彼等に現はれたり。こは前にも論せし如く不可争のことなり。此故に第一に起るべき問題は彼等の誠實に就てなり。曰く、彼等は自ら眞實に之を信せしかど。而して彼等は誠實ならざりしと言ふは、即ち是れ虚言説を取るに當る。虚言説とは彼等証人は故意の詐欺者なりとの説なり。彼等は主の死より甦りしに非ざるを知り且つ信じながら、其生涯をかけて之を人に信せしめんとせりとの説なり。されど後段に記する如く、彼等の動機と行爲と特に其苦難とは、皆痛く此説に反對す。

第一に彼等の動機に就て言はん。借問す、彼等がキリストの復活を断言せしには、何等かの利益ありしことなるか、只之を信せし爲に非ざるかと。而して單に彼等には何の利益もなかりしといふは、未だ問題の真相を言ひ盡さざるものなり。是れ彼等の動機は皆此の反對を示せばなり。試みに思へ、彼等は多衆にあらず、其主の磔殺を妨害する能はざりし程に其人數乏しく、其意氣沮喪し居たるなり。果して然らば、世界に其主の復活を傳へんとすればとて何の好機會を得らるゝものぞ。又何故彼等は斯くの如き絶望の方策を取らざるべからざりしや。曰く、主の復活と超自然の助力とを確信するに非ざるよりは、彼等は之を断行するに至るべからず。果して然らば、彼等は復活を事實と信じたればこそ、之を人に傳へんとの動機を有せしなれ。然らざれば敢て之をなさざりしならん。此故に使徒たちは利害關

係なき証人といふ意義にて公平の証人とは言ふを得ざれども、之がために又却て其證言は價值あるものなり。是れ彼等の利益は一箇の私利には非ざりしを以てなり。

次に彼等の行爲に就て言はん。曰く、彼等の行爲は其自ら口にする所を眞實信仰せしことを示すや否や。然り彼等が之を信せしことは其證據歴然たり。抑も彼等の主の磔殺せらるゝや、弟子一同沈鬱と失望とに満たさるゝに至りしは、是れ何人も皆認むる所なり。こは併しながら自然の勢なり。然るに數日の後には、此の憂愁は一變して大喜悅、大信任と化しぬ。斯くて彼等は主が現に磔殺せられ給ひし其地にて復活を宣傳し、猛進世界を教化して、之を其名に入れんとせり。夫れ斯くの如き大變化の起るには、之に先だちて彼等は兎に角復活のおほくの證據を得たりと思慮せしものならざるべからず。而して聖ルカの言ふ所に據れば、實際彼等はおほくの證據を得たりしたり(徒一〇三)。兎に角彼等に取りては其證據動かすべからざるものと思はれしなり。然らざれば、基督教は夙くもカルバリ山上にて滅亡せしならん。

之に加ふるに、斯くの如き異常の事實を説くに方りては、此の最初の証人等必ずや普通以上の嚴密なる質問を受けしならん。特に羅馬の如き、コリントの如き教育ある都會に於て然りしならん。即ち何れの都會にても、少くとも若干の人々は、あらゆる手段を盡して眞否を検出せんとしたるならん。而して詐欺者は斯る尋問に答へ、若しくは抵抗するを得ざりしならん。然るに聖パウロの書翰の證明する所

に據れば、三十年以内に復活は是等遠隔の都會に於て多數の人に信仰せらるゝに至れりといふ。而して非常に大切なることは、其教育ある人に信仰せらるゝに至れることなり。是れ聖パウロの推理法、特に羅馬書のそれは論法難解なるに、讀者は能く之を解し得るものと聖パウロは看做せしを見て知るべし。

されど斯くの如きは、尙ほ事の全体には非ざりき。是れ此の最初の證人等が新宗教を傳ふるの行爲は、生涯の苦難迫害を招きたりしを以てなり。而してこは頗る大切のことなり。是れ隨意的の苦難は其大小如何を問はず、皆其人の誠實の確證なるに、其極端なる殉教の如きにありては殊に然るを以てなり。人は自ら虚偽と信することの爲に苦難を甘受するものに非ず。已に苦難を甘受する以上は、其人は之を眞實と信するものならざるべからず。さればとて、こは勿論其事が實際眞實なるを證すといふには非ざるなり。偕何れの宗教にも殉教者あるが故に此種の證據は何ものをも證明せずとの反對說あれど、右に説ける所は之が答とするに足る。即ち此種の證據は凡ての點の證明に非ざるも、必ず何事かの證明なり。換言すれば、殉教者の信せし宗教は眞實なることを證明せざれど、彼等が之を眞實と信せしことを證明す。此故に此種の證據は其人の誠實に就ての確證なり。

果して然らば、基督教最初の證人等は、其傳へし眞理のため苦難を受けし證據ありや。然り之が證據は福音書にありても(太十十七、可十三〇九、路廿一〇十二、約十六〇二)、使徒行傳にありても、聖パウ

ロの書翰にありても、完全且つ不可抗なり。此中、今は只最後の聖パウロの書翰だけを講究すれば足れり。是れ其眞作たることは異論なきを以てなり。僭パウロは或處に其自ら受けたる苦難を列擧せり。又他の多くの處にも之に言及して、之を當時の基督教徒たる者の普通の運命なるが如く言做せり。又他の一文には、長々と種々の苦難を列擧し、他の使徒たちも己れと共に此の苦難を受けしものにて、彼等は之がため全世界の觀玩にせられたりと云へり。又更に他の處には、一層初期時代の基督教徒が受けし苦難のことを説けり。是れ聖パウロ自ら其改悔前甚しく神の教會を迫害し、且つ之を殘賊せりと明言せるを以て知るべし。(例せば哥後十一〇廿四―廿七、羅八〇三十五、哥前四〇九―十三、加一〇十三)。

此他に尙ほ證據の必要ありとせば、羅馬のクレメントの書翰は其一なり。同書の眞作たるは勿論にして、紀元九十六年頃の著作なるが、多分は紀元六十四年キロ時代のことなるべし、聖ペテロと聖パウロとの苦難及び殉教のことを記せり。又タンタスも其當時基督教徒の受けたる殘酷なる迫害を記す。

斯くの如くにして、最初の證人等が絶えず苦難を受けしことは一點の疑なし。而して人の苦難の生涯を撰ぶは、即ち其確信の爲に外ならざるも是れ亦確實なり。果して然らば、前述の如く苦難を甘受せし人々は、皆是れ宗教を眞實と信せしために、且つ此の信仰の根本には、必ずキリストの復活といふこと存したりき。要するに、彼等の行爲のみにて彼等の誠實は充分證明せられたりと謂ふべし。是れ

詐欺者は決して彼等の如き行爲をなす筈なきを以てなり。此故に吾人は結論す、彼等がキリストの復活を断言せるは、正しきにもせよ、正しからざるにもせよ、其眞實と信せし所を正直に断言したるものなりと。

此の信仰は決して先天的推理の結果には非ず、只キリストが死後尙ほ活けるを實見せしと信する證人よりの感化に由る。此に於てか吾人は更に結論せざるべからず、此の證人等は、自ら新約に記載したる通り、正直にキリストの出現を信したるなり。換言すれば、新約の記事は故意的の偽言に非ずと。

以上は證人等の誠實に就て論じたるものなり。而してこは近代の復活反對論者も之を否定せざるを常とす。然るに事情を知るに最も便宜なりし古の時代には、こは唯一の論法と看做されたりしなり。即ち聖パウロの如きは、力を極めて明言すらく、キリスト若し甦らざば、己れも又他の使徒も共に妄の證をする者なり、普通の言にていへば虚言者なりと(哥前十五〇十五)。即ちこは彼等に取りて唯一の途にて、彼等は其眞實と知れるものを傳ふるか、偽と知れるものを傳ふるの外なかりしなり。而して異象昏倒其の他の原因より生ずる誤謬あらんといふが如き思想は、彼等の全く思ひ寄らざる所なりしが如し。

## (二) 證人の知識

次に證人の知識に就て論せん。曰く、彼等は果してキリストの死より甦りしや否やを判知する便宜を

有したりや。若し彼等に此の便宜なかりしといはば、そは即ち古譚説を取るに當る。所謂古譚説とは、今日の福音は眞實のものに非ず、只其後に出でし古譚を記したるものなるが故に、最初の證人等は事の眞否を判知するの便宜を有したりや否や共に詳ならずとの説なり。されど此説の如きことは萬々あるべからざるごとなり。是れ基督教は非常の速力を以て、以太利、希臘、小亞細亞その他に傳はりしを以てなり。而して斯くの如くに諸方に散亂せる基督教團體が、後世の古譚的基督傳を聞き、其最初に聞ける所とは甚だしく相違せるを知りながら、尙ほ之を承認することあるべきや。萬々是れなかるべし。若し夫れ今日の福音書の眞實を認め、且つ各記者の誠實を認むる以上は(この兩點は共に已に認められし所なり)。古譚説の如きは論せずして可なり。

讀者は記憶するならん、キリストは其磔死後其靈を以てに非ず、其身體を以て出現せりとば、此の各記者の断言する所なることを。而して彼等の記事を以て見るに、彼等は此の眞否を發見するに必要な便宜を充分有せしものなるは明なり。但し彼等が此の便宜を利用して之を發見せしや否やは、自ら別問題なりとす。只彼等は充分の便宜を具へ、其欲するがまに之を利用して得る資格ありしことは、決して疑なきことなり。或人巧みに之を説いて曰く、キリストを見奉れるは一人にあらずして多人なり。此の多人は別々に見たるのみに非ずして、又同處にて見たるなり。只暫時だけ見たるのみに非ずして、又久しき間見たるなり。只夜間のみならずしも又晝間も見たるなり。只遠方のみならずして又間近に

て見たるなり。只一回のみならずして又數回見たるなり。只見たるのみならずして又之に觸れ、之と共に歩み、之と言を交へ、之と語り、其答を聞き、之と共に食ひ、其身体を檢して疑惑を晴らせしなり。之を要するに、此の證人等の手に成れる記事に據れば、キリストは彼等をして其復活を確信せしむる爲有らん限りの方法を盡くし給へるなり。

且つ夫れ福音書は眞實ならざるにしても、古譚説は尙ほ成立すべからず。是れ聖パウロも亦幾多の出現を記載したるが、こは事件後僅々數年内のことにて、其間に古譚發生の暇なきを以てなり。さればとて、此の顛末は口より口に傳へらるゝ間に變化する(斯くの如きは往々あることながら)機會もありしに非ず。是れ前にも已に言ひし如く、聖パウロは、目撃者より直接に出現の次第を聞きしものなるを以てなり。果して然らば、哥林多前書は事件後十年内の著述たると廿年内の著述たると、左迄の關係は非ざるなり。而して聖パウロは哥林多前書には之が詳狀を記せざれども其説教の際には細かに之を説きしに相違なく、而して是は恰かも福音書記載のものと同種類なりしは、何人も之を疑ふを得ざるなり。之に加ふるに、聖パウロは教育ある人なるを以て、欺騙に陥れらるゝ筈なく、現に其語氣を以て見れば、丁寧な事實を穿鑿し、且つ其中に如何なる困難の胚胎するかを承知したるが如く、若し偽ならば、之を斷言するの責任大なることをも覺悟したりしなり。果して然らば、聖パウロの證言は何れの點より見るも非常に價值ありて、古譚説とは絶対に相兩立せざるものなりとす。

### (三) 證人の穿鑿

證人の穿鑿とは、前にも已に説明せし如く、自ら其口にすることの眞偽を判定するため、自ら有するだけの便宜を利用するをいふ。而して今此の證人等は何れと言ふに、何れの點より見るも、之を利用したる如し。是れキリストの復活は、彼等證人に取り、非常に大切のことにて、之がため其生命を賭する程の意氣込ありしことなるが故なり。且つ又其眞偽も容易く判定し得ることにて、彼等は之を判定する便宜にも欠くる所あらざりしなり。斯る事情なるを以て、彼等若し穿鑿を盡さざりしとせば、彼等の心狀一種特別にして、熱心、感激、其他此種の狀態にありし爲ならざるを得ざるなり。

斯くして彼等は穿鑿を盡さざりしといふは、即ち異象説を取るに當る。所謂異象説とは、使徒たち主が必ず其死後出現すべきを豫期し、常に主を思ふて止まず、目には之を見ざれどもいと近く存するが如くに感じ、其結果暫らくの後は實際之を見たるが如くに思ひ、死より甦り給へりと解するをいふ。要するに、願望は思想の親なりしが如し。されば想像的出現の起るや、彼等は主の御前にありと感じて喜に堪へず、其目に見たる出現は眞實か將た單に彼等の想像に基づくかを極めず、之が取調を怠れり。是れ即ち異象説の大意なり。

此説に就て論せんに、如何に正直の人にて心身病的の狀態にある時は、是より腦髓に一個の影像を生じ、之を外界の實物と誤まることあるは勿論認めざるべからず。即ち斯くの如き主觀的異象は、普通と



いふには非ざれども、又決して絶無にはあらず。而して此説の有する一便宜は、勿論此の復活を説明するに當り、一面其眞實を否認し、一面其證人を故意の詐偽者とせざる點にあり。即ち論者はいふ、兩方の困難を避くるの途蓋し此にあり、即ち一方には證人等其口にせし所を正直に信仰せるを認め、又一方には彼等その想像上より起れる出現を眞實の出現と誤想せりと言ふを以てなりと。

以下少しく此の異象説は、彼等證人の書ける復活記事と相適應するや否やを講究せしめよ。偕此の記事は後にも記す如く、寧ろ此の異象説を排撃する目的にて著作せられたるかとも思はるゝばかりなり。第一に、此の著者等は、決して異象に無經驗のものには非ず。否、時としては彼等又は他の者の見たる異象を記録せることもある程なり。されど斯る場合には、氣を喪へる心地といふが如き相應の言を用ゆるを常とす(徒十〇十、九〇十、十六〇九等)。然るに福音書には、キリストの出現を記するに一も斯る言の用ゐらるゝを見ず、却ていつも實際の事件なるが如くに記録せられたり。

之を聖パウロに就て言はんには、彼は時々顯現と異象とに遇ひしことある人なり(例せば哥後十二〇一、徒二十二〇十七)。又彼は傳道界に入るに先だち、ダマスコ近傍にて主の一大出現に遇ひ、之に由りて使徒の資格を具ふるに至れる人なり(哥前九〇一、加一〇十七)。されど彼は曾て此の兩者を混淆せしことあらず。彼は此の出現を以て確かにキリストの身体の實出現となし、靈の出現とはなざりしなり。其理由は彼曾てキリストは死して葬られ、又甦りてケバに現はれ云々と言ひしことありて、こはキ

リストの身体を指して言へるものならざるべからず(是れ靈は葬らるべきものに非ざればなり)。而して彼の意味にては、死して葬られし身体と、後に墓を出で甦りて彼を初め他の人々にも自身にも現はれし身体とは同一なりとするものなるを以てなり。而して彼は此の出現を天の現示といへることもあれど(徒二十六〇八、十九)、その場合にすら、尙ほ之を以て神が死者を甦らせ給ふを信するの證據となせり。是れ又その目に見たりと思へるものは、即ち墓より甦れる身体なりしを示すものなりとす。げに復活といふ言は、之を靈に適用するとせば無意義なり。是れ一旦墓に葬られしものにして初めて甦るを得るを以てなり。

之に加ふるに、聖パウロは朽果てざるキリストの身体を朽果てしダビデの身体に對照せしことあり。是等凡ての點よりして考ふるに、聖パウロは四福音書記者と同様、所謂肉体的復活を信せしものにて、其意義は、キリストの身体再び活氣を得て墓を出でたりといふにあり。されど又四福音書記者と同様其身体は自然の常法に支配せらるゝ、自然的身体に非ず、或程度までは靈の特性を具へたることを信じたりしなり。

第二に使徒たちは、キリストの出現を豫期せしことなく、却て非常に之に驚きたるは、凡ての記事を見て明了なり。只キリストが之を豫言し給へるを思ひ出せしは、是れ後のことなるのみ。さらば、如何にして彼等が出現を豫期せざりしを知るかといふに、(第一)は基督信徒等キリストの遺体に沐んとて香

料を持參せるにて明かなり(可十六〇一、路廿四〇一)。遺体は墓中に存留すと思ふに非ざるよりは、人は之に沐るものに非ざればなり。又(第二)は其出現の記事を見て明かなり。此中、或る出現には全く其詳記なきものあり、故に之を判断するの手段なし。されど詳記あるものに就て見れば、只ガリラヤ山上のそれを除き(又二人のマリアへの出現も恐らくは然るべし)キリストの出現は全く意外に出でたりしなり。即ち一人も之を期待せしものなく、一人も之を豫想せしものなし。さればとて、此の出現は其熱心より醸出せらるべき種類のものにも非ず。却て其多數は、單純、平易、又殆んど瑣細といふべき性質のものにて、熱心より醸出せられたるものとは甚だ異なり。又其然らざるものにありても、使徒たちが豫想するらしきものに非ず。例せば彼等は猶太王國の回復を切望せるものなり。然るを異象出現して、往いて萬國の民にバプテスマを授けよと命ずるを豫想するが如きこと是れあらんや。

(第三)に熱心に原因する主觀的異象は、決して第三日といふが如き短時間開始まるべきものに非ず。弟子等、磔死事件の狼狽より恢復し、此の耻辱は畢竟神の設計の一部分にて、頓て復活の起るべきを解(恐らくは昔の豫言を研究したる結果)するには、是れよりも遙かに長時間の必要あり。且つ夫れ斯くの如き異象は只短時間だけ繼續すといふことも是れあるべからず。而も聖パウロへの出現だけを除けば、皆僅々數週間内の出來事のみ。而して彼等證人の熱心は、其生涯を通じて繼續したるぞかし。斯くの如くにして急速に初まり、急速に絡結せる出現は、共に甚だしく異象説に反するものなりとす。

(第四)は極て驚くべき點なるが、それは即ちキリスト弟子等に現はれ給へる際、弟子等最初は之を認知せざりし場合往々ありしこと是れなり。例せばマゴダラのマリアの場合、クレオパと其友人との場合、テヘリア湖邊の弟子等の場合の如き是れなり。されど彼等若し復活の主を見んことを熱望豫期して、見ざるものを見たりと迄思ふ程なりとせば、直ちに之を認知したるべき筈なり。然るを彼等が之を認知せざりしは、全く異象説と相矛盾す。此故に異象説若し眞ならば、少くとも此の三出現の記録は故意的偽言に相違なし。是れ何れの場合にも其不認知は該出現談の要部となれるを以てなり。

(第五)は、弟子等の中或者は最初復活を信せず、若しくは疑へりと記せらるること屢次あること是れなり(太廿八〇十七、可十六〇十一—十四、路廿四〇十一、廿七、約二十〇廿五)。こは大切の點なり。何となれば當時此の問題に關する意見二派に分かれたることを示し、随つて彼等は事實を發見する爲め、あらゆる便宜を利用せしことを殆んど確證するを以てなり。之に加ふるに、彼等の或者は、他の已に確信するに至れる後までも、尙ほ疑を懷き、特に聖トマストマスの如きは、非常の確證を要求せる程なり。聖トマスの心狀の如き、是れ確かに熱心家のそれに非ず。是れ彼は復活を豫想せるもの、如くに之を確信するとなく、却て非常の困難を経て初めて之を信するに至れるを以てなり。げに是等の記事を以て見れば、最初の證人等は、殆んど皆信仰の止むべからざるに至り、初めて復活を信仰したるなり。此故に異象説若し眞ならば、今日の記事に全く虚偽の附録を附せざるべからざるなり。

(第六)に主觀的異象は同時に幾多の人々に現はるゝものに非ず。人々一己の幻想は(其夢と同様)一己限のものなり。即ち幾多の人々が同時に同一の夢を見るときは非ず。然るを況んや、同時に同一の主觀的異象を見ることをや。兎に角、此に記載の如き異象即ち或一人が多くの人々の間を歩み、又語るといふ異象を見ることをや。此の異象は、コンスタンチンの軍勢が空中に光り輝く十字架を見たるといふ異象、西班牙が其先頭に保護者(聖ヤコブ)の騎し行くを見たりといふ異象、其他世上に傳へらるゝ此類の幾多の異象とは異なりとす。

然るに福音書に記せらるゝものと多少相似たる主觀的異象は極めて稀なり。或は、一萬人の中の一人に、一生涯に只一度起るかも知るべからざる程のものなり。然るを同時に二人のものが之を見るときは、是れ信じ難きことなりとす。更に同時に十數人またはそれより以上の者が、斯る主觀的異象を見るときに至りては是れ論外なり。尙ほ之に附言すべきは、福音書にはキリスト在席者全体に見へたりといふ意味常に含めることなり(勿論その中には其キリストたるを疑ひし者はあれど)。斯くの如きは他の所謂異象なるものには通常なきことなりとす。

(第七)に此異象説は福音書記載の事實の多くを説明するに足らず。其事實とは、福音書が故意の偽作ならざる以上、決して疑ふを得ざる筈のものなり。例せば、人、墓に至りて遺体は其處にあるを知らば、其虚しきを見たりと信せんとすとも、是れ自ら欺かすしては信する能はざることなり。主は只想像上

存在せしのみならば、我は主に押り、主の足を抱けりと信せんとすとも、是れ何人も信する能はざることなり。是れ主に押らんとすれば、必ず自ら其誤謬を發見すべきを以てなり。又主が食を取れることを見る筈もなし。是れ主觀的異象は、夢と同様食物消失の理由を説明する能はざればなり。又單の異象がパンと魚とを取り、之を人に與へて食はしむる筈はあらざるなり(太廿八〇九、路廿四〇四十三、約廿一〇十三、徒十〇四十一)。

之に加ふるに、此の出現に於ける會話は如何に説明すべきや。而も會話は出現毎にありたるぞかし。即ちキリストは單に出現して、而して後消え亡せしといふことはあらず。却ていつも語り給ひ、時としては非常の長時間に涉りて細々と教を垂れ給ひしことあり。是等凡てのことは單の異象がなせりと想像するを得るか。例せばエマオの途上に於ける出現の如きは、是れ單の異象たることあり得べきや。果して然らば、是等種々の點より、又その他凡ての點より見て、異象説は成立の見込なきものなりとす。

(第八)に此異象説には固有の一困難あり。而してこは聖書の記事の如何には關係するものにあらず。只キリストの遺体の埋葬所は明白にして且つ附近なりしに拘らず、此の遺体を提出するは、猶太人等の力の及ばざる一事たりしといふに存す。是れ遺体にして若し終始彼等の眼前に横はらば、弟子等如何ほどの熱心ありたればとて、之を復活せりと(食ひ、語り、又歩めりと)言ひ得べきに非ざればなり。此

故に遺体の現在も、又其紛失も、共に熱心に原由する主觀的異象説とは相兩立せざるものなり。遺体若し發見するを得ば、猶太人等は寧ろ之を提出すべく、窃取せられたりとの風説を偽作するが如きことあらじ。されど若し發見するを得ざりしものとせば、弟子等の奸計之を他處に移せるなり。熱心之を移せるにはあらざるなり。

尙ほ此の風説に就て一言し置かんと欲することあり、それは聖マタイが此の風説、猶太人の間に行はれしと言へることは是れなり。又バレンスタン土着の人たるジャヌチン・マートルも、其當時此の風説の尙ほ行はれしことを説けり。而して斯くの如きは、事の性質上あり得べきことと思はる。是れ猶太人は所謂復活説に對して何等の對抗運動をもなさざる筈なければなり。而も彼等若し遺体を提出する力なくば斯る風説を傳ふるの外取るべき道なし。随つて斯くの如き風説は必ず行はれしことと思はる。されど聖マタイ以上の福音書記者等は、異邦人の爲に著作して猶太人の爲にせしに非ざれば之を記載せず。されど此の風説の弱點は言はずして明かなり。其理由は、番兵等弟子等の來りて、遺体を盗み去るを見るは難かりしことは是れなり。又彼等は其の寢たる時に竊まれしなりと語れりとせば、其果して然るや否や、却てキリスト自ら出で來りしに非ざるや否や、彼等實は之を判断する能はざる筈なり。之に加ふるに、殊更に遺体守備のため配置せられし番兵が睡眠せること、いひ（特に嚴格の訓練ある羅馬兵が）（太廿八〇十四）、而して遺体の竊み去られしこと、いひ、又大石を轉さば必ず音を發したるべきに、然

ること、いひ、何れにしても非常に近眞的ならず。その他、遺体にして若し倉卒に竊み去られしとすれば、糸布の丁寧に其處に残され居たりといふも訝かし。されど斯くの如きは余り瑣細のことにて、偽作する程の價値なきものなり（路廿四〇十二、約二十〇七）。

果して然らば、此の風説の證明する所は他なし（されど此は其風説に確證せられしこと勿論なり）遺体は殊更に守備せられたるに、其入用の際には紛失して發見するを得ざりしといふことは是れなり。而してこは獨り異象説に對する有力の反證たるのみならず、基督教復活説以外の凡ての説に對する反證なり。夫れ復活の初めて公けにせらるゝや、猶太人の之に處すべき最明最確の對抗策は、即ち遺体を提出するにありき。然るに彼等が之をなす能はざりしは、基督教復活説の有力なる證明なり。げにや墓は虚しく、而して此の理由を説明せんとする諸説は皆失敗せり。是れ即ち使徒たちが初めて復活を説ける際、多数の改悔者を得たる所以の一理由なるべし（徒二〇四十一）。

此に記憶せざるべからざるは、改悔者の續出即ち基督教の設立は、要するに是れ説明を要する事實なりといふことは是れなり。使徒等がキリストを見たりと自信したることは、異象説にても之を説明するを得べし。されど彼等が此の信仰を以て他を確信せしめ、（特に遺体が墓中に存したらんには）此の基礎の上に教會を設立するを得たることの如きは、是れ異象説の説明する能はざる所なり。其理由他なし、單の異象は猶ほ幽霊の話と同様、無に始まりて又無に終るべきものなればなり。今夫れ復活も亦無に

始まれるものとせば、其終りの斯くの如く偉大なる理由は、之を如何に説明すべきや。

之に加ふるに、彼等のキリスト復活に關する信仰若し誤謬ならんには、如何ほど成功したりとも、キリストに關する從來の希望及び見解に復せしむるに止まるべし。即ち彼等をしてキリストは猶太人のメッシヤなるを確信せしむることあるべきも、世界の救主なるを確信せしむることは、よも是れあらじ。之が爲には只復活だけにては不足なり、之に加へて更に復活後の教訓あるを要す。少くとも、斯くの如きは吾人の之に就ての説明なり。其他には解釋の方法ありとしも覺えざるなり(太廿八〇十八—二十、可十六〇十五、路廿四〇四十七)。

以上の諸論證を括約して斷案を下さん、曰く、異象説は何れにしても頗る不近真なり、若し之を承認せんとすれば現存の復活記事全部を虚偽と認むるのみならず、又之を故意の偽作と認めざるべからずと。されど斯くの如き假定を設くる程ならば、これは最早無要の説なり。此説の目的は、記者の誠實を傷害せずして、復活を説明せんとするにあり。而も此説は能く之を爲すに堪へず。要するに、記者若し正直に現存の記事或は少しにても之に似たる記事を信せしものとすれば、異象説は成立するを得ざるなり。

人或は聖パウロへの出現だけは、此の異象説にて説明するを得んと思ふべきも、之をさへ充分には説明するを得ず。夫れ肉体的盲目は主觀的異象より起るべきものに非ず。又願望は思想の親にて、キリスト

トを見んどの豫期切望は、遂に彼をしてキリストを見たりと感せしめしと言ふべきも、これは聖パウロには有る間敷きことなり。夫れ聖パウロは公然の敵にして、又大なる學力を有せし人なるに、一朝キリストの出現に接し驟然悔改せし人なり。又彼は敵味方双方の一切の證據を調査する便宜を有し、其改悔に由りて失ふ所あるも得る所なかりし人なり。此故に聖パウロの改悔は全く是れ復活の有力なる證據なり。況んや、復活は争ふべからざる事實たるに於てをや。

次の項目に移るに先だち、簡短に論じ置かんと欲するは、異象説より變化せし他の一説なり。此説は近年に至りて提出せられたるものなるが、其主意は、神、使徒たちを勸めて福音宣傳を繼續せしめ給ふとて、奇蹟的に眞實の異象を送りしが、使徒たちは之を見たるなりといふにあり。されど此説は普通の異象説の有する殆んど一切の困難を有し、尙ほ其他に幾多の困難を有す。其理由他なし、此説は超自然を認むるには相違なきも、而も此の神來の異象たる使徒たちを誤解に導びきし恐れあり、即ちキリストの遺体は實際墓中にありて、腐敗しつゝありしに、尙ほ墓より甦り、斷じて朽果つることなしと考へしめしものなるを以てなり。斯くの如き説は殆んど此に之を論ずる必要なし。神若し苟も奇蹟を行ひ給ふか、若しくは超自然的異象を與へ給はば、必ずや人をして眞實のものを確信せしめんとし給ふべく、虚偽のものを確信せしめんとし給ふことは非ざるべし。

#### (四) 證人の推理

最後に論すべきは推理の問題なり。使徒たち磔死後に於てキリストが尙ほ活けることを實際目撃せりと認め、借こゝに問ふべきことあり、即ち彼等が之を主の復活となせしは、至當の斷案なるや如何といふこと是れなり。之に反對したる説に云ふ、キリストは死せしに非ず、只十字架上に氣絶したるのみ。斯くて其取り卸さるゝや、漸次正氣に復したりと。是れ即ち昏倒説にして、此の説を證すとて論者は曰く、人は磔殺に係れりとも、通常はキリストの如く速かに絶命するものに非ず、ピラトがイエスの已に死るを奇みとあるにても明かなり。されば當時未だ精確なる検屍法の具はらざりし時代とて、キリストも死者と誤認せられしものなるべし。之に加ふるに、キリストは其後涼しき巖窟内に置かれたれば、恐らく正氣に還りしものなるべく、斯くてキリストが其處を出で其友人たちを訪へるは蓋し勿論のことなり。而して彼等迷信の徒は、已に或意義に於てキリストを神と認め、又恐らくは多少復活をも豫期せしことなれば、直ちにキリストは復活せるものと斷定せり。其時キリストは非常に衰弱したりしを以て、恐らく食物を求めしなるべく（路加傳に據れば、果して然り）、又公然猶太人に出現することをも敢てせざりしならんと。而して論者は之に添へて云ふ、此の最後の二點は實際のキリスト復活説にては充分之を説明するを得ざるなりと。

借此説に就て言はんには、人の磔死後蘇生すること往々あるは（友人の丁寧なる介抱を受けし場合に）之を認めざるべからず。而して此の説の有利の論點は、勿論かの異象説のそれと相同じ。即ち此の説は一面復活の事實たるを認めず、又一面證人等の故意的虚偽を認めずして、能く福音書記載の出現を説明し得と稱せらる。されば、此説を以て見る時は、彼等證人は實際絶命せざりしキリストを復活せるものと考へ、以て自ら欺けるなり。随つて彼等はキリストを介抱して之を正氣に復せしめたるには非ず、キリスト自ら蘇生したるものならざるを得ず。此一點は蓋し此の昏倒説に取り重要な點なりとす。其故他なし、キリスト若し十字架より取り卸され其友人等に下附せられし後、全く絶息せざること發見せられ、丁寧の介抱と營養とにより漸次回復に至れるものとせよ、成程是れにても或意義に於て出現の解釋とすべからざるには非ず。されど是にては彼等基督信徒は、キリストの絶息せざるを知りながら、死より甦れりと唱ふる詐欺者となり、彼等が墓參に關する諸の物語は、皆故意の偽談となるを以てなり。されど若し上説の點を認むとせよ、さすれば自ら此の困難を免かるゝを得るなり。

果して然らば、此の昏倒説は如何様に實際の事情に當て符まるかといふに、例ひ其可信なるを認むとするも、其非常に不眞なるは言に云ひ盡されぬ程なり。即ち此説には種々の大困難を具へ、而して其多數は此説特有のものなり。其第一はキリスト自身に就てなり。夫れキリストは種々なる虐待を受け給ひし後なれば、非常に疲勞し給ひたるに相違なし。然り戈を以て其脇を突くの一事、是れ已に致命的のものなるべし。而もキリストは此の疲勞せる状態にありながら、當に正氣に復せりと看做さるゝに止まらず、又大石を轉して墓より出で來れりと稱せらるゝぞかし。而して此の大石を轉ばすにも、之を

墓の内部よりするは特に困難なるを思はざるべからず。斯くてキリストは疲憊病羸歩行に堪へざりしと言ふにあらず、看護醫藥を必要とせしと言ふにも非ず。却てエルサレムとエマヲとの間、十二哩余を徒歩して往返し給ひ、而も其足は負傷し居たるなり(足の傷つきたりしや否やは往々異論あり。されど聖ルカは「彼は恐らく磔殺に就ては今日の人々よりも精細に承知したりしなるべし」確かに負傷したるものと思ひしが如し。是れキリストの言として、我手わが足を見て我なるを知れと記せばなり。此の語氣には、其手足によりキリストのキリストたるを知り得る意味含めり。而して其日の夜弟子等に出現し給ひしが、此時は已に全く回復し、弟子等は之を半死の人と思はざりし而已ならず、却て死に勝てる者、生命の君と思ひし程なりき。凡て是等の事情は、キリストにありては急激の回復を意味し、使徒たちにありては多少の輕信を意味することなるが、是れ共に不可解のことなりとす。

且つ夫れ、敵も味方も多數の人々が等しく誤りてキリストを死せりと思ひしといふは、是れ訝かしきことなり。抑も此の處刑の任務に當りし番兵は、斯る事件に多くの經驗を有したるに相違なし。即ち百夫の長は特に此の點を確かむる爲めピラトより派遣せられたるものなり。而して遺体を取り卸せし基督信徒は、之を墓に運搬し、之を<sup>カネコ</sup>糸布にて包めり。更に猶太人に至りては、夜の番兵を求めたり。而も是等の人々は、此の昏倒説に據る時は、キリスト死せざるに、之を死せりと正直に信せしものならざるべからず。加之、墓は其敵等遺体の紛失を防ぐ目的にて嚴重に之を守備せるなり。然るを如何にして彼

等は遺体を脱出せしめたりや。彼等若し睡眠せる爲ならずとすれば、之が解釋二つあり。一は隨意的に脱出せしめたるものにて、是れ即ち彼等が收賄せる爲なり。又一は不隨意的に之を脱出せしめたるにて、是れ即ち彼等超自然の力に壓迫せられ(太廿八〇四)止むを得ずして之をなせるなり。此の兩解釋は双方とも昏倒説とは相兩立せざるなり。

又此の昏倒説に據る時は、使徒たちキリストを死より甦れる者と思ひしは、是れ欺かれしものたらざるを得ず。加之、キリストまた彼等の欺かるゝを助長せるものたらざるを得ず。然らざればキリストは事實を説明したるべき筈なるを以てなり。果して然らば、欺瞞者は使徒たちに非ずして、却てキリストなり。されど<sup>カネコ</sup>こは何人も極めて不近眞と思ふなるべし。而も此他の唯一の解釋に至りては一層不近眞なり。そはキリスト自ら死せざるに、誤まつて己れは死せるものと思ひしといふ解釋是れなり。

之に加ふるに、キリストは其後如何になれるものとすべきや。それより數週後に再び死せしものとすれば、弟子等よも之を生命の主、死と陰府との輪を持てる者(徒三〇十五、黙一〇十八)と思ふことあるべからず。若し又長く生き延びしとすれば、何處に往き給へりや。而も彼は早晚死せしに相違なかるべく、而して其眞實の墓は、弟子等之を篤く崇敬せしことと思はる。然るに之に關する傳説今日まで存するものなく、以て昇天の信仰を打ち消すに足るものさへなきは何ぞや。是れ訝かしきことなり。

然るに此の昏倒説の大反對論は、思ふに福音書記載の事實の多くを説明するに足らずと言ふことなるべし。例せばキリストが閉鎖せる戸を通過したる如き、其隨意に消え亡するが如き、又昇天の如き是れなり。抑も是等の諸點は、異象説に取りても、將た故意的虚偽説に取りても、困難といふにあらず。されど今の昏倒説とは相兩立することなし。而して此説は或程度まで墓の空虚なりし理由を説明するも、葬衣の墓中に存したりし理由を説明するに足らず。是れキリスト自ら墓を出で來れるものとすれば、其衣服を其處に遺留し置く筈なければなり。況んや没藥の爲に之を脱ぐの困難あるをや。是れ没藥には粘着力ありて、衣服と衣服とを附着せしめ、又之を身体に附着せしむればなり(約十九〇三十九)。此故に、此の葬衣の脱ぎ棄てありしことは、此の昏倒説と兩立せざることを、猶ほ其他の諸説と兩立せざるが如し。只之と兩立するは基督教の復活説あるのみ。而もこは單純の事實にて、誤謬あるべき筈なきものなり。即ち衣服が其處に在りしに非ざれば、之を見たりと言ふ人は虚偽を傳へしものならざるべからざるなり。

且つキリストは、何れにしても其葬衣の儘エマヲに往返し、又使徒たちに出現する筈は非ず。此故に、キリストは何處かにて他の衣服を得たるに相違なきも、果して何處にて之を得たるべきや。其敵が之を供給する筈は萬々是れなかるべく、若し又味方が之を供給せしものとせんか、彼等は自ら其欺騙を承知せること是れ疑ふを得ざるなり。而も彼等が之を承知しながら、後ち事實の真相外間に漏れざりし

は奇と謂ふべし。

果して然らば、此の昏倒説に關して下すべき斷案は、異象説に關して下せるそれと全く相同じ。只其理由の異なる而已。其斷案は他なし、昏倒説は何れにしても非常に不近真なり、若し之を維持せんとすれば、現存の叙事の大部分を認めて、故意の偽作とする外あらずといふこと是れなり。されど、之を故意の偽作と認めば、昏倒説も亦無要の説なりとす。

(丙) 結論

本章を結ぶに先だち、基督教復活説に存すと稱せらるゝ困難につき數言を陳すべし。此の困難種々ある中、多少重大のものは唯一あるのみ。即ち如何にして復活の如き奇蹟が起ることを得たるかといふこと此のみ。而して復活を否認する人の十人中の九人までは恐らく此の理由よりするなるべし。此の難詰たる、復活の證據は不充分なりといふにあるには非ず(否、論者は恐らく之を調査せしこともなかるべし)、如何なる證據も斯くの如き珍事を認定するに充分ならずと言ふにあり。即ち論者は曰く、奇蹟は不可信的のものあり。奇蹟は起ることを得ざるものなりと。而して議論は此外にあらず。是れ起ることを得ざる事件を信するは難く、其他のあらゆる説明、異象、昏倒などを信するは容易なるを以てなり。

而も奇蹟は不可信にあらざるを認め(第七章)、只普通の事情の下にありては、死者が復活すといふが



如きは非常に不近真にして、實際不可信といふに同じきにもせよ、キリスト復活の時の事情は普通の事情に非ず、キリストまた普通の人間に非ず、否、後章にも説くが如く絶對的に無比の人なり、且其主張に據れば神にまします、而して此の主張は其特殊の品性、既存の豫言、爾後の歴史等、許多の有力なる證據に由りて保證せらる。果して然らば、是等の主張が根據あることの證として、死より甦り給へりといふは、必ずしも不近真のことに非ざるに似たり。

已に此の點を是認する以上は、其他の困難は多く瑣細のものなり。例せば、キリスト已に神にましますば、再び人身を取らんと望み給ひて、大石と番兵とに頓着なく、墓より出で來り給へること、少しも困難にあらず。又其心の儘に或は顯はれ、或は隠れ、其聖旨のまに／＼或は認めらるべく、或は認められざる姿と服裝とを現し給ひしことも亦然り（第十三章を見よ）。その他キリストが食物を求め給ひしは、是れ勿論その弟子等をして復活体の現實なるを悟らしめ、斯くして彼等が陥めらんとしつゝ、ありし異象説を打破せん爲なりしなり。

然るに尙ほ此に一つ特筆の價值ありと覺しき一反對論あり。それはキリストが公然猶太人に現はれ給はざりしこと是れなり。論者曰く、キリストは何故信者にのみ現はれ給へりやと。げに此の一事は頗る嫌疑を招き易き點なり。キリスト眞に死より甦り給ひ、世界をして之を信せしめんと欲し給はば、何故公然エルサレムに至り、一舉に疑を解かざりしや。斯くせば、敵に全勝を制し、味方の多くの苦痛を救

ふべかりしものを。

此の反對論に對して、第一に指摘せんと欲するは、其用語稍曖昧にして誤解を招き易しといふこと是れなり。夫れキリストが死前の味方にのみ現はれ給ひて（獨り聖パウロを除き）、未だ曾て其敵にも又無頓着の人にも現はれ給はざりしは勿論何人も之を認む。されど、復活といふ事實に就ていはば、キリストは之を信する信者に現はれ給へるにはあらず。否、彼等の之を信するに至れるは、却て幾回も／＼出現し給へる結果なり。而してキリストの出現に接せし人々は、如何に復活を認むるの意なき人にてても（例せば聖トマストマスの如き）遂には皆之を信せざるべからざるに至りぬ。是れ其證據が不可抗なりし結果なり。兎に角彼等には不可抗と見へし結果なり。次にキリストが敵に全勝を制せんと意ありしと思ふは是れ理由なきことなり。こは寧ろ次の世に讓るべきことなるべく此世にありては敵を救ふこと是れキリストの本意なりとす。

第二に、キリスト若し公然エルサレムに至り給はば疑を解き得たるべきや、こは少くとも疑はしきことなり。勿論之を目撃せる猶太人等は、之に由りて確信するに至るべし。されど、國民全体としては、基督教を信するに至りしかも知るべからざれど、又至らざりしかも知るべからず。若し基督教の見地よりすれば彼等は十中八九之を信するに至らざりしかと思はる。是れ彼等は已に奇蹟を否認したればなり。若し彼等斯く信するに至らざりしとせば、復活の證據は之がため非常に鈍らざるを得ず。即ち公

然エルサレムに入りて國民確信を起さず、却て之を詐僞者と罵るに至る如きことあらば、それは證據上、有害無益たるべきなり。

之に反して、猶太國民若し基督教を信するに至りしとしても、此の證據は現在の證據よりも有力なりや否や、是れ疑はしきとなり。勿論初代の基督信徒は、之によりて多くの苦痛を救はれつべし。されど之が爲に彼等の證據は其價值を減すべし。其理由は彼等の誠實を證すべき證據充分ならざればなり。加之、豫言の効力も亦大に鈍るに至るべし。是れ古文書のなき場合には、猶太の古き豫言は皆基督教の解釋に適する様捏造せられしなりとの説あるも、之を否認するに由なければなり。されど是等の豫言は、從來敵人の書架に保存せられしものなれば、嫌疑を拂むべき余地なし。斯くの如くにして、キリスト若し公然エルサレムに至り給はば、基督教に有利の證據は果して有力となるべきや否や、甚だ疑はし。

第三に、それは有力となると假定し、而して其次に有力とならば果して如何との問題起るべし。曰く、キリストは必ず公然エルサレムに至らざるべからざりしが。キリストは之をなさざりし爲め、所謂復活は不近真のものとなりたるか。断じてさることなし。是れ復活の證據は、之を信する人の爲には、已に充分の根據ある確實のものなるが故なり。果して然らば、現存の證據よりも更に有力の證據なければどて、現存の證據を輕視すべき道理なし。況んや、證據は如何程有力なりとも、更に有力ならざるべからずと唱ふる者の幾人かは、必ず是れあるをや。

之に加ふるに、全世界をして復活を信せしめんとすれば、只證據だけが必要なるに非ず、又宣教師の必要あり。即ち絶對に其眞理を確信し、欣然其生涯を賭して、之が爲に立證し、英國に赴き、萬民を犠牲にする人の必要あり。げに出現の一大目的は即ち斯くの如き人物を生せん爲なりしかも知るべからず。而して斯くの如き人は、實際少數ならざるべからざりしは言ふを待たず(聖パウロの如き奇蹟的改悔なき以上は)。

其理由は、死後のキリストと共に語り、共に食ひ、以てキリストの其時尙ほ活けるを確信するを得るは少數なるべき筈なればなり。又キリストを熟知して、眞に彼なるを確信するを得る人も少數なるべく、又厚くキリストを愛して、之が爲に萬事を抛つを辭せざる人も少數なるべき筈なればなり。斯くの如き理由にて、其當時適任の證人といへば、眞に少數なりき。而してキリストが、福音書記載の如く、數回私的に又親密に是等少數者にのみ現はれ給ひしは、彼等を熱心の宣教師たらしむるに於て、公然の出現に比し、遙かに其功あるべき筈なり(實際又その功ありき)。果して然らば、此の反對説は成立するを得ざるなり。

最後に本章記載の論證を概説するは、殆んど必要なことに似たり。此には只數言を陳じて止まん、曰く、初めには復活の叙事を調査し、而して純然眞實たるの徴候を全備することを論定せり。之に次で、稍詳細に、其最初の證人等の誠實、知識、穿鑿、推論を論明せしが、此中一點だも當然疑ふべきものとして

は非ず。否、此の各點の證據は實際不可抗なり。而も前にもいひし如く、此の諸點の一をも疑ふを得ずは、必ず復活の事實たるを認めざるを得ざるなり。

## 第十八章 其他の新約の諸奇蹟も恐らく真なるべき事

### (甲) 其可信なる事

新約の諸奇蹟は、之を詳かに講究すれば、殆んど何等の困難もなし。只惡鬼を逐出せることを除く。

### (乙) 其外觀的眞實

- (一) 眞實の一般的徵證
- (二) 眞實の特別的徵證

### (丙) 其公的性質

- (一) 新約の奇蹟は公けに行はれしものと稱せらる。
- (二) 新約には證據として公けに奇蹟に訴へたり。
- (三) 新約の奇蹟は當時異議を唱ふる者なかりき。
- (四) 希臘羅馬の學者の無言。
- (五) 之を説明せんとする無効の企、

### (丁) 結論

反對論—今日は何故奇蹟なきや。

前章に於てキリストの復活を論明したりたれば、以下は其他の新約諸奇蹟を論すべく、而して其信すべき事、其外観的眞實、其公的性質を順次講究し、最後に一の重要な反對論を説きて之を結ばん。  
(甲)其可信なる事

諸奇蹟は、悪鬼を逐出せる一條だけを除けば、他は困難といふべき程のものあることなし。勿論こは第八章に論せし如く、奇蹟は可信のものたるを認めての上のことなり。而して奇蹟の多數、殊に醫療奇蹟の多數は、道德上の見地より頗る適當のものにて、之をキリストの天職の證據と確信せられたることも、疑の余地なきものなりとす。即ち福音書記者が皆斯く確言せるのみならず、キリスト自ら又人に挑まるゝ時は奇蹟を行ふを拒絶せしに拘らず(語を換へて言へば、キリストは注文に應じて之を行ふを欲し給はざりき)力を極めて公けの奇蹟に訴へ給へることあり。例せば、バプテスマのヨハネが、使節をキリストに送りて、其メツシヤなるや否やを尋ねし際、其答は他なし、只「爾曹が聞ところ見ところの事をヨハネに往て告よ(啓者はみ跛者はあゆみ癩病人は潔まり聾者をさし死たる者は復活され)云々といふにありき(太十一〇四、路七〇廿二。又可二〇十を見よ)。

其後キリストはコラジシ及び其他の邑々を責め給ひしとありしが、其理由はキリスト自ら許多の奇蹟を行ひ給へるに拘らず、彼等は悔む改めざりきといふにあり。而してこは奇蹟の公的性質を示すもの

なると共に、又其主意は證據の爲めなりしを示す(太十一〇廿一—廿四、路十〇三十一—三十五)。且つ此の文句は特別に大切なる文句なり。是れコラジシにて行へる奇蹟といふは、一も記載せられざる事實を以て見れば、其眞作たること確實なるを以てなり。若し夫れ、此言にして福音書記者等(若しくは其他の人の)偽作ならんか、彼等は必ず奇蹟をも偽作して之に調子を合せたるならん。之に反して、此の文句は福音書記者等の偽作にあらず、實際キリストの口より發せられし言なりとせよ、さすれば、キリスト自ら一の奇蹟も行はざるに、彼等を詰り、奇蹟を行ひたれども我を信せずといふことあるべきか。是れ解すべからざることなり。

次に移りて、悪鬼を逐出し給ひしことを論せんとす。然るに、靈物または天使の存在及び勢力は、從來種々の大困難を具ふるものと看做されたれば、今簡單に之を調査することとすべし。而して第一に先づ天使の存在に就て論せん、されど此點に就ては何の困難もなし。其理由は、自然界のことを類推して考ふるに、人類以下に種々なる生物の階級ある如く、人類以上にも種々の階級(即ち人間と至上者ととの間に)あるべしといふことは是れなり。而して此點は頗る近真と考へしむる一の事情あり。即ち遞退級に就ていへば、各自の間には距離あるに過ぎず。然るに遞進級に就て見るに、若し人類を神に次げる宇宙間の最高生物とせば、相互の距離余り遠きに過ぐと言ふことは是れなり。

偕、此の人類以上の生物は、純然たる靈的のものにて、即ち有形の身体を具へず、随つて科學的發見以上

のものなりとは、是れ近眞のことなり。げに人類が下等生物に優れる點は、即ち半靈的の性質を具ふる爲なるを思へば、此の高等生物が純然たる靈的のものならんとの思想も強ち不當にあらず。而して此の高等生物は、其知力及び道德共に人類に優らすとも、人類に譲らざるは確實のことの如し。若し然らずば、人類以上の高等生物に非ざればなり。さすれば彼等には自由意志ありて善惡選擇の力ある者たらざるを得ず。随つて、彼等の或者は善を撰び、又或者は惡を撰ぶことも、同じく近眞のことの如し。此に於てか、善天使と惡天使との存在は、共に何等の困難もなきこととなるなり。

第二に彼等の勢力に就て論せん。抑も善天使が人類に善感化を與へんことを希ひ、而して時々此の目的のため神に使用せらるゝは、是れ近眞のことなり。然るに、他の一方には、惡天使は惡人の如くに他を誘ひて、惡を行はしめんと希ふとすることは至當の推論なり。又彼等は能く之をなすの力ありとすることも、信じ得べきことなり。是れ自然界のことを以て類推すれば、高等生物は皆下等生物に感化を與へ得るものなるを以てなり。加之、神は彼等が之をなす儘に任せ給ふこと、敢て神が惡人の惡をなす儘に任せ給ふと異ならずと思はる。斯くの如くにして、一見したる所にては、惡鬼の誘惑といふことも何の困難もなきことなりとす。

然るに、論者或は言はん、今日は天使の勢力を認むべき實際の證據一も是れあらずと。されど此の反對論は少くとも疑ひなきにあらざるなり。其理由他なし、吾人は之に就て如何なる證據を期待すべきや、

是れ疑問なるを以てなり。即ち吾人は肉体的感覺又は其他の科學的に研究し得らるゝ證據を期待すべきに非ず。蓋し天使は假定上已に靈物なるを以てなり。然るに此の天使が人に感化を及ぼすとせよ、例せば人を誘ひて惡を行はしむとせよ。その感化として吾人の知り得るものは、他なし、吾人の知り得る限り、別に何等の原因もなくして、忽然人の心頭に邪惡不善の思起るが如き是れなり。而して誰か之を未知のことなりといふものぞ、又若し知り得たりとも、惡鬼の作用に關する一切の證據とはならずといふものぞ。

次に惡鬼に憑かるゝことに就て論せん。此の問題に關しては、今日尙は不明の點勿論大なれど、さればとて少しも疑ふべきことには非ず。げに今日催眠術に就て世に傳ふる所は、悉く信頼すべきものに非ざれど、尙ほ之に由りて、甲者が全然乙者の心意を占領し、乙者をして悉く其欲することを爲さしむることあるを知るに足れり。此の力たる、或る場合には惡鬼も之を行使することあるは、之を信すること難からず。尙ほ福音書に記載せられたる一の不思議なる事實あり。即ち惡鬼に憑かれし人、時々此の惡鬼の爲にせずして、自ら己れの爲に云爲するを得るが如くなることは是れなり。而して此の事實は今日の所謂二重意識と稱する例に頗る類似せり。其他種々の狂氣に類せる症候あるものの中にも、粗ぼ之と同様に解釋せらるべきものなきに非ず。只今日の文明國にては、斯くの如き患者に拘束を加ふるが故に、昔ほど著明ならざるのみ。

論者或は云はん、然らば何故に此の狂氣を惡鬼の所爲に歸するかと。されど之に對して何故歸すべからざるかと反問せざるを得ず。狂氣なるものは、往々にして飲酒の如き、淫奔の如き種々なる誘惑に陥るより起ることあり。而してこは實際惡鬼の所爲にて（福音書に汚れたる鬼といふ言あり。注意すべき言なり）、又その誘惑に従へる當然の罰かも知るべからず。若し然らんには、基督紀元時代の世態、非常に不道徳なりしより推考し、今日に比して狂者の非常に多かりしこと、必ずしも怪しむに足らず。尙ほ之に附言すべきことあり、即ち當時の記者は、凡ての病氣を悉く惡鬼に歸せしには非ずといふことは非なり。

其理由は、熱病患者、癩癩患者、盲者、跛者、聾者、啞者等のことをも記して、之を惡鬼の所爲とする語氣少しも是れなければなり。之に由て是を觀れば、彼等は二者を區別する能力ありしものなること明かなり。最後に惡鬼に憑かれしもの治療も、奇蹟と見て何等の困難あるものに非ざるなり。

然るに、動物が之に感染することありと言ふに至りては、是れ疑ひもなき困難なり。されど福音書に記載せられたるは、唯一のガダラの豚の群の例だけなるが故に、是れ一種本文の困難に外ならず（太八〇廿八—卅四、可五〇一—十七、路八〇廿六—四十）。而も困難は困難に相違なきが、余未だ曾て之が満足なる説明を見しことあらず。但し今日は動物に關して尙ほ不明の點多きと、又其人類に類したる點少からざるとより考ふれば、絶対に之を不可信なりとは、斷言するを得ず。

尙ほ此の奇蹟には他に二の困難あることを略陳せん。第一は不公正といふ證據よりするものなるが、そはキリストの滅ぶる儘に一任し、其持主に對しては報酬を拂へる模様なきこと是れなり。されどキリスト若し眞に其自稱の如く神にましまさば、世界と其内の萬物とは皆キリストのものなり。故にキリストが惡鬼をして豚を滅ぼさしめしことは、疾疫又は其他の方法にて之を死せしむると同様、別に不正のことには非ず。且つ此の奇蹟には眞實の奇蹟なりしを確證する利益あり。其理由は、豚は欺騙の味方となし得べきにあらず、又所謂自然的治療の場合の味方となし得べきにも非ずといふこと是れなり。

第二の反對論は豚を飼養したりしことに關す。是れ猶太人は豚を嫌忌せしものなりしを以てなり。されどヨセフアスに據りて見れば、ガダラはパルステン國内にありし若干の希臘人の邑の一なり。隨つて此の奇蹟は實際眞實なることの一證なり。其理由他なし、此の奇蹟若し福音書記者の偽作なりとせば、知らずして此の希臘人の邑を撰ぶといふことは萬々是れあるべからず、さればとて、知りつゝ之を撰び、而も一言だに其處に豚の在りし理由を説明せず、讀者をして自ら之を發見せしむといふことも萬々是れあるべからざればなり。次に此の奇蹟の群民に及べる効果を記して、單に彼等キリストに退去を求めたりとなせることも、是れ亦此の記事の眞實の一證なり。小説の作者は斯くの如き構成法を用ふる筈は非ざるなり。

最後に一言せんと欲するは、吾人若しキリストの地位の無比なるを記憶せば、基督教の諸奇蹟も頗る近真なるを感すべしといふことは是れなり。即ち世界の歴史に寸功もなき凡人の所爲としては不可信のことも、キリストの所爲としては即ち可信のことたるを得べし。此故に吾人は断定す、新約の諸奇蹟は皆可信のものなりと。尙ほ此の諸奇蹟の眞實なるや否やは、次に之を講究せん。

(乙) 其外観的眞實

猶、奇蹟に就ての證據は、キリスト復活に就てのそれと粗ば相似たるものなり。即ち兩者とも同じ記者等が同じ書中に記載する所にして、此の記事に關する諸點又皆可信のものに非ざるはなし。今簡短に之を説かんに、記者等の此の奇蹟を記載せし動機は他なし、只之を眞實と信せしに由る。又記者等は其眞否如何を判知すべき充分の便宜を有せし人々なり。加之、此の奇蹟の多くは、不充分の穿鑿又は誤謬の推論にては、到底説明するを得ざる種類のものなり。更に又、此の諸奇蹟には眞實たるの徵證許多あり。今之を分たば二種となすことを得べし、一は一般的徵證にして、奇蹟全体に關係あるもの、他は特別的徵證にして、箇々の奇蹟又は之に就ての言説に關係あるものなり。乞ふ順次之を講究せん。

(一) 眞實の一般的徵證

之に種々ある中、第一に擧げんと欲するは、奇蹟の記事の多くは非常に單純に且つ寫實的なること是れなり。例せば、生來の替を療せし記事に、此の替者に對する幾多の質問を記載せるが如き是れなり(約

九〇八―卅四)。斯くの如きは、之を目撃者の自記に非ずとするは難し。其他新約の諸奇蹟の多數は概ね之に同じ。

第二に、キリストの所爲となせる奇蹟の種類を見るに(吾人の判断し得る限りにては)、皆キリストの体面相當のものなるが如し。即ちキリストの奇蹟は皆人を益するにありて、之を害するに非ず。聖陰經的福音書の中に彼の所爲となせる想像的奇蹟に比すれば、雲泥の相違なり。今聖陰經的福音書記載の諸奇蹟は、何れも頗る兒戯に類せるものなるを知らしめんとすれど、事冗長に渉るを以て之を略すべし。只その例を擧ぐれば、キリストの幼かりし時、土の鳥を作りて之を飛ばせしといふが如き、己れを嬉戲することを肯せざりし小供を化して、小山羊となせしといふが如き、己れに向ひて馳せ來る小童を咒ひしに其小童は死して倒れしといふが如き是れなり。斯くの如き奇蹟は福音書記載の諸奇蹟と如何ばかり相違するや、殆んど贅辨を要せざるなり。

第三に、新約の諸奇蹟はキリストの道德的訓誨と密接の關係を有し、此の二者を分離するは難きと共に此の記事全体を假作と信することも亦難し。斯くキリストの驚くべき行爲と又其驚くべき言とは、互ひに相纏綿し、以て一箇の全体をなせるものにして、之を假作と看做さんとするも、余り眞に迫れるを如何せん。且つ夫れ奇蹟を除外したるキリストの傳記は、戦争を除外せしナポレオンの傳記と一般、無意味のものなり。斯くの如くにして、管に基督教の大事實だけが(即ち神子成肉の如き、復活の如き事

實をいふ)奇蹟たるに止まらず、又其小事實及び道德的訓誨も奇蹟と相錯綜し、非奇蹟的基督教といへば、却て自語相違とも思はるゝばかりなり。因みに一言せんと欲する面白きことあり、即ち其觀福音書の中にて、一般に最舊のものとして認めらるゝ馬可傳は、奇蹟を記載する割合最も多しといふことは是れなり(即ち奇蹟は十八にして、譬喩は只四あるのみ)。是れ何人も推察する如く、最初人の注意を惹きしものは、キリストの訓誨よりも寧ろ其奇蹟なりしが爲なりとす。

第四は奇蹟の非常に雜多なることなり。即ち其種類といひ、之を行へる場所といひ、之を目撃せし人といひ、其事情及び性質といひ、多種多様にして、或時は公けに、或時は私に、或時は都會に、或時は田舎に或時は集團的に、或時は簡々に行はれたり。又或時は敵の注目せる處にて、或時は味方に圍まれて之を行ひ、或時は求められざるに、或時は求められて之を行ひ、或時は男子に關し、或時は婦人に關し、其他貧富、賢愚、異邦人、猶太人、遠きと近き、相當の豫報の後と突然、自然物に關すると人類に關するなど、殆んど枚擧すべからず。之を要するに、今日現存の記事に據れば、新約の奇蹟は蓋し最も人の確信を促がす奇蹟と謂ふべし。

第五に、奇蹟の多數は其性質永久的にして、再三再四調査し得べきものたりしことは是れなり。例せば、久しく跛者たり、又は聾者たり、又は替者たりし人が健体に復せし時の如き、其當人も、其村人も、將來幾年かの間此の療治を試験するを得たり。而して斯くの如き奇蹟は、所謂一時的奇蹟(例せば聖ヘテロ

が魚の口中にて貨幣を發見したる如き)に比し、其價值非常に大なるは言ふを待たず。蓋し一時的奇蹟の證據としては、直接の實見者のその外にあることなければなり。

第六は、極めて驚くべき點にて、即ち福音書記者等キリストの奇蹟を行ひ給へることを記する毎に、殆んどいつも其權威によりてせりと言ふを常とすることは是れなり。かの舊約豫言者たちは之と異なり、其奇蹟を行はんとするや、殆んど皆神を呼べり。其例として羨姉の子を甦らせし兩者類似の場合につき一考せん(王上十七〇廿一、路七〇十四)。即ちエリヤは熱心に神の此子を甦らせ給はんことを祈りしが、キリストは然らず、我なんちに命おきよと言ひ給へるのみ。此の兩者の相違は眞に著し。而してこはキリストの奇蹟のため有力の論證と謂ふべし。其理由は、若し奇蹟は福音書記者等の偽作ならんには、必ず舊約書の奇蹟に模倣したるべき筈と思はるればなり。然るに福音書は、之に模倣せず却て嶄新空前の方法にて之を行ひ給へしことを記し、且つ其方法は當時の人々の冒瀆と看做せしものなるが如し(尙ほ豫言者等が教をなす場合に、エホバかくいふといひ、キリストは、誠に我爾曹に告ぐといふを參考せよ)。

果して然らば、福音書記載の奇蹟は、其記述の寫實的なるより見るも、少しも兒戲的のもの又は体面不相應のものなきより見るも、キリストの道德的訓誨と密接の關係あるより見るも、其雜多なること、永久なること、殊に奇蹟を行ふ時の方法權威ありしより見るも、即ち眞實の記録たる徵證具はれりと



謂ふべし。

(二) 眞實の特別的徴證

之に加ふるに、箇々の奇蹟及び之に關する言説も、眞僞作とは言ひ難きものゝみなり(可五〇三十九、八〇廿三)、例せばヤイロの女蘇生の奇蹟を見よ。勿論、キリストの権能を誇張せんと欲する人ならば、如何なる人にも斯くの如き奇蹟及び其余の奇蹟を僞作すること難からず。されど之を僞作するとすれば、キリストの口より女は死るに非ずたい寢たる耳といふ言を發せしむるが如きことあるべからず。此の言はキリストが之を奇蹟とは見給はざりし意義あり。故に、之に如何なる困難の存するにもせよ、確かに眞作の徴證を具ふるものなり。その他ベテスダに醫者を醫せし奇蹟の如きも亦之に同じ。該記事は最初幾分か失敗なりしが如く記載したるが、後世の基督信徒は、斯くの如き奇蹟を僞作し、之をキリストの所爲となすが如きはあるべからざるなり。

加之、キリストの奇蹟を行ふ力は、往々被療者の信仰如何に由るとせられたるが、斯くの如きは後世の基督信徒の記する筈なきことなり。又或る邑にては、彼等の信せざるが故に、殆んど奇蹟を行ふ能はざりしといふが如きも亦然り(可六〇五、六、太十三〇五十八、九〇二十二、二十九)。斯くの如きは、神化せられし英雄に漸次附着せしめたる古譚と同視すべきにあらず、却て眞作の徴證歴然たりと謂ふべし。されど記者若し彼等の信せざるが故に、キリストが或邑にて奇蹟を行ふ能はざりしを知る便宜を有せ

しとせよ、さすれば、之と共に他の邑にてキリストが、奇蹟を行ふを得たること、及び之を行ひ給へることをも知るべき便宜を有せし筈ならずや。

又キリストが屢次その奇蹟を秘密にせよと命じ給へるは如何なることぞ(例せば可五〇四十三、七〇卅六)。是れには一々その理由あるに相違なし。されどキリストの弟子(即ち之を記録して却て世に傳へし人々)が之を僞作し、キリストは之を秘密にせよと命じ給へりと記するが如きことあるべからず。尙ほ又キリストの方面よりいふも、秘密にすべき奇蹟一もなき時は、斯くの如き命を與ふる筈はあらず。又キリスト曾て其聴衆を警め、たとひキリストの名に託て奇蹟を行へりとも、其行ひ善からざる時は必ずしも救はるゝを得ずと言ひ給へることあり。是れ實に驚くべき文句なり(太七〇二十二)。此の文句はキリストの特有的講話の一なる山上説教中に記載せられたるものにて、其眞作たること殆んど之を疑ふを得ず。たとひ之を疑へりとも、キリストの名に託て奇蹟を行へる人一人も是れなくば、キリストの弟子たるもの斯る警戒を僞作するに至るべからず。

又他の處に、キリストの言として信者は凡て奇蹟を行ふことを得と記せる所あり(こは聖マコの筆か、アリステオンの筆かは、左程の關係なし)、之に就て言ふも粗ぼ右に同じ(可十六〇七)。キリスト若し之を言ひ給へるものとすれば、確かに自ら奇蹟を行ふ力ありしに相違なし。若し又キリストの言にあらざるとするも、其弟子等は奇蹟を行ふ力ありしに相違なし。然らずして弟子等只此の約束を僞作したる

なりとすれば、即ち彼等が信者にあらざるを示すに當ればなり。之を要するに新約の奇蹟の記事は、前にも言ひし如く、絶対に眞實たる徴證悉く具はれるものなりとす。

(丙) 其公的性質

然るに尙ほ此に論明すべき極めて大切の點あり。そは是等の奇蹟は所謂公的性質あるものなること是れなり。此の點は奇蹟の證據をして特別に有力ならしむるものなるが故に、今之を稍詳細に調査せざるべからず。

(一) 新約の奇蹟は公けに行はれしものと稱せらる

第一に、奇蹟の多くは公然多數の人々の面前にて行はれしものと稱せらる。而して其行はれし地名も之に關係せしヤイロ(會堂の宰)、バルテマイ、ラザロ(猶太の當局者に有名なりし人)、マルコス(祭司の長の僕)等の人名も、往々記載せられたり。此故に、此の諸奇蹟にして若し無根ならんには、直ちに否認せられし筈なり。例せばテベリア湖邊にて五千人を養へる奇蹟を一考せよ。此の奇蹟は四福音書に記載せられ、所謂三重傳説の一部を成せるものなれば、事件後幾許もなく、即ち五千人中の多數が尙ほ生存中に記録せられしに相違なし。倍此種の奇蹟にして若し何等の跡方もなきことならんには、例ひ二十年後にもせよ、敢て斯る記事を捏造する人あるべきや。而して又之を捏造せりとするも、其記事は直ちに否認されざることあるべきや。斷じてあること無かるべし。

之と同じ論法は、又他の場合にも之を適用するを得べし。即ち福音書の奇蹟にも、使徒行傳の奇蹟にも適用するを得べし。蓋し使徒行傳中にも、クプロの方伯セルギヤ・パウロの如き、ピロピの典獄の如き、マルタの島長ププリヲの如き顯官に關係せる奇蹟あるを以てなり。然らば即ち、是等の奇蹟若し無根ならんには、斯くの如くに人名地名を擧げて堂々公然の奇蹟なりと斷言すること、是れ無上の難事なり。而も初代の基督教徒等は、初めより斯くの如き奇蹟の行はれしを斷言して憚らざりしが如し。

又初代基督教徒等の公言せし所に據るに、是等の奇蹟は皆に風評喧傳せられたるに止まらず、エルサレムに行はれし幾多の奇蹟の如きは、即時猶太の有司等により職權上より調査せらるべきことなり、且つ嚴密の調査を受けたりしなり。然るに調査の事實なくば、斯く調査せられたりと記載せらるゝ筈なく、又奇蹟なるものも行はれざりしならば、斯く調査せらるべき筈も非ざるなり(例せば約九〇三十一卅四、徒四〇五―廿二)。

(二) 新約には證據として公けに奇蹟に訴へたり

之に加ふるに、是等の公然的奇蹟は、又初代の基督教徒等の公然、人に説きしものなり。即ち使徒行傳に據れば、最初の公開説教たるペンテコステのそれにて聖ペテロは之を説き、其聽衆等自ら之を實見せりといひしが、(爾曹の知ごとく)こは少くとも、彼が他の一演説に於ても亦説きたる所なり(徒二〇二二、十〇三十八)。而してこは特別に大切のものなるが、それには一の理由あり、他なし使徒行傳の信實

を否認する反對批評家にて、此の兩演説は非常に古き時代よりのものなるを認むることは是れなり。果して然らば、キリストの直弟子中キリストの奇蹟を行ひ給へるを信せしものあり、而して彼等は其反對者も之を信じたりと揚言せしことを、之に由りて知るべし。

キリストの奇蹟は只右の二演説に言及せられたるに止まり、それより以上に及ばざるは怪しとする人あらん、されど使徒行傳記者によれば、(記者は使徒たちの行へる奇蹟を或る場合には(徒十六〇十六―十八、廿八〇二十一)目撃したるに相違なし。是れ其我儕段落中に記載せられたるにて知るべし)使徒たち自らも奇蹟を行へるにて、其説教の眞理を證明するため、キリストの奇蹟に訴ふる必要なかりしものなれば、斯くの如きは怪しむに足らず。即ち使徒たち自身の奇蹟だけにて、已に此種の證據を求むる人を確信せしむるに充分なりしなり。而も記録せられたる最初の基督教説教に、キリストの公然の奇蹟を公然に擧げたることは、是れ勳かすべからざる大切の事實なり。且つ此の説教は奇蹟後僅々數ヶ月の後、エルサレムに於てせられしものなれば、其説若し無根ならば、他處にては兎も角、此處にては極めて容易に否認せられし筈なりとす。

次に聖パウロの書翰に就て論ずべし。聖パウロの書翰には、勿論復活だけは記載せられたれど、其他の奇蹟を記載せざるは事實なり。されど、該書翰は異教徒を改悔せしむる爲め著作せられしに非ず、已に基督信徒たるものを教ふる爲に著作せられしものなれば、斯くの如きは怪しむに足らず。且つパウロは獨り奇蹟のみならず、又譬喩をも記載せざるぞかし。然るに一方には又、使徒たちの行へる奇蹟を記載し、又其正銘の書翰二通には、聖パウロ自ら奇蹟を行へることを絶対に斷言せり。加之、聖パウロは休徵、奇蹟、妙用の三語を用ゐたるが、こは福音書中にキリストの奇蹟を呼ぶに用ゐたると同じ語なりとす(羅十五〇十八、十九、哥後十二〇十二。又加三〇五を見よ)。

右の第二文は非常に大切なり。其理由は、聖パウロ奇蹟を指して之を使徒の證といひ、我は是等の奇蹟を行へるが故に使徒なることを認むべしと、コリントの反對論者に要求するを以てなり。此の語氣よりして考ふるに、奇蹟は雷に公けに行はれしのみならず、奇蹟を行ふ力は凡ての使徒の所有なりと、聖パウロも其讀者も共に信じたること明かなり。尙ほ此に注意すべきことあり、即ち此の書翰の受取人は、聖パウロの稱して其行へる奇蹟を自撃せりとなす人々なり。而して此のパウロの要求は、無根のものとは殆んど思はれず。況んや、聖パウロの如き人が、恣に虚偽の申立をなすべしとは信じ難きことなるをや。而してこは又キリストの奇蹟の間接的證據なり。是れ聖パウロ自ら奇蹟を行へることありと信せしとすれば、又其主たるキリストも之を行へりと信すべき筈なるを以てなり。且つ聖パウロは屢次エルサレムに赴きしことあれば、(徒七〇五十八、二十二〇三、加一〇十八)充分之を知るの便宜をも有したりしなり。

次に希伯來書の記者も亦奇蹟に言及したるが、是等はキリストの直弟子等の行へるものにて、且つ其傳

へし眞理の證據として行へるものなり。而して該記者の語氣を以て見るに、此の證據は記者自身も確信し、此の書翰の讀者たる人々も確信せるものなり(來二〇四)。之に由て是を觀れば、基督教初代の傳道者は其主張の證據として常にキリストの奇蹟を人に説きしのみならず、又己れの奇蹟にも及べるなり。而して彼等若し一も奇蹟を行ひしことなくば、前にも言ひし如く何故之に説き及べりや、解し難きことなりとす。

次に論せんと欲するは、必ずキリストの奇蹟に言及したるべしと思はるゝ文書是れなり。而してこは即ち初代基督教徒等の辨證書類なりとす。此の辨證書類も吾人の豫期に反するものに非ず。此の中吾人の知れる最も古きもの三を擧ぐれば、クオドラタスと、アリストタイデスと、ジャスタンとの著述なるが、クオドラタスの辨證論は、パトリアン帝に獻げしものにて(紀元百十七年—百三十八年迄在位)、ユ—セピアスに由りて保存せらるゝ一文に據れば、クオドラタスの最も重きを置ける點は、本書に所謂キリストの奇蹟の永久的性質といふ點にあり。即ちクオドラタスの語に曰く、『我儕の教主の奇蹟は、一として顯著ならざりしことなし、是れ眞實なりし故なり。醫されし者も、甦らされし者も、其醫され又は甦らされし當時のみならず、久しき後々までも人に見られたり。主の在世中のみならず、又此世を去り給へる後も否その後までも人に見られたり。然り、その中には今日にまで存命せしものもある程なり』<sup>1)</sup>

アテンスのアリストタイデスも凡そ同時代頃に其著述をなせし人なり(紀元百二十五年)。其基督教の辯護をなすや、證據を基督教の道徳性に置けり。而して基督教は不道理として攻撃を受けることあると共に、又不道徳として攻撃を受けること往々あるを以て、斯くの如きは怪しむに足らず。但しアリストタイデスはキリストの及びの奇蹟には言及せしことなし。されど彼は前にも言ひし如く(十四章)、キリストの神性、神子成肉、處女降誕、復活、昇天等は之を斷言せり。

最後に、ジャスタンもアントニナス皇帝(紀元百三十八年—百六十一年在位)に與へし辨證論中特別にキリストの種々の奇蹟を記載せるのみならず、一般に奇蹟に就て左の如くいへり。曰く、キリストは『生れながら、身体の不具なるもの、跛なるものを醫し、其御言もて、彼等を跳らせ、聴かせ、視ることを得せしめたり。又死者を甦らせて、之を活かしめ、且つ其行もて其當時の人に己れを認めざるを得ざらしめぬ。而も彼等は斯る奇蹟を見ながら、尙ほ之を魔術なりと斷言せり。是れ彼等は敢てキリストを呼びて魔法師なりといひ、又人を欺く者といひたればなり』と。されどジャスタンは其議論の根據を奇蹟に置きしには非ず、主として豫言に置きたるなり。其理由は、ジャスタンが繰り返へし言ひし如く、奇蹟は魔術視せらるゝ恐れありしを以てなり。以上論ずる如くにして、最舊の辨證論者三人の中の二人は、極めて公けに、即ち皇帝に與へし書翰に、斯くキリストの奇蹟に訴へたるなり。

(三)新約の奇蹟は當時異議を唱ふるものなかりき。

次に論せんとすることも亦大切の點なり。即ち是等公的奇蹟は、初代の基督信徒等之を公けに人に説きしに相違なく、又其記事は事後幾許もなく公けにせられしに相違なし、而も吾人の知れる限りにては之が反證なるものも提出せられしことなく、一も保存せられたるは非ず。而して奇蹟なるものは、味方と敵と兩者の眼前に行はれたるものなるを思へば、眞に驚くべきことなり。奇蹟は斯くの如くにして全國民の反對的批評の前に置かれしなり。此故にキリストを死に處せし程の其勁敵は、若し能くし得べくんば即ち之を攻撃したるならん。而も吾人の知れる限にては、一として異議を申立てられしものあらず。否却て今日に存する唯一の證據を以て判断すれば、猶太人も異邦人も皆共に奇蹟を認めたりしもの、如し。但し彼等は其證據的價値を認めざりしは勿論なりとす。

猶太人は奇蹟の證據的價値を否認すとて、之を惡鬼の所爲に歸せり。而して奇蹟の效果の勿論善にして惡ならざりしを思へば、此の猶太人の術計は頗る奇なるものなり。而も彼等には實際他の方法あらざりしなり。即ち猶太人は一神論者なれば、奇蹟の神の所爲なるを否認する以上、之を惡魔の所爲とせざるを得ず。彼等の信する超自然的の力は、神と惡魔の外になければなり。但し兩者とも其配下に附屬的天使を有せしは勿論なりとす。されど此に一間すべきことあり、他なし、奇蹟は隨分之を否認し得るにしても、尙ほ彼等は斯る術計を用ゆべきかといふことなり。而も彼等が斯る術計を用たりしことは殆んど之を疑ふを得ず。現に共觀福音書は皆明かに之を斷言せり(太十二〇廿四、可三〇廿二、路

十一〇十五)。是れ彼等が實際斯る術計を用ひしを證す。然らざれば、基督信徒自ら其主は惡魔の使なりといふが如き思はしき噂を傳ふる筈なければなり。此に於てか知る猶太人は基督教の奇蹟を認めたり、但し彼等は其證據的價値を否認せり、而して之が方法として之を惡魔の所爲に歸するの暴舉に出でしことを。されど彼等は此の外に取るべき方法を有せざりしなり。

然るに問者或はいはん、猶太人已にキリストの奇蹟を承認したりとすれば、何故彼等は其主張を承認せざりしかと。之に對する答は頗る教訓に富めるものなり、曰く、猶太人は國民としては勿論キリストの奇蹟を承認せり。隨つて之をメツシヤとして承認することをも敢て辭せざりしなり。現に聖書に、群民強めて彼を王となさんと欲し、彼を擁して恰かも凱旋軍の如くにエルサレムに入り、之を敬重するの篤き、當局者は公然彼を捕縛するを恐れし程なりといふ。されど第二十章に至りて説くが如く、キリストの主張は猶太人のメツシヤたるよりも以上に、自ら神なりと主張せり。惜、前段にも説ける如く、猶太人は堅く一神論を奉せし國民なり。此故に自ら神なりと主張するが如き人あらば、その人は彼等是非とも之を認めて瀆神者となせり。祭司の長等之を知りてキリストの冒瀆を訴へしのみならず、又之を審問するに當り、實際我は神なりとの口供を得たり。此の一事に由り、群民はキリストを脱離するに至り、數日前にはダビデの子よと絶叫せし彼等は、矛盾に陥らさずしてキリストの死を要求するに至りぬ。斯くの如くにして、彼等はキリストの奇蹟を信すること篤かりしとは言ふもの、一神論を信

することは尙ほ一層篤かりしなり。此故に、奇蹟を行へる人若し我は神なりと言ふが如きことあらば、猶太人は此の奇蹟を悪魔の所爲に歸する外なかりしなり。

然り而して異邦人は斯くの如き難關を有することなかりき。是れ彼等は許多の神を信せし爲にて、此の神の多數は、人類に深切に、之に祈願せんとすれば、魔術を以てすべきものとせられたり。此故に異邦人にありては、奇蹟は矛盾に陥らざして、此の小さき神々の所爲に歸するを得たるなり。一層通俗にいへば、之を魔術に歸するを得たるなり。現に異邦人が之を魔術に歸せし證據少からず。前にも言ひし如く、ジャヌチンの如きは明かに之を斷言し、其結果其論證を豫言の方面よりせし程なり。アイレニアスの論證又之と同様なるが、其理由も亦勿論同様なりとす。

更に又、第二世紀中の基督教の最勁敵たるセルサスも、之と同様の見解を取れり。セルサスの著作は歿して今日に傳はらざれど、オリヂェンは、彼に對する答辯中に、屢次絶對的に之を斷言せり。今其一例を擧げん、「之に加ふるに、イエスが行へりと稱せらるゝ奇蹟に對しては、セルサス抗辯すること能はず。譏刺的に之を妖術の所爲といふこと、已に數回に及べり」と。又他の處には、セルサスの辯明なるものを引用したるが、即ち曰く、イエスは「私生兒として養育せられ、埃及にて賃錢の爲に勞働し、斯くて多少魔力を習得するに至りて其故國に歸り、其魔力を用ひて自ら神と唱ふるに至れり」と。勿論セルサスは、目下論議中の時代よりは、後に生存せし人に相違なし。而も初代の基督教反對者にして、奇蹟

の行はれしを否認せりとせんか、セルサスの如き後世の反對者が、斯る有力の論證を棄て、それよりも更に薄弱の論證、即ち奇蹟は行はれしも是れ魔術に由るといふが如き見解を取る筈は非ざるなり。

更に猶太のタルムドも亦キリストの奇蹟は其埃及にて習得せる魔術に由ることを明記せり。果して然らば、此の解釋は奇蹟の普通の解釋たりしこと疑なく、隨つてキリストが奇蹟を行へる事實も普通に承認せられたりしを知るべし。尙ほ之と同一の點は、猶太の「古譚」セファートルデス・イエスの中にも顯はれたり。即ち其中に、キリストが奇蹟を行ふ力は、自ら神殿に隠れ、聖き名を發見するに由りて得たるなりと記せり。果して然らば、此にも奇蹟そのものは否定せられざりしこと明かなり。但し後世の猶太人は奇蹟を直接悪魔の所爲に歸するを好まざりしものゝ如し。

異邦人も亦奇蹟を承認せしこと、ジャヌチンの一文に由りて之を推知するを得べし。即ち同人は其辨證論中に（羅馬皇帝及び元老に與へし）いふ、彼等もポンテオ・ピラト行傳を讀まば、キリストが奇蹟（跛者、啞者、聾者を醫し、癩者を潔め、死者を甦らせし）を行ひ給ひしを知るを得と。此の文句を以て見れば、當時羅馬に斯くの如き文書（信實か否かは明了ならざれど）の存せしを知るべく、且つ書中に奇蹟に言及せし所ありしは明かなり。

次に舉示すべきは、多分贋作かと思はるれど、又有名なるヨセフアス中の文句なり。此の文中キリストの「ことを記して」「若し彼を人と呼ぶこと不當ならずは、彼は賢人なり、彼は妙用を行ひし者なり」と

いへり。斯くて、其次にキリストの所謂復活に説き及び、遂に奇抜の言を以て之を結んで曰く、「彼より其名を得たるキリステアンなる種族は今日も尙ほ滅亡せず」と。借此に所謂妙用とは、超人的即ち奇蹟的の行爲をいふものに相違なし。其理由は、記者のキリストを人と呼ぶ當否を疑ふに至れるは、此の妙用の結果なるを以てなり。借此の文句の信實か否かは、古來激烈の論争あれど、それは今の目的に取りて些少の關係もなし、是れ基督教徒自ら己れの宗教を未だ滅亡せざる宗派といふが如き理由なければなり。此を以て、此の言若しヨセフアスの言ならずとすれば、即ち猶太の記者又は羅馬の記者の筆に相違なし。而もこは少しも證據の價值を減ずるものに非ず。是れ當時生存の非基督教徒が奇蹟の實際行はれしを認めしを顯せばなり。

借以上列舉せし文句に由りて見る時は、當時生存せし人々は自ら基督教徒とならざるも、能くキリストの奇蹟を承認し、而して之を悪魔又は魔術に歸せしこと明かなり。されど、斯る方法にて難關を脱せんとするは、今日の人々の一般に取らざる所にて、苟も奇蹟を承認する程の人は、皆基督教を承認し、奇蹟は即ち之を證明する手段と信するなり。

(四) 希臘羅馬の著述家の無言

反對側面の議論としいへば、希臘羅馬の著述家の無言といふ一事あるのみ。論者曰く、奇蹟にして實際行はれしものならんか、殊にパレスチナの如き有名の地に行はれしものならんか、當時の學者は必ず之

を其書に滿載したる筈なり。然るにタシタス一人だけを除けば、基督教に言及せし人だにあることなし。而してタシタスも有害の迷信なりとて、侮辱を以て之を結べり。

借此のタシタスの言は曾て彼が此の問題を研究せざりしことを示す。其理由は、基督教に如何ほど反對すべき點ありとも、有害ならざるだけは確實なるを以てなり。此故にタシタスは調査をなさずして基督教を否認したるものに相違なし。而して、他の學者たち又之に同じとすれば、其基督教に言及せざりしは少しも驚くに足らず。之に反して、彼等若し調査の上之を否認したるものとせんか(即ち其所謂奇蹟を講究し、只之を確信せざりしものとせんか)、必ずや之に言及したるべしと思はる。此故に、此の反對論の効力は、之を概言すれば他なし、只當時の學者等基督教の奇蹟を研究の價ありとなさざりしといふに止まる。而して斯くの如きは事の實際なりしならん、是れ所謂奇蹟なるものは、當時にありては普通一般の事なりしを以てなり。されど、當時の學者にして、奇蹟を研究しながら其眞理を確信するに至らざりしものとは一人も是れあらざるなり。

論者は勿論是れに答へて謂はん、是等の學者とても或る事件には言及すべき筈ならずや、特にキリスト磔死の際三時間遍く地上黑暗と爲れりといふが如きは然りと。げに此の黑暗にして若しパレスチン全土に彌蔓せしものとすれば、普通歴史が一言も之を記せざるは確かに怪しむべし。されどこは只エルサレム近傍を指せしものかも知るべからず。ペテレヘムと其境の内なる嬰兒を殺せし事件は、蓋

し之に比すべし。エルサレムはベテレヘムを距ること僅かに五哩なれど、此の文句は之を含有せざる  
 こと言ふを待たず、随つて此の文句は只ベテレヘムの近傍だけを指せるものに相違なし。今も亦之に  
 等し、暗黒若し只エルサレムの近傍だけに止まりしとせば、只基督教記者のみが其書中に之を記載せる  
 は怪しむに足らず。蓋し此時の暗黒は只彼等に取りてのみ特別の意義ありしを以てなり。

信前にも説きたる、奇蹟は當時普通一般の事なりしといふ一點を捕へ、キリストの奇蹟を疑訝する  
 に用ふる人往々あり。されど實際は斯くの如きことあるべきものに非ず。否此の一點は、却て人をし  
 て一層丁寧にキリストの奇蹟を調査せしむるものなり。試みに思へ、奇蹟は常に啓示を證明する最適  
 の休徴たるに止まらず(第七章に説きし如く)、又當時の人々は此の種の萬蹟を奇蹟豫期したるが故に、  
 時に當時に適當なりしものなり(随つて欺騙者は往々之を偽作せし程なり)。果して然らば、キリスト  
 が此の休徴を興へ給ひしことは少しも驚くに足らざることならずや。否寧ろこは何人にも當然のこと  
 にて、例へば外國人を確信せしむるには、何人も其外國人の最も能く領解する國語を用ゆると一般のこ  
 とならずや。

論者は勿論之に對して抗辯して謂はん、當時奇蹟を渴望すること斯くの如くなりしとせば、キリストた  
 どひ一たびも奇蹟を行ひしことなく、若しくは偽りて奇蹟を行へりと稱せりとも、彼等は奇蹟をキリス  
 トの所爲に歸すべき筈ならずやと。然り斯くの如きは不可能にあらず。されど斯くの如きは近真と謂

ひ難き理由あり。他なし、之には最も適當と思はるゝ人物、即ちパプテスマのヨハネ(第二のエリヤた  
 る)の所爲に歸せし奇蹟の一もなきことなり。又その後、第二世紀中に、猶太人のメツシヤと僭稱せし  
 パルコクバの所爲に歸せし奇蹟の一もなきことなり。

次に注意すべきは、基督教記者の證言は、或點に於ては、猶太教又は異教記者のそれよりも一層價值あ  
 ること是れなり。是れ該世紀の基督教記者は一人だに生來の基督教徒たるもの非ざればなり。即ち彼  
 等は皆不信者たりしにて、後ち信者となれるなり。而して不信者の證言若し價值ありとせば、信者とな  
 りて其眞理に通曉せること明了なる人の證言は一層然るべし。之を要するに、最良の猶太教徒的又は  
 異教徒的證據といへば、聖パウロの如き、聖ルカの如き完全の教育ある人の證言是れなり。彼等は此の  
 證據の力にて基督教徒となれる人なるを以てなり。最後に記憶すべきは、凡そ無言を論據としたる議  
 論は、通常不健全のものなること是れなり。例せば、小ブリニーの書翰にして今日に存するもの二百四  
 十余通あれど、其中基督教のことを記載せるものとは只一通あるのみ。然るに此の一通若し紛失し  
 たりとせば如何。ブリニーの無言を論據として、基督教の傳播を否認する非常に有力の論證成立する  
 かも知るべからず。而も此の一通は基督教の非常なる進歩を記載せるぞかし(第廿一章を見よ)。

果して然らば、此の反對論は到底積極的證據を壓倒するに足らず。随つて、基督教の奇蹟は實際行はれ  
 たること、當時の猶太教徒も、異教徒も、共に異議を唱へざりしものと断定せざるを得ず。而して奇蹟



は所謂公的性質ありしものなるを思へば、こは却て奇蹟のため有力の一論證なりとす。  
 (五)之を説明せんとする無効の企。

次に説かざるべからざるは、奇蹟に對する偏理論者等の説明是れなり。抑も奇蹟の證據は以上述ぶる如く甚だ有力なり。此故に近代の基督教反對者が、只此の記事を徹頭徹尾純然たる假作なりと言ふを以て満足すべしとは思はれず。而も彼等は奇蹟を説明するとして種々の企を案出し、之が超自然的性質を剽奪しながら、奇蹟は全く無根にあらず、多少之に類せし事件ありて基督教記事の起源となれりと説かんとす。例せば、キリストが海の上を歩めりといふを説明しては是れ水面とすれくの砂洲又は岩の上を歩めるなりといひ、ラザロの甦れるは活きながら葬られたるなりといひ、五千人を養へるは初めにキリストと其使徒たち自用の食料少許を其周囲の人に分與せしに、他に之に倣ふ者ありて、遂には全体の人々食料を得たるなりといふが如き是れなり。

今は此中の一例を撰んで詳かに講究すべく、而してラザロの復活を撰ぶこととせり。偕之が説明としてルナンの會で提出せしものを舉げば、庶幾くは之が非奇蹟的説明の如何なるものかを知るに最も便利ならん。(ルナンは、會て其基督傳中に此の説明を掲げたれど、後に至り之を取り消せる様に覺ふ)。ペタニヤに於ては當時奇蹟と看做されし一事件の起りしことはルナンも之を否認せず。但し彼は之を説明して曰く、キリストが一の驚くべき奇蹟又は奇蹟類似の事を行はんことは、當時其友人たるもの

皆熱望せし所なり。是れ群民に感動を興へんと欲してなりと。斯くてルナンは其語を續けて曰く、  
 「思ふに其病全く癒えざりしラザロは、死人の如くに身を葬衣に包み、以て一家の墳墓中に蟄居したるなり」云々と。言を換へて之をいへば、ラザロは活きながら自ら己れを葬れり。此を以てキリスト招きに應じて到り、墓石の取り除かるゝや、ラザロは無論出で來りぬ。而して群衆は直ちにラザロ死より甦れりと信じたりとなり。

偕此説を論ずるに當り、第一に感ずるは此説の甚だしく不近真なることなり。夫れペタニヤの質朴なる家族が、斯くも行届さし欺瞞を計畫すべしとは是れ有り得べきことなるか。彼等若しキリストに眞の奇蹟を行ふ力あるを信せしとすれば、偽りの奇蹟の必要何處にありや。又彼等若し之を信せざりしとせば何故彼等は他人の之を信せんことを求めたりや。更に又、ラザロ自ら死を粧ひて満足するが如きは是れ有り得べきことなるか、殊に其病後たるに於てをや。加之、斯くの如き欺瞞が、當時首尾よく奏功すべしとは是れ有り得べきことなるか。又その事實の真相、後々までも外間に漏れざりしといふは是れ有り得べきことなるか。況んや、此の事件は、非常に高き評判となり、是れより前にもキリスト捕縛の折はありしなれど(約五〇十八、七〇三十二、八〇五十九、十〇三十九、十一〇八)、此の事件は遂に其近因となりし如くなるをや(約十一〇五十三、十二〇九)。殊にキリスト自ら斯くも怪絶なる欺騙に賛成し給ふが如きことは、是れ有り得べきことなるか。

果して然らば、斯くの如き説を唱へんとすれば、それが爲に非常に有力の證據なかるべからず。されど有力の證據も無力の證據も共に是れなきを如何せん。或る批評家に據れば、此説の最良の辯護は他なし、眞の奇蹟は有るべからざるものなるを認むる以上は、此のラザロ復活事件を斯くの如く解すること最も好都合の解釋なりと。而も斯る異常の説さへ、全事件を假作と認むるに比し、一層近真と思はるゝを見れば、今日の福音書の歴史は如何ばかり有力の證據を有するかを知るべきなり。

勿論反對論者はいはん、此の奇蹟にして若し眞に行はれしものならば、他の福音書記者等も亦之に言及すべき筈なりと。されど、福音書記者等は未だ曾て凡ての奇蹟を記載すと自言せしことなく、否却て彼等の記載せざる復活事件ありといへる程なり(太十〇八、十一〇四、路七〇廿二)。随つて彼等はラザロ復活事件をも略せしものなるべし。而して彼等は恐らく之を承知したりしものと察せらるゝよしあり。そは、キリストがエルサレムに於て突然非常の熱心を以て歓迎せられし事件は、彼等皆之を記載するも、一として其理由を説かず、(例せば可十一〇九)之を説明するものは、只此のラザロ復活事件のみなること是れなり。

最彼に記憶せざるべからざるは、基督教的説明は、凡ての奇蹟に對し只一困難あるのみ、即ちそは先天的、哲學的困難なりといふこと是れなり。若し一たび此困難の首肯せられし後は、二十の奇蹟を信するも、二の奇蹟を信するに比し、別に多くの困難あるとなし。偏理家の説明は然らず。其困難は集積的なり。

例せば、ラザロの復活は活きながら葬られたるなりとて之を説明したりとも、こはキリストが海の上を歩み給へることを説明せず。キリストが海の上を歩み給へるは、水面の下にある砂洲を歩めるなりとて之を説明したりとも、こは五千人を養へることを説明せず。以下皆之に同じ。之を要するに、斯る説明に伴ふ困難は、奇蹟箇々に取り大困難なるのみならず、又皆集積的なり。此を以て之を綜合すれば、全く不可勝的困難となるなり。

(丁) 結論

此章を結ぶに先だち、尙ほ一つ講究すべき大切の一反對論あり。曰く、今日は何故奇蹟なきや。今日は之を試験するに適當の時機ならずや。神若し眞に之を用ゐて、基督教傳播の助けとなし給へりとせば、何故常に之を基督教に伴はしめざるや、猶太教には常に之を伴はしめしと言ふに非ずや。奇蹟は今日基督教護持のため確かに必要なり。而して神若し相當の豫告の後、五十年目毎に公けなる不可争的の奇蹟を行ひ給はば、諸他の基督教證據は無くても可なるものをと。

此の反對論に對する答辨は他なし、基督教の啓示は、猶太教の啓示の如く間歇的啓示にあらず、キリスト及び其弟子が唯一度行へる終局的、完全の啓示なり。已に新たな啓示なきを以て、之を證すべき新たな奇蹟(即ち證明的奇蹟)もあるべき筈なし。或は後世、教會歴史の折々に行はれし他の奇蹟もありといへど、是等は通常既に信者たる人の利益の爲にせしものにて、此の問題は茲に之を論ずる必要なし。

し。若し是等の奇蹟にして眞ならば、勿論新約の奇蹟の證據となるべし。若し又眞ならずとも、新約の奇蹟は之がため非證せらるゝにあらず。猶ほ人造金剛石は眞實の金剛石の存在を非證せざると同様なり。

勿論論者は之に對して或は謂はん、神は人の新説を確實にすといふ主意にあらず、單にキリストの聖言を證明する主意にて、今日も尙ほ奇蹟を行ひ給ふを得べしと。然り、斯くの如きは勿論不可能のことにあらず。されど、聖書の中には斯くの如き奇蹟一つもあることなし。換言すれば、神の新使命を確實にすといふ主意にあらず、數百年前の舊使命を證明する主意の奇蹟一つもなし。否、聖書に據りて見る時は神の使節は皆必ず其信任状を携ふ。只此信任状は、かの豫言の場合と同様、其眞偽は後日を待ちて判明するものもなしとせず。然るを今日、俄かに神その方式を改め給ふが如きことは、争で是れあるべけんや。

之に加ふるに、神の此の方式は極めて自然的の方式なり。啓示の初めて與へられし時、換言すれば、基督教の初めて宣説せられし時は、教會は微弱なりき。敵世界の中を苦闘して進まざるを得ざりき。此に於てか、時々奇蹟の援助を與へられたりしなり。されど教會の強盛なるに至りては、奇蹟は最早その必要なく、隨つて最早行はれざるに至りぬ。蓋し奇蹟は已に其使命を完ふしたるに由る。奇蹟の目的は基督教の眞理なるを證するにあり、而して奇蹟は相違なく之を實行せり。奇蹟の顯せる證據は極めて

て力あり、敵世界も亦之に抗辯するに由なき程なりき。然り而して、神若し今日奇蹟を行ひ給ふも、萬民を一人も残らず確信せしめ得るや否や、如何程内輪に言ふも非常に疑はしきことにてあるなり。

果して然らば、此の反對論は之を放棄せざるべからず。而して吾人は此の一章を閲し來りて敢て結論す、新約の諸奇蹟は實に可信のものたる而已ならず、又非常に有力の證據を有するものなりと。殊に其所謂公的性質と之を非證する企の絶無なることとを合併すれば、此に奇蹟は非常に有力の論證を有することとなる。而して基督教以外の宗教に（勿論猶太教は別なれど）、其證據として公けの證明的奇蹟を有すと自稱する宗教ありや否や、是れ疑問なり。さすれば、基督教は特種無比の基礎の上に立てるものと謂ふべし。即ち基督教は他の宗教と異なり、最初抽象的推理や、道德的意識や、腕力の如きものに訴ふることなく、之を奇蹟的事件に訴へて其眞偽の判断を他に一任せり。而して彼等は之を判断し遂に確信を抱くに至りぬ。此に於てか吾人は結論す、新約の諸奇蹟は恐らく眞實なるべしと。

## 第十九章 猶太教の預言は基督教の眞理を保證する事

### (甲) イザヤの受難豫言

- (一) 歴史的符合非常に著るし
- (二) 教理的符合も亦然り
- (三) 近代の猶太人の解釋は成立せず

### (乙) 磔死の詩

- (一) 徹頭徹尾其能く符合する事
- (二) 取るに足らざる二三の反對論

### (丙) メッシヤの神性

之に少くとも三個の豫言あり。又三位一體説の暗示にも含蓄せらる。

### (丁) 結論

豫言は何故一層平明ならざるや。此の證據の性質は集積的なり。

本章に於て講究せんと欲するは、豫言よりする論證是れなり。借、キリストの紀元に先だつ數百年前に

方り、猶太國民の一人が人類全体の祝福となるべしと豫言せられしことは、是れ驚くべく且つ不可争の事實なり。此の約束は、アブラハムにも、イサクにも、ヤコブにも結ばれしものとして聖書に記載せらる(創廿二〇十八、廿六〇四、廿八〇十四)。而して基督教が猶太人に由りて創開せられ、又勿論人類の祝福となれるは是れ疑ふべからざる事實にて、少くとも是れ驚くべき符合といふべし。尙ほ此に一つ注意すべきことあり、即ち舊約諸書は、前に進めば進む程、此の未來的メッシヤに關する記事愈々明瞭豊富となり、遂に豫言者の諸書に及びては、全章を此のメッシヤの記事に用ゐたるもあり、基督教徒の斷言に據れば、是等は實際キリストに於て照應したりといふ。

此の論證は非常に重要なものなること言ふを待たず。随つて多少之を詳かに調査する必要あり。然るに幸にして此の調査の勞を軽減する二の理由あり。第一は年代の問題を全然度外視するを得ることなり。抑も豫言なるものにおいて、其最も大切の點は、事前の記述なるを示すにあること、是れ常則なり。然るに、舊約の豫言にありては此點は已に異議なきことなり。是れ聖陰經の幾分を除けば、舊約全体、キリストの時代以前の記述なること、何人も認むる所なるを以てなり。第二に、舊約は猶太人の自ら保存する所にして、猶太人は基督教の主張には反對なれば、即ち敵としての藏書家なり。此故に其何處を尋ねても、基督教に都合好き様改竄せられし箇處は、一も是れなきこと確實なり。

以下最も有力なる豫言中より若干を撰みて之を調査すべく、或は形容的の意義に於て、或は靈的の意義

に於てのみ照應せるものは、一切之を省くべし。又之を撰ぶにも、断片的文句よりは寧ろ全文を撰ぶこととせり。是れ断片的文句はキリストにも當て符むるを得れど、亦他の人にも當て符むるを得ればなり。例せば使者ありて彼に先だつべしといふが如き、彼は奇蹟を行ふべしといふが如き是れなり(馬三〇一、四〇五、賽卅五〇五、六)。然り而して、最初には先づイザヤの受難大豫言と有名なる磔死の詩とを稍詳かに論明し、次で稍簡短にメッシヤの神性に關する一群の豫言を調査し、最後に一の大切な反對論を講究して之を結ばん。

(甲)イザヤの受難豫言(五十二〇十三—五十三〇十二)

最初に指摘し置かんと欲することは、此文に格段取り立て、言ふ程の異譯なきこと、又此文の舊きことは何人も皆認むる所なること、是れなり。之に加ふるに、此の一文は純然たる豫言的の書より取れるものなり。即ち記者自ら將來の事件を豫言しつゝあることを自覺し、且つ讀者にも其考を抱かしむる意思なりしは、殆んど疑ふべからず。更に又此の一文は、一箇の完全体をなして脈絡貫通し、少しも他の問題を交ふることなし。此を以て、其照應に就ても、左記の各項の多數は僅々數時間内の出來事なり。以下初めに先づ歴史的符合を講究し、次で教理的符合に及ばん。

(一)歴史的符合

之に就ては、左に聖書の文と之に照應する出來事とを兩々對掲せり。此に注意すべきは、メッシヤの苦

難は通常過去の時制を以て言顯され、又その勝利は未來の時制にて言顯され、而して豫言者自身は、謂は、此の二者の中間に居ること是れなり。こは思ふに苦難は勝利の原因たる事實を高調せんが爲なるべく、之を斯く寫實的に言顯すには、蓋し最も適當の方法なりとす。

五十二〇十三「視よわがしもへ智慧をもておこなはん上りのほりて甚だたかくならん」

キリストの教と其行の優絶なるは、現今一般に人の認むる所なり。又其地位高く、幾百萬の人々の禮拜の對象となれることも争ふべからざる所なり。

十四「曩にはおほくの人かれを見ておどろきたり(この面貌はそこなはれて人と異なり、その形容はおどろへて人の子とことなれり)後には彼おほくの國民にそゝかん」

而もキリストは公けに殺され、多くの人に見られて死し給ひしが、其時受けし虐待のため(即ち荆の冠や、鞭撻の如き)、其容貌身体は甚だしく傷害せられしに相違なし。

十五「王たち彼によりて口を滅まん、そばかれらにまだつたへられざることを見、いまだ聞ざることを悟るべければなり」

されど曩に人々其苦難の大なるに驚きしと等しく、今や彼等其勝利の大なるに驚けり。而して異邦の王たちさへ、斯る前代未聞の物語を考へ、猶太人とは異にして、豫言に由りて前以て之を聞けるに非ざるを以て、尊敬の余り默然たり(伯二十九〇九比見せよ)。

五十三〇一「われらが宜るところを信せしものは誰ぞやエホバの手はたれにあらはれしや」

げに豫言者の今將に説かんとするメツシヤの一生の顛末は、真に驚くべきものにして、殆んど信すべからざる程なり。エホバの手(即ち力)とは恐らくメツシヤを指すものなるべく、而してメツシヤは殆んど何人にも認識せられざりしなり(賽四十〇十、五十一〇九、哥前一〇廿四)。

二「かれは主のまへに芽のごとく操きたる土より出る樹株のごとくそだちたり、われらが見るべきうるはしき容なく、ちつくしき貌はなく」

斯くの如きは、メツシヤが善きもの、一もなき、操きたる土と看做されし地(即ちナザレ)に住したるに由る。又其容貌は微賤にして、何等外観上の美なく、メツシヤとして期待せられしもの、如くならざりき。こは注意すべき點にして、メツシヤを信せざる理由として猶太人の擧げしもの之に外ならざりき(約一〇四十六、七〇五十二、可六〇三)又「主の前に芽の如くそたちたり」といふ一句は、

神その降誕の時より特別之に注意を與へしこと、猶ほ園丁が特種の花に對するが如くにし、而して其事業のため之に準備したまひたる意味あり。

「われらがしたふべき艶色なし」

こはキリスト受難の時即ちピラトが彼を人民に付せし時の状態に適せり。其時キリストの有様は(刑の冠等にて)、彼等之を見れども、慕ふべきものなき状なりき。

三「かれは侮ざられて人にすてられ悲哀の人にして病患をしれり、また面をおほひて避るることをせらるる者のごとく侮られたり、われらも彼をたふとまざりき」

されど彼等は直ちにキリストを棄て(前に彼等が屢次したる如く)、其代りに、バラバを求めたり。而してキリストは審問の時兵士に由りて侮ざられ、輕んぜられ、十字架に掛りし時は、祭司の長等及び有司等に由り輕蔑せられたり。

四「まことに彼はわれらの病患をおひ、我儕のかなしみを擔へり、然るにわれら思へらく、彼はせめられ、神にうたれ、苦めらるるなりと」

キリストの一生は、病患と悲哀の一生なりき。加之、その死も亦神に誼はれし者の如き死なりき。是れ猶太人は、十字架に釘けらるるものを皆斯く看做したればなり(申廿一〇廿三、加三〇十三)。

五「かれはわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みづから懲罰をうけてわれらに平安をあたふ、そのうたれし痰によりてわれらは癒されたり」  
こは鞭撻及び其他の虐待のことを説けるものなり。

六「われらはみな羊のごとく迷ひておの／＼己が道にむかひゆけり、然るにエホバはわれら凡てのもの、不義をかれのうへに置たまへり」

七「彼はくるしめらるれども、みづから謙りて口をひらかず、屠場にひかる、羊羔のごとく、毛をきる者のまへにもだす羊のごとくしてその口をひらかざりき」

キリストは往々神の羔と稱せらるゝことなるが、其虐待を忍ぶに非常の忍耐を以てせり。加之、其審問の時は自ら辯疏せず。是れピラトの非常に驚きし所なりき（太廿七〇十四）。

八「かれらは虐待と審判とによりて取去れたり、その代の人のうち誰かかれが活るもの、地より絶れしことを思ひたりしや、彼はわが民のどがの爲にうたれしなり」

キリストは偶然に殺されしにも非ず、暴徒に殺されしにも非ず。彼は裁判所の審問を受けたれど、非常に不當の罰を受けたり。其同時代の人にして、彼れの死は人民の罪の爲なるを解し、罰は實際人民

に歸すべきものなるを悟りし者、例ひ是れありしとするもいと乏しかりき。

九「その墓はあしき者とともに設けられたれど、死るときは富るものとともになれり」

彼は二人の盜賊に挟まれて死すべきこととなりしが、若しアリマテヤのヨセフの干涉なくば、普通の罪人と共に葬らるゝと疑なかりしなり。然るに其耻づべき死を遂げしこと、は不思議の對照にて、恭しく富者により（ヨセフとニコデモ）、高價の香料にて富人の墓中に葬られ給へり（太二十七〇五十七、約十九〇卅九）。

「かれは暴をおこなはず、その口には虚偽なかりき」  
彼の審判者は、屢次彼を辜なきものといへり。彼と共に刑に處せられしもの、百夫長、及び彼を賣りし者又然り。

十「されどエホバはかれを碎くことをよろこびて之をなやましたまへり、斯てかれの靈魂どがの獻物をなすにいたらば、彼その末をみるを得その日は永からん、かつエホバの悦びたまふことは、かれの手によりて榮ゆべし」  
されどキリストは其死後に至りて其末を見、又其日永かるべかりしなり。其日永しとは死より甦ることをいふ。末といふ言は勿論文字的の子孫といふ意味にはあらず。是れキリストは其死によりて

之を得べかりしを以てなり。又以賽亞書には、此の末といふ語は往々一種の人々を指すに用ゐられたり(賽一〇四、十四〇二十、五十七〇四)。故にこゝも其意義に相違なく、キリストが其復活後に見たる靈的の子孫即ち弟子を指せるなり。

十一「かれはおのがたましひの煩勞をみて心たらはん、わが義しき僕はその知識によりておほくの人を義とし、又かれらの不義をおはん。」

末とは弟子の意義なること、此に彼等と呼ばれて靈魂の煩勞といひ、肉体の煩勞と謂はざるにて明かなり。又靈魂の煩勞といふ語には、分娩の時の身体の苦痛に似たる激しき精神的苦痛ありし意を含む。是れキリストが、ゲッセマテに於て、又十字架上に於て、堪へ給へる精神的苦痛に能く當て符まるものなり(可十四〇卅六、十五〇卅四)。

十二「このゆゑに我かれをして大なるものとともに物をわから取しめん、かれは強きものとともに掠物をわかちとるべし、彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ、愆あるものとともに數へられたればなり、かれは多くの人の罪をおひ、愆あるものゝ爲にとりなしをなせり。」

此には其後彼が基督教會に於て勝利を得しことを説けり。結末の言は、キリストが二人の盜賊の間に挟まれて恥かしき死を遂げしが、而も其下手人のために祈りて「父よ彼等を赦し給へ」と言ひしことと能く符合す。

ことと能く符合す。

前掲の符合は、之を議論するまでもなく、明白にして争ふべからざることなり。而して將來の贖主が、苦難を受くると共に、又勝利を得べしと言ふは、是れ矛盾の觀あることなるに、此には等しく自信と明白を以て共に豫言せられたり。

### (二) 教理的符合

次に移りて教理的符合を論せんとす。是れ前掲一文の重要なるは、只豫言(豫言も勿論驚くべきことなれど)の爲め而已にはあらず、又記者がメツシヤの大悲劇に與へたる意味の爲なり。されば、本項に於て論せんとするは、キリストの死に關する基督教々理にして、單に之に伴へる出來事にはあらず。而して之を示す最良の方法は前の如くに兩々相對掲するにあるべく、初めに基督教々理の要點を擧げ、次で之に照應する豫言者の言を記せん。

人類は皆罪人なり

「われらは皆羊のごとく迷ひておのゝ己が道にむかひゆけり」



キリスト獨り辜なきものなりき。

『わが義しき僕』

『かれは暴をおこなはず、その口には虚偽なかりき』

○ 彼は己が罪の爲に苦みしに非ず、他人の罪の爲に苦みしなり。

『まことに彼はわれらの病患をおひ我儕のかなしみを擔へり』

○ 而もこは無辜の人が有罪の人の爲に受くる單の偶然的苦難に非ず。是れ贖罪の大事業なり、罪の献物なり。こは基督教々理の眼目にて、豫言の中にも高調せられたるが、特に此の教主のことを説くこと、是れこの豫言の主意なり。

『彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みづから懲罰をうけてわれらに平安をあたふ、そのうたれし涙によりてわれらは癒されたり』

『エホバはわれら凡てのもの、不義をかれの上に置たまへり』

『彼はわが民のことがの爲にうたれしなり』

『かれの靈魂とがの献物をなすにいたらば』

○ 『かれらの不義をおはん』

『かれは多くの人の罪をおへり』

○ 斯くキリストは世界の罪を負ふ結果、身体の苦難を受くるのみならず、又心的及び靈的の苦難を受け給へり。

『己がたましひの煩勞』

『彼はおのが靈魂をかたぶけて死に至らしめたり』

○ 此の贖は古來猶太人の行へる凡ての犠牲の照應なり。此を以て、キリストが猶太の逾越の時死に處せられしは、特別の意義にて適當なりしなり。

こは此の豫言に使用せられたる犠牲の言に顯れたり。例せば、とがの献物なる言は、利未記其他に使用せらるゝ罪祭と同じ言なり。又こゝに、『彼おほくの國民にそゝがん』といふ奇妙なる一句あり、是れ猶太の犠牲に於ける血を灑ぐことを指すに相違なし(例せば利十六〇十四—十九)、是れ其用語同一にして、其意味は罪より彼等を潔むるにあるを以てなり。

而もそれは只猶太人を益せしに止まらず、又人類全体を益したり。

「おほくの國民」といふ中には、猶太人も異邦人も、共に含むものに相違なし。而して猶太人が之を豫言したるは、其排外的なるより見て、實に驚くべきことなりとす。

之に加ふるに、キリストの犠牲は隨意的の犠牲なりき。キリスト曰く、我より之を奪ふ者なし、我みづから之を捐るなりと。又曰く我心いたく愛て死るばかりなりと。而もこはキリスト降生の目的なりしなり(約十〇十八、十二〇卅七、太廿六〇卅八)。

「彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめたり」。此の一句には其死が隨意的の死なりし意味あり。然らざれば、「彼死せり」とか、「彼死に處せられたり」とかあるべき筈なり。こは此の一句の前後を見れば一層明かなり。即ち彼が掠物を分つことを得べかりしは、全く隨意的に死したる爲なり。斯くの如くにして、キリストの死は其勝利の必要條件にて、其隨意的なりしは明了なり。尙ほ之と同じ意味は、己れを卑くし給へりといふ言にも顯れたり。此語はその自卑が隨意的なりし意を含む。詳言すれば、彼は自ら己れを困むることを許し給ひしなり。

而もこは或意義に於て、神の命令に由れることにして、且つ神の意に適ふことなりき。

「されどエホバはかれを碎くことを喜びて之をなやましたまへり」

キリストは此の隨意的献物の結果として、教會即ち一個の大なる帝國を建設せり。此の帝國は、世界の諸王國に對して能く己れを保持する力あり。

「このゆるに我かれをして大なるものとともに物をわから取しめん、かれは強きものとともに掠物をわからとるべし」

「あがりのぼりて甚だたかくならん」

且つ彼の教會は、人を導きて之を神に至らしむるに於て非常の成功なりき。而してこは神の特に求め給ひし所なり。

「エホバの悦びたまふことはかれの手によりて榮ゆべし」

之に加ふるに、キリストは其受難の諸の結果を豫見し、而して之に満足し給ひたりしなり。

「彼その末を見るを得ん」

「かれは己がたましひの煩勞をみて心たらはん」

最後に基督教徒は獨りキリストの贖によりて義とせらるゝものなり。

『義しき僕はその知識によりておほくの人を義とし、又かれらの不義をおはん』

以上述ぶる所は、全く基督教會のキリストに當て符まること明了なり。而して之と共に又明了なるは、其他の何人にも當て符まらず、又當て符むるを得ざることなり。是れ基督教々理の多くは全く特種無比にして、猶太教又は其他の宗教に類似の點なきに由る。げに此の當て符まり方は實に著るし。此故に、若し此に基督教を承知すれど以賽亞書を承知せざる人ありて、初めて此の文句を見たりとせよ、或は之を聖パウロの書翰の一より拔萃せるものと思ふかも知るべからず。然り、此の文句は聖パウロの書翰にありたりとも、少しも不似合には非ざるなり。

(三)近代の猶太人の解釋

以下、反對者は之に就て如何に説くかを研究せん。先づ、古代の猶太人の多數は、皆此の文句を將來のメツシヤを指すものと解釋せり。されど近代の猶太人は、之を猶太國民を指すものと説明す。即ち彼等の説によれば、こゝは國民を一人に擬人し、エホバの僕と言へるものとなす。勿論、イザヤの往々猶太人のことを神の僕といへることあるは、之を認めざるべからず(例せば「わが僕イスラエルよわが選めるヤコブ」の如き是れなり。賽四十一〇八)。されど、イザヤは未だ曾て「我義しき僕」といふ言を用ひしことあらず。之を用ひたるは只この文のみにて、且つ此語は勿論猶太國民全体には當て符まらざるなり。

るなり。

而も此の預言は孤立のものに非ず、是れより少し前に粗ぼ之と同様の文あるを記憶すること大切なり。曰く、「ヤコブをよたへ己にかへらしめ、イスラエルを己のものにあつませんとて、我をうまれいでしより立て、己の僕となしたまへるエホバ、いひたまふ(我はエホバの前にたふとせらる、又わが神はわが力となりたまへり)その聖言にいはいはく、なんぢわが僕となりてヤコブのもろくの支派をおこし、イスラエルのうちののこりて全うせしものを歸らしむることはいと輕し。我また汝をたて、異邦人の光となし、我がすくひを地のはてにまで到らしむ。エホバイスラエルの贖主イスラエルの聖者は人にあなごらるゝもの、民にいみさらはるゝもの、長たちに役せらるゝものにむかひて如此いひたまふ、もろくの王はみてたち、もろくの君はみて拜すべし」(賽四十九〇五―七)。

此に注意すべきは、文中、エホバの僕はヤコブ及びイスラエルと區別せらるゝこと二回に及び、確かにメツシヤを意味すること是れなり。又メツシヤが生涯その事業の準備をなすこと、其事なきこと(こはエホバの前にたふとせらるといふ一語にその意味存す)、その猶太人並びに異邦人に救を興ふること人に侮ざられ民に忌み嫌はれて謙遜なること、最後に勝利を得て異邦人の王さへ彼に屈服するに至ること等は、皆此の文中に説示せられて、頗る前掲の一文に類す。

尙ほ少くとも此他の二の文中にあるエホバの僕なる語は、實人物若しくは假想的人物を指すも、國民を

指すことなし。例せば、左の一文の如きは（此文は悉くキリストに照應す）、猶太國民を指すものと見るを得るか、曰く「われを搦つものにわが背をまかせ、わが顔をぬくものにわが頬をまかせ、耻と唾とをさくるために面をおふことをせざりき」と（賽五十〇六―十、四十二〇―一六）。

勿論以賽亞書記者が、斯く僕といふ語を二つの意義に用ゐたるは、是れ難解のことに相違なし。此に於てか、種々之を説明せんとするの舉は出でたれど、其斯く用ゐられたる事實は、之を變更するを得ず。由て思ふに、最も善き説明は他なし、イスラエル人は最初神の僕たるべく企てられしなり、而も其罪の爲め不適任となりぬ。此に於てか、神は其後義しき僕を起し、之をして其欲する所を悉くなさしめ、以てイスラエルの過失を贖はしめんと約束し給へりとの説明是れなり。尙ほ吾人の記憶せざるべからざるは、僕といふ語は、撒加利亞書にも（我僕たる枝）、新約書にも共に之をメツシヤに適用せること是れなり（亞三〇八、徒三〇十三、腓二〇七）。

之に加ふるに、猶太人の解釋は、此の豫言の微細の點を説明せず、又説明するを得ざらしむるのみならず、又此の豫言の眞髓を無視するものなり。此の豫言の眞髓とは他なし、苦難は贖罪の性質あるものなりといふこと是れなり。夫れ猶太人の苦難は隨意的のものなりとは何人も之をいふを得ず。又己れの罪の爲にあらず、他人の罪の爲にて、即ち之を贖ふものなりとも言ふを得ず。今此の論鋒を他の言にいひ換へんに、彼はわれらの愆のために傷けられたりといふか如き一句に於て、彼は猶太國民を指すと謂

は、われらは誰を指すと謂ふべきや。果して然らば、此の解釋は全然成立せず。随つて以賽亞の文は基督教徒の斷言する意味なるか、然らざれば無意味のものなりとす。

終りに再應指摘せんと欲することは他なし、以上キリストの死に伴へる歴史的の種々なる事情と、又之に關する種々の驚くべき基督教々理とは、皆收めて純然たる豫言的の、而してキリストよりも數百年前に成りし十五節の文中にあること是れなり。斯くの如き符合は偶然に由るといふが如きこと、萬々是れあるべからず。然り、斯る斷案は信じ得べしと思はれず。

（乙）磔死の詩（詩二十二〇）

次に更に別の驚くべき豫言に就て論ずべし。是れ此の有名なる詩は、磔死を記するものと解釋する外なきを以てなり。勿論此の中の確の句といへば、只わが手およびわが足をさしつらぬけりといふ句是れのみ。されど此の一句の外、文中に記載せられたる諸の苦難は、石殺、斬殺等の如き磔死以外の場合に起るべきものにあらず。而して此の詩は、其幾多の事情に於ても、又其範圍及び意義に於ても獨り能くキリストの死と相符合す。此故に、吾人は先づ其密接なる符合を講究し、次で重なる反對說の中の幾分を論せん。

（一）其能く符合する事

詩は已に人の能く知る所なれば、此に其全体を掲ぐる必要は無かるべし。只毎節の符合を指摘するこ

とせん。

一節 キリストが神に棄てられしを感じ、且つ「わが神わが神なんぞ我をすてたまふや」といふ言を其儘用の給ひしこと。

二節 又其前夜には救助を祈り給へること(可十四〇三十五、來五〇七)。

三―五節 されど彼は神の撰民たる猶太人に罵せるものなり。而して猶太人の先祖たちは前に神の助けを受けしことは、幾度なるを知らざるに、キリストが斯く感じ、斯く祈り給へること。

六節 彼が人の侮辱輕蔑を受け、人に賤しめられて憐れむべき状態にあること、數時間に涉れるが如くなること。

七節 是れ彼等が首を揺りてキリストを語りし時の状態なり。

八節 彼等は此時、かれはエホバに依頼めりエホバ助くべし、エホバかれを悦びたまふが故にたすくべしといふ言を、その儘用のたりしなり。此言を以て見るに、此の話者は猶太人なり。随つて彼は自國民環視の間に死に處せられしなり。最後の一句は反語的の意味に相逢なし。即ち受難者自ら神われを悦ぶと主張すとなり、換言すれば、一種特別の意義にて我は神の愛子と主張すとなり(太廿七〇四十三)。

九節 實際神は特別に彼を其幼時より保護し給ひたりしこと。

十節 彼の一生は全く神に献げられしものなりき。此故に彼は其誕生の時より神をわが神といふを得たりしこと(賽四十九〇五比見せよ)。此に注意すべきは、人なる母のことに説き及ぶこと一回に止まらざるに、彼が人なる父を有したる口氣は一回も之を漏さるることなり。

十一節 彼が弟子等に棄てられ、一人の救助者もなきに至りしこと。

十二節 否却て彼はバサンの牡牛即ち其敵に取り捲かれたりき。此のバサンの牡牛といふ奇蹟は、他の處に不正なる有司を呼ぶに用ゐられたれば(歴四〇一、結三十九〇十八)、能く祭司の長等及び有司に當る。彼等は不正にもキリストに罰を與へしものなればなり。

十三節 彼等は十字架の周圍に立ち、キリストを嘲けりたりしなり(太廿七〇四十一、路廿三〇三十)。

五) 口をあげといふ語は侮辱の意味にて、普通に用ゐらるる言なり(例せば伯十六〇十、哀二〇十六)。

六) 而して斯く人を動物の如くに言ひ做す習慣は、一見奇なるが如くなるも、是れ純然たる東洋的語法にて、聖書に其例尠からず。

十四節 彼の脇腹を刺し貫かれ、之がため多量の水の如き液体(凝結せる血に交りて)瀉ぎ出でしこと。而して、こゝには其原因と覺しきこと(即ち心臟の破裂)、暗示せられたること。又彼の骨は十字架にかゝりし身体の重量にて殆んどはづれ居たること。

十五節 其死の少し前に、苦痛と、疲勞と、非常の渴ありしこと(哀四〇四、約十九〇廿八―卅)。

十六節 キリストが十字架に釘けられしこと(即ち其手と其足を刺し貫かれて)之をなせし人をこゝには犬と呼べり。犬とはキリスト自ら猶太人に區別して異邦人を呼ぶに用ゐ給ひし侮辱の言なるが(太十五〇廿六)、彼を十字架に釘けしは異邦の(羅馬の)兵士なれば、此の名稱は能く當て符まれり。

十七節 彼等がキリストの遺体を隠せしこと。随つて其骨は著しく突起して見へしこと。又彼等が立ちて彼を眺めしこと。

十八節 又彼等が圍を抽きて、キリストの衣服を分配せしこと。

十九―廿一節 是れは救を確信して献ぐる短かき祈禱なり。劍といふ言は、犬又は獅子の口等の語と共に用ゐられたれば、必ずしも文字的に解釋するを要せず。こゝにても(他の場合に於けると同様)母後十一〇廿四、十二〇九(變死を指すものと見て差支なし)。

廿二節 以下、此の詩の調子俄かに一變せり。即ち受難者稍その生氣を回復し、直ちに神の聖名を其兄弟に傳へしことを説けり。されど彼等は素より猶太人なれば、豫じめ神の名を承知せるものに相違なし。故に此の意味は神の名に就て尙ほ一層深く之を説けりといふにあるならん。而して、こゝはキリストが此時初めて神の眞の完全の名たる父と子と聖靈とを其兄弟と稱せし使徒たちに傳へ給へることに照應す(太廿八〇十、十九、約十七〇廿六)。

廿三節 之に加ふるに、其教は世界全体に取りて大切のことなり。大なる祝福は是より生じ來らんとす。而して此の祝福は猶太人より初まる。

廿四節 又此の祝福は神が其苦難を輕視せず、却て之を受納し給へること、多少關係あり。

廿五節 此の祝福の中には或る誓(此の語の意味不明なり)をも含めり。

廿六節 又壯大なる饗宴をも含めり。此の饗宴は貧者即ち謙遜者之を食ひて飽くべかりしなり。是れ(通常の食事とは異にして)彼等がこゝしへに生くること、關係あるを以てなり。此を以て、此の饗宴は聖晚餐のことを指すと解する人往々あり。是れ聖晚餐にも「此パンを食ふ者は窮なく生べし」とて、同様の言使用せられたるが如くなるを以てなり(約六〇五十八)。

廿七節 斯くて祝福は異邦にも及び、遂に地の端々にまでも達すべく、其時は、彼等も眞の神エホバの禮拜者となるべし。

廿八節 猶太王國も、異邦も、全世界皆共に實は此のエホバに屬するなり。

廿九節 猶太人たると異邦人たるとを問はず、地上の凡ての富者も亦此の驚くべき饗宴を食ふべく(随つて此の饗宴とはエルサレムに於ける文字的の食事には非ず)又死せる者と活ける者の神たる彼を拜すべし。

三十節 以下裔が彼に事ふることを記せり。裔とは恐らく以賽亞書に用ゐらるゝが如く、代々の弟

子等をいふものならん。而して此の弟子等は、何れも此の次代のものに此の大なる救を傳ふべしとなり。

卅一節 而して順次將來の代に及ぼすべしとなり。こゝに「エホバの行爲なり」と譯せられし言は、

此の詩全体に係る言なりと解する人あり。而して其意味は苦難と贖罪の事業全く終結せり、即ち事終りぬといふにありといふ。果して然らば、十字架上にキリストの發し給へる我事終りぬといふ言と相照應するなり。

此の全文を通じて、符合の極めて著しきは、何人も之を認めざるべからず。但し勿論反對説のなきには非ず。

(二)二三の反對論

第一は曰く、記者はメッシャを指すの意味にて此詩を作れりを見るべき點一もなし(但し猶太人の中には、此詩をメッシャ的の詩と解するものあるは、一奇と謂ふべし)。隨つて例ひ符合はありとすとも、それは畢竟偶然の符合に過ぎずと。されど、此の凡ての符合を悉く偶然に歸するは、如何にも不眞の考へなり。否此詩は確かにメッシャを指せるものと見るべき徴候歴然たり。是れ其終りに異邦人の改悔を説けることにして、斯くの如きは、猶太の他の豫言者が必ずメッシャの時代と相關係せしむることを以てなり。故に此の點は頗る重大のことなり。

之に加ふるに、此詩若しキリストを指せるにあらずとすれば、何人を指せるものなるか判じ難し。是れダビデにも、ヒゼキヤにも、其他此の時代の何人にも、全く當て符まらざるを以てなり。其理由は、磔殺は猶太の刑罰にあらず、猶太にては、只時々、死体を樹上に懸けしことあるのみ(申廿一〇廿二、書十〇廿六、母後四〇十二)なればなり。而も此の受難者は、前にも既に言ひし如く、猶太人環視の間に死に處せらるべきものなりしは、七八兩節を見て明了なり。而して此の奇なる變状は、恰かもキリスト時代の實狀に相當せり。蓋し當時猶太は羅馬の領地なりしかば、猶太人の死に處せらるゝや、自國民環視の中に於てすべし、而も猶太の風俗たる石殺にはよらず。磔殺に由ることあるべきを以てなり。

其他細目に就ても當て符まらざる所多し。例へば、ダビデの衣服は其敵等の間に分配せられしことあらず。而もキリストの衣服が、斯く分配せられたりしは(例ひ福音書に據らずとも)之を疑ふを得ず。是れ囚徒の衣服は、通常之を處刑したる番兵の役得なりしを以てなり。

又ダビデなどを指すと見るは、如何にも近眞ならざる一の理由あり。そは此の受難者には罪の意識全くなきが如く、己れの惡を悲まざること是れなり。されど詩記者等は、自ら己れのことを書く時には往々其罪を意識し、其惡を悲むを見る。されば此點より考ふるも、此詩は全くキリストに當て符まる。是れキリストが其罪を意識せざりし一事は(次章にも説くが如く)、其品性の一特徴たりしを以てなり。又ダビデの救が、異邦人の改悔の原因となりしといふこと決してなし。而もこは既説の如く此詩の大

極點なれば、此點のみよりいふも、凡て他の解釋は成立せざるなり。

されど此の反對説は(此の反對説は又舊約の他の諸豫言に對しても試みらるゝものなり)何れにしても不健全のものなり。是れ豫言の眞の作者は何人かと問ふこと、此の反對説の主意なるを以てなり。曰く、此の作者は、人間なる豫言者か、或は又豫言者に靈感を與へて之を書かしめし神なるかと。豫言者は勿論此の間に對し、明かに後者なりと答ふ。豫言者は自ら、特別の技能ある人と稱せしことなく、只エホバの代辯者と稱せるのみ。即ちエホバの言彼等に達するか、又は異象を其目に見ることあれば、彼等は之を人に傳へたるのみ。此故に彼等自ら其豫言の意義を解せりと看做し、又は解せりと自任せりと看做すは、共に非なり。隨つて此の反對説は直ちに不成立に歸するなり。(彼前一〇十、十一)而して、此の詩は勿論純然たる豫言といふにあらざるも、斯く種々の點に於てキリストの一生と相符合する以上は、之をキリストの豫言と看做さざるを得ざるなり。

第二は曰く、此詩の文句には、キリストに當て符まらざるが如くなるもの一ならず、特に二十五節の誓といふ文句は即ち然りと。されど、例ひ此點を認むるにしても、それは他の處々にある著しき符合には妨あることなし。例せば、人の肖像に處々欠點あるが如く見へたりとも、尙ほ其人の肖像には相違なきが如し。思ふに、誓といふ語の最良の説明は他なし、猶太人は、其風俗として、若し災に罹る時は誓をなし之を救はれなばエホバに犠牲を獻ぐべしといひ、後ち貧民を饗して之を果たすといふことあり。即ち

今は此の風俗を指せるものならんと解することは是れなり。然るに此詩に所謂饗筵は勿論文字的の饗筵に非ざるを以て、此の誓も之を文字的に解する必要あらざるなり。

第三の反對説は曰く、此の豫言を初め他の舊約諸豫言に應ずる事件は、皆必ずしも、實際に起りしにはあらず。中には故意に偽造せられしものも亦是れありと。されど、此の反對説は福音書記者の徳性を無視せる説にして、即ち彼等は故意に虚偽を語り、舊約の豫言の照應を枉ふ詐漢なりとするものなり。こは極めて同意し難き説なり。且つ夫れ斯くの如き説明は只少數の場合に當て符まるのみ。福音書記載の事件は大抵公けに起れるものなれば、當時の人の皆熟知せし所なるべきを以てなり。

或は事件の極めて瑣細にして、随分偽造の疑も起るべき場合にありてすら、尙ほ斯る説明は必ずしも成立するものに非ず。例せばキリスト十字架にありし時、其敵之を嘲けり、「彼は神に依頼めり神もし彼を愛まば今救ふべし」(太廿七〇四十三)といひしことを一考せよ。當時の境遇にありては、斯る出来事は蓋し有り得べきことと思はる、即ち祭司の長たち其眞實の意義如何をも察せずして、(恰かも今日の人が聖書を引用することある如くに)、人々に膾炙せる一句を引用すること、決して訝かしきことに非ず。されど、祭司の長等は實際斯く言はざりしと假定せよ、さすれば、福音書記者は磔死者を嘲けりし言を記せる此の詩篇に照應せしむとて、祭司の長等のことを偽作し、而も自ら其照應を指摘することをなさず、以て後世其讀者が偶然に之に氣付くに一任せるものなるべきか、決してさることあるべから



ざるなり。

果して然らば、以上三箇の反對說中、一として取るに足るものなし。之に反して、此詩の記事とキリストの死及び復活に伴ふ事件とは、前條已に記する如く、頗る能く符合し、偶然と看做すを得ざるなり。

(丙)メツシヤの神性

最後に記載せんとする例は、前條記載せるものとは其種類同じからず。そは、即ち舊約の中に、其文字的意義に由りて解すれば、將來のメツシヤは曾に超人者なる而已ならず又神なることを、或は明かに或は暗に説ける句抄からざることは是れなり。而して猶太人は元來嚴重の一神論者なるを思へば、其斯くの如きは極めて注意すべきことなり。以下其最も大切なるもの三を擧ぐることにすべし。

『ひとりの嬰兒みどりこわれらのために生れたり、我儕はひとりの子をあたへられたり、政事まつごとはその肩にあり、その名は奇妙、また議士、また大能の神、とこしへのち、平和の君となへられん』(賽九〇六、十〇廿二) 是れ明かに嬰兒と生るべき者の神性を説きたるなり。就中、大能の神なる語は、之を他の語に翻譯するを得ず。普通英譯の欄外にも、改正譯の欄外にも、他の譯語を擧げず。加之これと同じ言は次章にも記載せられたるが、其處にては明かに大能の神といふ意義にて、決して他の意義に非ず。尙ほ又とこしへのちといふ言も、文字通りに永遠の父にて、即ち永久者といふ意なり。永遠の父とは、是れ又神の尊稱なるが、こは、基督教の教理に、成肉したるは子にして父に非ずといふものと相矛盾することなし。

更に注意すべきは、是れより數節溯れる所に、此の將來のメツシヤの傳道は、ガリラヤ海の邊ゼブルンとナフタリの地より開始せらるべきを記せることは是れなり。キリストは事實こゝに其傳道を開始し給ひたりしなり(賽九〇一、二)。

『ベテレヘム、エフラタ汝はユダの郡中にて小き者なり、然れどもイスラエルの君となる者汝の中より我たぬに出べし、その出る事は古昔より永遠の日よりなり』(米五〇二)こは永遠の日より存在したる者の降誕すべき豫言なり。随つてメツシヤは前在せるもの、又神性を具へしものなること、之に由りて明かなるが、此のメツシヤはベテレヘムにて生るべかりしなり。而して事實キリストはベテレヘムにて生れ給へり。

『萬軍のエホバ言たまふ劍つるぎよ起て我牧者我伴侶なる人を攻よ』(亞十三〇七)こゝに伴侶と譯せられたる言は、利未記の外になき言なり。而して利未記には十一回使用せられ、通常は隣と譯せられたるが、此言は二人同等の意義を含むを常とす(利六〇二、十八〇二十、十九〇十一、十五、十七、廿四〇十九、廿五〇十四、十五、十七)。されば、こゝの文は神自ら劍(劍とは前にもいひし如く變死を意味するに用ゆる言なり)を以て殺さるべき牧者を、己れと同等と言ひ做せるものなるが、之と同時に此の牧者は又人なり。果して然らば、此言に相當するものは神にして又人たる(神と同等者たると共に、又人と同等者たる)メツシヤの外はあらず。

尙ほ同じ撒加利亞書にキリストを指せる一文あり、そは受難當時の一事件のみならず、之に關連せる諸事件を擧げ、而して其中にはキリストの神性を斷言せるものあるにて明了なり。即ち此文は、(亞九〇九—十一)初めに先づユダヤ人の王(又はエルサレムの王)のことを説きたるが、此の名稱は特にキリストの受難週間の尊稱なり。蓋しキリストは王として群衆に歡迎せられ、審問の時にも自ら王と稱し、ピラトも王として彼を呼び、同席したる者等又王なりといひ、王として罰せられ、嘲けられ、磔殺せられたればなり(例せば路十九〇三十八、可十五〇二、九、十二、約十九〇十六、可十五〇三十、卅七)。尙ほ同じ節に、彼(義しき救主)が驢馬に騎してエルサレムに入れる謙遜の狀と、其歡迎せらるゝ狀との豫言あり。又其次の節には、彼が將來の領地は世界大なること(勿論平和的なれど)と、其血によりて結ばるゝ新約のこと(可十四〇廿四)とを記せり。

尙ほ撒加利亞書には、彼(主エホバ)が銀三十に賣らるべきこと、其金はエホバの室に投げ入れらるべきこと、而して後ち陶工に與へらるべきことも記載せられたり。又彼(主エホバ)が其脇腹を刺さるべきこと、罪の贖をなすこと、汚れし鬼を逐出す如きこと、其手の傷けらるべきこと、弟子に棄てらるべきことなども記載せられたり(亞十一〇十二、十三、十二〇十、十三〇一—七)。

勿論是等の豫言は皆形容語を以て言願され、且つ往々他の問題と混記せられたり。此を以て、此の中の只一例だけにては、之を有力の論證といふに足らず。されど、當日といふ一句が反覆記載せられて此の

諸章(九—十四)に涉り、十七回の多きに及べるを見れば、相互の間に何等かの實關係あるものに相違なし。何れにしても、是等の豫言が陸續として記載せられたること、其終結點は人なると共に又神の伴侶たり同等者たるもの、變死たること、は、之を偶然に由るものとは看做し難し。而してそれより更に數節後には、一の注目すべき記事あり、即ちエルサレムの滅亡は是れなり(其豫備的攻圍と慘狀とは、是れより前に記載せられたり)。又異邦人の改悔を記し、主エホバ全地の王として認められんといへることも注目すべきものなりとす(亞十四〇二、九、十二〇二、十一〇九)。

メツシヤの神性も、舊約書に記載せらるゝ三位一体の暗示中に自ら籠れり。偕三位一体説は、之を猶太人の一神説に比すれば、素とより一層豊富完全の神觀なり。さればとて双方互ひに相矛盾するにはあらず。是れ基督教も亦猶太教と等しく神は獨一なることを斷言するものなればなり。只基督教は、此の獨一の神性中に三の別々なる位(ペルソン)あることを肯定する而已。

三位一体説が舊約書に暗示せらるゝ如く覺しきは、如何に内輪にいふも注意すべき事實なり。例せば希伯來語にて神をエロヒムといふ。エロヒムは複数の語なれど、奇妙にも之が形容詞及び働詞は通常單數なり。即ち創世記第一章一節を直譯していへば、「元始に神々なる彼は天地を創造たまへり」となる。勿論此語に斯る意義あることを打消さんとして、古來種々の企も出でたり。例せば、主又は主人といふ語も時々之と同一語法に據ることありと言ふが如き、又是れは昔の多神教の遺物なりと論ずる

が如き、又は是れは貴顯者の複數にて、皇帝自ら己れを指す場合に我儕といふに同じとするが如き是れなり。されど右の第三の用法は、太古の世に使用せられしとも見へず。聖書の中には之が一例もなく、却て王者は必ず己れを稱するに單數を用ゐたるを見るなり（例せば創四十一〇四十一、喇六〇十二、但四〇六）。

そは兎に角猶太人が、神を呼ぶに複數の名を用ゐ、之に附するに單數の働詞を以てせしことは、事實動かすべからず。而して此の事情を一層顯著ならしむるものは、エロヒムが往々エホバなる單數の名稱と併記せられ、エホバ・エロヒムとあること是れなり。エホバ・エロヒムは之を直譯すれば、エホバなる神々なり。因みにいふ、此のエロヒムなる言は、僞の神々に用ゐらるゝ場合には、必ず其働詞を複數にす。

之に加ふるに、神は複數を用ゐて語り給へる如く記せられし所往々あり（創一〇廿六、三〇廿二、十一〇七）。例せば、神言ひ給はく、我儕の像の如くに我儕人を造らんと。其語氣恰も神なる他の位（ヘルソン）に對して相談をなすが如し。何となれば、此語は天使又は他の存在者に對しての相談にあらざればなり。是れ彼等も亦受造者にして、同等の創造者と看做すべきに非ざるが故なり。然るに、其次の節には早や單數を用ゐて「神其像の如くに人を創造たまへり」とありて、神には複數性あると共に、又單數性あることを顯せり。更に是れよりも一層注目すべき句は、「視よ夫人我等の一如くなれり」といふもの

是れなり。是れは到底「貴顯者の複數」とは解するを得ず。是れ王は自ら我儕といふことあるも、未だ我儕の一といひて己れを指せし王は非ざればなり。要するに、我儕の一といふ語は、他に話者と同位地の人のある場合にのみ用ゆることを得る句なり。此を以て、神が之を用ゐ給へりとするれば、神には他の人格あるの意なること必然なり。之と等しく、神は「われ誰をかつかはさん誰かわれらのために往べきか」と言ひ給へりと記せる所あり。是れ亦單數性の中に複數性あることを示すものに似たり。而して其少し前に、三たび聖なるかなと言ふ言あるを以て見るに、此の復數性は即ち三位一体なり（賽六〇八）。以上掲げたる諸の文句には必ず何等かの説明なかるべからず。而して能く之を説明するものは、只基督教ある而已。

(丁) 結論

此章を結ぶに先だちて、講究すべき一の大切な反對説あり。即ち論者はいふ、是等の豫言にして若し眞にキリストを指すものとせば、何故一層之を明了にせざりしや。神若し未來を豫言し給はんとせば、是れより以上のことをなし給へるに相違なし。而して其處此處へ只數言だけを加へ給へる丈にて、其キリストを指すこと明確となれるならんこと。然り、數言は能く之を明確ならしめしならん。されど神は之を明確にするを欲し給はざりしものと覺し。思ふに、上掲の諸豫言にして若し一層明了ならんか、豫言自ら其照應を妨害する恐れあり。試みに思へ、猶太人等若し確かにキリストのメッシヤなるを

承知せば、之を磔殺する如きことある筈なし。然り而して、一方に於て預言は今日の儘にて、もはや明了のものと思ふ人は是れ多きぞかし。

之に加ふるに、豫言者たちは、吾人の判断し得る限りにては、其啓示を有聲的に又連續的に受けしに非ず。却て恍惚の境に入りて異象を見たるなり。果して然らば、其文体に一種特異の點多きは怪しむに足らず。たとへば、豫言には將來の出來事が、現在の時制又は過去の時制にて記せられし所往々あり。又將來の人に對して語り、或は之を今壇上にあるが如く言ひ做せる所あり（視よ等の言を用ゐて）。又將來の人が口を開いて語るが如くに記されし所もあり。是等は皆多少文意を曖昧ならしむるものなり。されど大切の點は、豫言が今一層明了にすべからざりしや否やに存せず、却て余り明了にして偶然と言ひ難きや否やに存するなり。

最後に一言せざるべからざるは、此の證據の性質は集積的なること是れなり。抑も上來調査したりしものは僅々數例に過ぎず。されどメツシヤに關する豫言なるものは、明不明必ずしも一ならずされど、舊約書中處々に是れ多きこと、前に已に説きしが如し。而して普通に舉示せらるゝものゝ内には、軟弱のもの空想のものも是れあれど、亦然らざるものも尠からず。而してこは例に由りて今の論法に二重の關係あり。

第一に、豫言は如何ほど多くとも、之がため基督教の解釋は其困難を増すといふこと少しもなし。是れ

二十の豫言を認むるも、二の豫言を認むるに比して別に困難なることなければなり。然り而して此の幾多の豫言は、個々互ひに孤立せず、却て一個完全の系統をなすが故に、此の困難は其然らざる場合に比すれば一層少し。

第二に、豫言の數は多きを以て、之がため基督教の以外の解釋は非常に其困難を増す。是れ二十の豫言を否定せんとするは、二の豫言を否定するよりも一層困難のことなるを以てなり。例へば一の豫言は僥倖の符合として説明するを得たりとも、此の説明は第二の豫言の説明とはならず。第二の豫言若し稍牽強附會的ながらも説明せられたりとも、それは第三の豫言の説明とならず。以下皆斯くの如し。斯くの如くにして、困難は其一々に於て大なるのみならず、又集積的なり。随つて悉皆の困難を併はする時は、不可勝の觀を呈すべし。之を要するに、是等の豫言は、基督教に取りて一種有力の副證たること言ふを待たざるなり。

## 第二十章 キリストの品性は基督教の眞理を保證する事

キリストの品性は只之を新約書に由りて推斷するを得べし。キリストは純然假想的のものなりとす。

### (甲)キリストの教説

- (一) 教説の優秀
- (二) 二個の小反對説
- (三) キリストは罪を意識せざりき。故にキリストは完全の人に相違なし。

### (乙)キリストの主張

キリストは斷定すらく、

- (一) 己れは超人者なりと(即ち世界の主宰者、贖罪者、最終審判者なりと主張せり)
- (二) 己れは神なりと(神と同等、一体にして又神と共に前在せりと主張せり)
- (三) 斯くの如きは、其同時代者の、敵も味方も共にキリストを解せし意義なりき。

### (丙)大なる代説

オカキキチヤ

果して然らば、キリストは單の善人たるを得ず。即ち其自ら主張する如く神なるか、然らざれば斯る主張をなすを以て惡人となさざるを得ず。されど、第二の見解は其徳性より見て成立せず。

本章に於て講究せんと欲するは、キリストの品性と其基督教眞理に及ぼす關係是れなり。猶キリストの品性の如何なるものは、只之を四福音書に由りて知るの外はあらず。四福音書に顯はれざる品性を備へしキリストは、是れ純然たる假想的人物にて、之をキリストと呼ばざるも亦可なり。然らば即ち、四福音書を柔として考へなば、キリストの品性果して如何。之を知らんと欲せば、記録に存するキリストの教説と主張とに由りて推斷するに如かず。而も此の兩者は、幸にして非常に詳かに記録せられたり。由て初めに先づ此の二を講究し、次で論理の必然より生ずる大なる代説に及ばん。

### (甲)キリストの教説

此の題下に於ては、最初に先づキリストの教説が人の認むる如く優秀なることを論じ、次で往々人の唱道する二の反對説に及び、最後にキリストが罪を意識せざりしことを説かん。

### (一) 教説の優秀

第一にキリストの徳教の優秀なるは、今日に於ては殆んど之を主張する必要なし。是れ現今文明世界の等しく承認する所なり。而して基督教徒も偏理論者も、あらん限りの言を盡して其功徳を稱讚す。

乞ふ、少しく其例を擧げん。

シエー・エス・ミル曰く、「此人を撰みて人類の理想的代表者となし、又指導者となせる人は、之を宗教の撰擇を誤まりしものとは謂ふべからず。且つ今日にても、抽象的の徳目を翻譯して之を具體的となさんと欲せば、キリストの賛成すべき生活をなさんと努力するに如くはあらず。是れ不信者にありてすら尙ほ然り」と。

エ・ルナン曰く、「イエスは人類に取りて永久に道德的更生の無盡蔵なり」と。又曰く、「人性の善且つ高尚なる一切のものは、疑つて悉くキリストの中に存す」と。

「超自然的宗教」の著者曰く、「されどイエスの教は道德をして人力の到達せしめたる、否到達せしめ得る最高點に到達せしめたり」と。又曰く、「キリストの行爲は高潔にして、其唱道する俊秀なる主義と矛盾せず、吾人の判断し得る限りにては稀有の偉觀なり」と。

ダブリユ・イ・エチ・レキ曰く、「世界に提示するに理想的人物を以てする任務は、獨り基督教の爲に保留せられたりしものなり。此の理想的人物は、一千八百年間に涉れる諸變遷を通じて人心を刺激し、之に注ぐに燃ゆるが如き愛を以てせしめたり。又古今、萬國、如何なる性質の人、如何なる状態の人にも感化を及ぼし得ることを願せり。又道德の最高模型たる而已ならず、又之を實行せしむるための最高刺激者なり。又其感化の深刻なる、僅々三年間活動の短記録が人類を更生和融せしめたる功、遙かに哲學

者の凡ての議論又は道學者の凡ての勸告に優れりと言ふも經言に非ざる程なり」と。

以上拔萃の文句は、只多數の中より取れる見本に過ぎず。されどキリストの教へ給へる道德が古今無比のものなるは、實際争ふべからざることなり。加之、キリストの行爲が全然その教説と調和して相反らざりしことも争ふべからざることなり。キリストは、吾人の判断し得る限りにては、聖潔無垢の一生を送り、其品性は歴史にも小説にも類を見ず、古今獨歩、空前絶後なりとす。

(二) 二個の小反對説

然るに、こゝに二個の小反對説あり。第一はキリストの教説は獨創的ならずといふことなり。若し嚴正に言ふ時は、此の言は一應道理あるが如し。是れキリストの教へたるが粗ぼ相同じき教が、キリストよりも以前に、埃及、印度、支那其他の處々に行はれしこと發見せられたればなり。さればとて、此の一事は今の論法に何の影響をも與ふることなかるべし。ナザレに住居せる無學の一猶太人が、孔子、ゾロアストル其他の人々の著作を涉獵して、其教説を編製すと言ふが如きは、想像にも及ばざる所なればなり。況んや、キリストの教説は、是等凡てのものを併せしよりも一層の進歩を示せるをや。

今の要點は他なし、キリスト時代の猶太人の中には、一もキリストの如き品性を生じ得るものなく、否之を僞作し得るものさへなかりしといふことは是れなり。キリストは其同時代一切の人よりも無窮に優秀なりき。故に或批評家は、キリストが猶太のラビ等より其教を學べるものなりと稱し、之を猶太の

ラビ等のそれに比し些少の進歩なるを示さんとすれど、斯る企は全然失敗なり。其理由は、教説若し相類似せば、其効果何故甚だしく異なるや、是れ怪しむべきことなればなり。げにや、凡てのラビを悉く併せたりとも、世界を感化するの功、キリストの千分の一にも及ばざるなり。

第二の反對説はキリストの教説の或部分に關してなり。例せば、キリストは惡に對して無抵抗を主張せり。又眞實的生活を結婚に優るとすること、誇張に過ぎたるが如し(太五〇三十九、十九〇十二)。借此の第二の文句に就ては、余未だ満足すべき説明を見しことあらず。されど、之が表面より見るに、一般に適用すべきものにあらず、然らざれば人類は絶滅するに至るに相違なし。是れ只完全の爲の忠告にて、猶ほ財産の全部を施さすべしとの忠告と一般のものなりとす。

又譬喩の中にも不義のもの尠からずと稱せらる。例せば、婚筵の禮服、葡萄園の労働者、不義なる操會者等の諸譬喩是れなり。されど譬喩なるものは文字通りに悉く之を解し得るものにあらず。且つ學者の之に對する解釋は、それ／＼に異なるを以て、之を根據としたる反對説は、決して妥當と謂ふべからず。されば今は不義なる操會者の譬喩を講究することゝなしたるが、是れ人の最も多く反對するものなるを以てなり。

讀者は記憶せらるゝならん、此の操會者は不正の罪あるものなりしも、其所爲の巧なるに由りて稱讚を受けしものなることを(路十六〇八)。されど、之が爲に此の譬喩は不正を辯護するものなりといふは、

失當の考なり。且つ夫れ之が説明は必ずしも發見し難きにあらず。假りに今日巧妙の強盜を働ける人ありとせよ。而して或人之を評して此の惡漢の伶俐感するに余りありと言へりとせよ。こは不正を承認せしものと見るべきか。然らず、之に二の理由あり。一は其者尙ほ惡漢と稱せらるゝことなり。又、一は其者全体として稱讚せられしに非ず、只その行爲の或特別の部分に抽出稱讚せられしにて、そは即ち強盜の不正に非ず、伶俐なることは是れなり。今不義なる操會者の譬喩も亦是れに同じ。此の操會者は尙ほ不義と稱せらる。又其行爲の一部分だけ抽出稱讚せられたるものにして、そは即ち操會者の不正に非ず、知慧なり。故に之が明白の意義は他なし、智慧は頗る望ましきものにて、世事に於ても、惡事に於ても、稱讚すべきものなり。随つて宗教上の事や、善事に於ては一層希求すべきものなりとなり。

(三)キリストは罪を意識せざりき。

次に一言せんとするは、一の極めて大切なる點に就てなり。他なし、キリストは完全の徳教を垂れ給ひしに拘らず、其品性には寸毫も罪の意識なかりしことは是れなり。キリストは幾多の講話をなし又祈禱をなし給ひしも、其中一言だも自ら惡事を行ひしと思ひ、又は行ふ力ありと思ひし語氣あるはあらず。否キリストは頗る注意して斯る語氣を避けたるにて、偶然の場合にすら尙ほ然り。例せば、キリストは

「我儕もし人の罪を免さば」とは謂はず、「爾曹もし」と謂ひ給へり。是れ前者は、キリストも彼等と同様に、父の赦しを必要とする語氣となればなり(太六〇十四)。又キリストは祈禱をなすにさへ(吾人の知れる限りにては)、之を弟子等と共にし給ひしことあらず。是れ無罪者たるキリストの祈禱は、有罪者たる彼等の祈禱と異にして、兩者互ひに混淆すべからざるを以てなり。之に加ふるに、キリストは他人が己れを義とすることあらば、之を責め、改悔を之に勧め給ひしも、自ら斯る必要あるを認めし語氣曾てなし。

殊に此の事情の著しく感ぜらるゝは、通常善人なるものは最も痛切に己れの過失を意識するを思ふ時にあり。キリストは極度までの善を主張し、何人も認めて完全となす效を垂れ給ひしに拘らず、未だ曾て暫らぐたりとも自ら之を實行せずと感せしことあらず。斯る人物は世界歴史上絶對的に無比なり。若し之を説明せんとすれば、只キリストは善人なりしと共に、完全の人なりしといふ説明あるのみ。是れキリストにして、單の善人たるだけにて完全に非ざる時は、一層痛切に過失を意識すべき筈なるを以てなり。而して若しキリストの完全を認めたらんには、更にそれより以上を認めざるべからず。是れ完全は人類の屬性に非ざるを以て、之には深き理由あるべきを以てなり。

(乙)キリストの主張

次に論ずべきはキリストの主張なり。而してキリストは高等の徳性を具へ給ひしものなれば、其自己

に就て説き給へる所には、吾人極度の信任を置いて可なり。只不幸なるは、キリストの言余り人口に膾炙し、其眞實の意味と趣旨とを味ふの困難なることなり。敢て問ふ、初めて是等の言が發せられし時は、如何様に響き、如何様の意味を有したるべきやと。是れキリストは後にも記する如く、自ら超人者たると共に神なりと主張せしを以ていふ。而してこは又キリストと同時代の人の、味方となく、敵となく、皆キリストを解する意義なりとす。此の主張たる、此上なき奇怪のことながら、而も猶太の豫言者中、一人も之に類せる主張をなせし人なきを思へば、少くとも此の主張は無比のものと謂ふべし。

(一)キリスト自ら超人者と主張す

こは三の重なる論證に顯れたるが、三とはキリスト自ら世界の主宰者、贖罪者、最終審判者と宣言し給へるをいふ。第一に、キリストが世界の主宰者と主張せしといふは、其屢次萬物は我に委せられたりと言ひ、我は天の中、地上の凡ての權威を有すと言ひ給へるを指す。之に加るに、キリストの此の主宰權は、其弟子等の心に對しても同様完全なりしなり。即ち弟子としては、キリストに忠義を盡くすこと、只一つの無くて叶はざることなりき。又キリストは絶對の献身を主張し、キリストの爲には如何ほど親密の親族關係をも一擲する程ならざるべからずといへり(太十一〇廿七、廿八〇十八、路十〇廿二、太十〇卅七)。

第二に、キリストは自ら世界の贖罪者なりと主張せり。即ちキリストは明白に多くの人に代て生命を



予へその贖とならん爲なりと言ひ、我血にして罪を赦さんとて衆の人の爲に流す所のもの也と言ひ給へり(太二十〇廿八、廿六〇廿八、可十〇四十五、十四〇廿四)。

第三に、キリストは自ら世界の最終審判者なりと主張し給へり。キリストが自ら人類以上の者人類と殊別の者と認め給ひしは、只此の法外なる一主張だけにて明了なり。人類は皆其行に應じて審判せらるべきものなるに、キリストは然らず。自ら審判者として天の雲に乗り、數千の天使と共に來るべかりしなり。又キリストの審判は最後のものたり、控訴を許さざるものたり、人の己れに(キリストに)對する行爲を基礎とせしものたるべかりしなり。此に注意すべきは、此の廣大なる主張は只一文一句に存するに非ず、其觀福音書の凡てに存すと言ふことは是れなり(太七〇廿二、十〇卅二、十三〇四十一、十六〇三十一、十六、廿七、十九〇廿八、廿四〇三十、廿五〇卅一、四十六、二十六〇六十四。其ほか他福音書の同記事参照)。キリストは其傳道中終始(其山上垂訓よりカヤバの前の審問に至るまで)反覆して、己れは世界の最終審判者なりと斷言せり。夫れ如何程傲慢の人にて、單の人間ならば斯る主張をなすべしとは思はれず。今日斯くの如き主張をなす人は、果して是れあるべきや。而して若し主張せしとすれば、人之を何と思ふべきや。

以上列記の諸文を以て見れば、キリストは超人的品性を具へたりしこと明了なり。但し是れにはアリの解釋を下すべからざるに非ず。即ちキリストは遙かに人類に優り、又天使にも優りたるも、嚴正

に言ふ時は、神には非ざりしと言ふものは是れなり。但し此説は現今殆んど贊成者なく、今日キリストが超人者なりしを認むる人々は、又皆其神なるを認む。而してキリストも亦自ら神なりと主張せしは次項を見て知るべし。

(二) キリスト自ら神と主張す

是れも亦前項と等しく三の重なる論證に顯れたるが、三とはキリスト自ら神と同等、一体にして、且つ神と共に前在したりと言へるをいふ。

第一にキリストは自ら神と同等なりと主張せり。即ち其明白に斷言せる所に據れば、父なる神に歸すると同様の榮譽をキリストにも歸すべかりしなり。又人類は神を信ずると等しく、キリストを信ずべかりしなり。又キリストと父とは共に人の靈魂に住むべかりしなり。又キリストは父と等しく神の聖靈を送る力を有したりしなり(約五〇廿三、十四〇一、廿三、十六〇七。又五〇十八を見よ)。又キリストは命令し給はく、人は父の名に入るゝと等しく、又我が名に入れてバプテスマを受くべきものなりと。又キリストは約束し給はく、弟子の集まれる時と場處との如何を問はず、自ら必ず世の未まで常に爾曹と偕に在なりと。斯くしてキリストは自ら其委任を主張し給へり(太十八〇二十、廿八〇十九、二十)。第二にキリストは自ら神と一体と主張し給へり。勿論キリストは自ら第二の神とは斷言し給はざりしも、我と父とは一なりと斷言し給へり。又我は父にあり、父は我にありとか、我を見るものは父を見る

なりとか、我を見し者は父を見しなりとか言ひ給へり(約十〇三十、十七〇廿一、十二〇四十五、十四〇九、十)。勿論此の最終諸文は、強ひて文字的に之を解するを得ず。是れキリストは實際、父なる神なりと主張する人は、殆んど是れなければなり。されど人間の父子若し、甚だしく相似たりとせば、父を見し者は子を見し者といふも差支なし。之と等しく、キリスト若し眞の神にて(即ち子なる神にて)父なる神の眞の眞像なりとせば、同じ言を用ふるも差支なし。少くとも其意義は解し得らるべし。されどキリストにして若し單の善人たるに止まらば其意義は解するを得ず。古今獨歩の善人にして、汝若し我を見ば神を見たるなりと謂ふが如き人、世に果して是れあるべきや。

第三にキリストは自ら神と共に前在せりと主張し給へり。即ちキリストは斷言して、我は天より降りとか、我は父より出で、世に來れりとか、創世より先きに神と其榮光を共にせりとか言ひ給へり(約三〇十三、六〇卅八、十六〇廿八、十七〇五)。又他の處に我はアブラハムの有ざりし先より在者なりといふ句あり(約八〇五十八、出三〇十四)。即ちキリストはアブラハム以前のを前在主張せしに止まらず、又此の語氣には時代に超絶せし無始的存在の意義あり。是れ此言はアブラハムの有ざりし先より在りし者といふにあらで、在者といふにあるを以てなり。在者とは神自ら舊約の中に己れを呼ぶに用ひ給へる神聖の名なれば、今キリストの之を用ひ給へるは、即ち自ら神なりといふの意なりしを知るべし。以上列記の諸文を以て見れば、キリストは自ら神と主張し給へること明了なり。然るに、キリストは曾

て或卒の己れを善と呼ぶに反對し、普なる言は只神にのみ應用すべきものなりと言ひ給ひしを記せる處あり(路十八〇十九)。こは如何なる理由かといふに、キリストは必ずしも自ら眞實に善なるを否認し給へるにあらじ。只キリストの弟子にもあらず、キリストの神たる主張を承認せざる輩が、明りにキリストを善と呼ぶは、矛盾なるを指摘し給へるに過ぎじ。而してキリストが斯く單の俗界の教師と認められし場合に、善と呼ぶるゝを拒み給へるは面白きことなり。

其他尙ほ種々の文句を擧げて反對する人あれど、是等は勿論キリストの人性のみを説きしものなれば、第二十三章に至り調査することとすべし。今は之をこゝに講究する必要なし、是れキリストにして若し神たると共に人にましまさば、或時は神として語り、或時は人として語り給ふこと、敢て難解に非ざればなり。即ち基督教の基督觀よりいへば、斯くの如きは全く當然のことなり。只之を他の見解よりするが故に、其品性に矛盾の分子ありとも思はるゝのみ。何れにしても、こはキリストが自ら反覆して、超人者たり神たりと主張し給へる事實に影響あらざるなり。

(三)當時の人々は此の主張を如何に解せしや。

以下當時の人々が如何に此の主張を解したりしかを講究せん。而して初めに先づキリストの味方に就て論ずべし。キリストは其復活後、凡ての弟子と初代の信徒より、超人者たると共に又神と信せられしこと、無数の證據あり。人若し此の味を眞に解せんとすれば、彼等が多神教徒に非ざりしを記憶せざる

へからず。彼等は無頓着に多くの神を信じ、羅馬皇帝をも其他の何人をも神とし崇むるを辭せざる輩にあらず。否却て嚴正の一神教徒たりしなり。即ち彼等は確く神の唯一なるを信せしが、之と共に又キリストの神なることを確信せり。こは新約全体を通じて明了のことなりとす。

たとへば、其觀福音書の記者等は、キリストの奇蹟的降誕と、復活と昇天と、其他種々の奇蹟及び其神力の休徵を記載せり。且つ彼等は、前にも已に説きし如く、キリストの此の奇蹟を行へるは自己の權威によりてしたることを説けり。是れキリストの神性を含示するものと謂ふべし。殊にキリストが奇蹟を行ふ力を他に興ふるを得し事實と考へ合する時は然り(太十〇八、路九〇一)。

又第四福音書に就て見るに、其劈頭に明白の言を以てキリストの神性を説き、後に肉体となりし道は神なりきと記せり。又該福音書は、最後の一章を記するに先だち、聖トマス<sup>トマス</sup>の發したる之と同様の信仰を擧げて、其適切の結尾となせり。トマスはキリストを呼んで曰く、我主よ我神よと。此の尊稱はキリストの充分に承認し給へる所なり(約一〇一、廿〇廿八)。斯くて著者は此の記事に引續き、其福音書を著せし趣旨を記して、イエスの神の子キリストなるを人に確信せしめん爲なりといへり。果して然らば、神の子なる名稱は、著者を以て見れば、キリストは充分完全の意義に於て眞の神なりとなり、子なる神なりとなり(我主よ、我神よ)。隨つて又此語を頻繁に使用する他の新約諸記者に取りても同様の意義なりしと思はる。

尙ほこゝに注意の價值ある一事は、舊約にエホバのことを指せる文句にして、福音書にキリストに適用せられしもの尠からざることなり。例せば、イザヤは或時萬軍のエホバの榮光を見しことを記せり。而して聖ヨハネは此の言の幾分を採萃し、イザヤはキリストの榮光を見し時、之を語れるなりと謂へり(賽六〇一—十、約十二〇四十一)。之と等しく、其觀福音書にもわれらの神エホバに關する豫言をキリストの使節のこととなせり(賽四十〇三、太三〇三、可一〇三、路三〇四)。

次に使徒行傳に就て言はんに、時として聖ペテロのキリストに關する言を引きて反對論を唱ふる人あり。即ち聖ペテロ曰く、「ナザレンのイエスは……<sup>たへ</sup>妙なる能力<sup>ちから</sup>をもて……爾曹に證し給へる所の人なり」と。論者曰く、此の一句には聖ペテロがキリストを人間以上と認めざりし意ありと(徒二〇廿二)。されど聖ペテロは、此時其自ら言へる如く、其聽衆の眞實と知れるたけのことを説きしものなれば(爾曹の知るごとく)、他に説き方のあるべきや。此時の聽衆はキリストの神なるを知らざりしなり。彼等の知れることは、多くの奇蹟を見たるが故に、之に由りて神の證し給へる所の人なり。之に加ふるに、使徒行傳の他の處には、有力にキリストの神性を證據せる處少からず。一は直接にして、聖パウロが神の教會のことを主の己が血をもて買ひ給ひし教會といへるが如き是れなり(徒二十〇廿八)。又一つは間接にして、使徒たちの奇蹟を行へることを記し、父なる神の名に於てせず、キリストの名に於て之を行へりと記せること是れなり(例せば、徒三〇六、四〇十)。

次は黙示録に就てなり。借此の黙示録の提示する證據は大切なり。是れ福音書と使徒行傳との眞偽を論争する多くの批評家も黙示録が聖ヨハネの著述たるを認むるを以てなり。果して然らば、キリストの直弟中、少くとも一人は其神性を確信せしこと、之に由りて明かなり。是れ聖ヨハネは、キリストを以て天地の普ねく禮拜すべき對象となす而已ならず、又之を始なり終なりと説くを以てなり。此の尊稱たる、舊約に於ては神の自ら用ひ給へるものにて、勿論他の何人にも該當せざるものなり(黙一〇十七、十八、二〇八、五〇十一—十四、廿二〇十二、十三、賽四十四〇六)。敢て問ふ、キリスト若し自ら己れを神と主張せず、又此の主張を證明するため奇蹟を行はず、死より甦ることなからんか、キリストの親友も之を永遠の神と信する筈なきに非ずや。一猶太人たる聖ヨハネが(他國人よりも猶太人は之を信すること困難なり)多年起居を共にして、其死刑に處せらるるを目撃せし仲間の人間を(且つ其刑し方は、猶太人の認めて神に誚はれしものとせし方式なりき)主エホバと確信せしといふは、非常に有力の證據を有せし爲ならざるべからず(申廿一〇廿三、加三〇十三)。

之と同様に大切なる證據は、聖パウロの書翰中に顯はれたり。蓋し聖パウロは親しくキリストを知れるに非ざるべきも、之を知れる許多の人と親しかりしに相違なき故なり。且つ夫れパウロは逸早く紀元三十五年よりも以前に改悔せしのみならず、それより以前にはエルサレムの教會を迫害し、それより以後には使徒たちの幾人かを訪問せし事實あり。随つて彼は最初より基督教々理に熟通したるに相違

なし。然り、聖パウロは、其自ら記する所に據るに、其使徒たちを訪問したる際、自ら説ける福音を彼等に告げ、彼等の説けるものと同一なるや否やを調査せりといふ(加二〇二、九)。且つ聖パウロは、其書翰の始終を通じてキリストの超人的品性を證言し、キリストの清淨無垢なりしこと、世界の主宰者、贖罪者、最終審判者なりしこと、其創造者なりしこと、其他種々のことを宣言せり(哥後五〇十六、廿一、羅十四〇九、哥前十五〇三、哥後五〇十、西一〇十六)。

又聖パウロはキリストの神性をも證言せり。是れ聖パウロが神その子を此世に遣はし給へりといひ、以てキリストの前在を示せること、一回に止まらざるを以ていふなり。又聖パウロが、「キリストは富る者なりしが爾曹の爲に貧き者となれり」といふにも同じ意味あり。貧き者となれりとは、キリストが神としてあらゆる富を有したりしに、其謙抑に由りて人となりしをいふ(羅八〇三、加四〇四、哥後八〇九)。其他尙は種々の言を以て、キリストの神性を説ける箇處多かり。例せばキリストは萬物の上にありて世々讚美べき神なりの如き、又或處には我儕は皆神の臺前に立つべき者なりと言ひながら、他の處にはキリストの臺前に立つべきものなりといへるが如き、彼は元神の體にて(即ち神の状態に居りしとなり)其成肉の前には神と同等なりしも人の貌を取れりの如き、神の充足る徳は悉く形体をなして彼に住めりの如き、彼は大なる神我儕の救主にて、我儕の爲に己の身を捨給へりの如き、詩篇記者が「神よ、爾の位は世々に及び」といへるはキリストに就ての豫言なりとせるが如き是れなり(羅九〇五、十四

○十、哥後五〇十、腓二〇六、西二〇九、多二〇十三、來一〇八。

右の中、最後の希伯來書より取れる一文は、恐らく聖パウロの筆にはあらず。されどそれが爲この一文は一層その價值を増す。是れ希伯來書は、内部の證據により紀元七十年のエルサレム滅亡前に成れりと認むること、通常なるを以てなり。果して然らば、キリストの神性に關して、尙ほ一つ古人の證言を加へしものと謂ふべし。加之、此の一文は價值ある文なり。其理由は、此の記者の語氣に少しも新説を主張するらしき點なく、却て最初より基督教徒の信せし如き調子なるを以てなり（來二〇一四、四〇十四）。

之が反對側の最も大切なる一文は、聖パウロの所謂「神すなはち父、ひとりの主即ちイエス・キリストといふ語是れなり。」こはニケヤ信經にも引用せられたるものにて、難句は難句なれど、キリストは神にあらずとの意を含むものとは解するを得ず。キリスト若し神にあらずとの意ならんには、父は主にあらずとの意をも含むといふべきか。こは聖パウロの本意なりと強辯する人は恐らく是れあらず。以上列記の諸文は、大抵皆聖パウロの眞作と認定せられし書中にあるものなるが、之に就て注意すべき大切のことは、各記事皆偶然的なることなり。即ち聖パウロは故らにキリストの超人性と神性を證明せんとして之を記せしにあらず、こは最早爭論なきこととして記せるなり。聖パウロは自ら明かに之を信じ其讀者も亦之を信せしことを認めたり。且つ夫れ聖パウロの讀者は皆一私人にあらず、寧ろ

大なる基督教團體なり。而して此の中には、コリント及び其他に於て、自ら導きし信者もあれば、其本訪問の地たる羅馬に於て他の使徒たちの導びきし信者もあり、又其議論の相手たるガラテヤの反對の信者もありき。斯る理由なるを以て、是等の教理が聖パウロ特有のものにあらず、却て初代より一切の基督教徒の通有なりしは明了なり。若し此の一事に加ふるに更に前掲の證據を以てする時は、キリストの味方等は其主張を如何に解せしものが、殆んど疑ふべき余地なし。彼等はキリストの復活前には如何様に其主張を解せしにもせよ、復活は彼等をして其眞實なるを確信せしむるに至り、而して彼等は此の信仰に於て躊躇することなかりき。

されど之に次ぎてキリストの敵は如何なりしかを論せざるべからず、之に就ても其證據は前同様に確かなり。約翰傳の記事に據るに、キリストは其一生中數回己れの超人性と神性を斷言し給ひしに、猶太人は其結果、キリストを殺さんとせり。而して之を殺さんとする理由を極めて明白に公言せることも尠からず。「石にて撃んとするは善事の爲に非ず爾た毀潰ことをいひ、且なんち人なるに己を神となすに因てなり」は其一例なり（約十〇三十三、又、五〇十八、八〇五十九、十一〇八、利廿四〇十六を見よ）。而して猶太人の斯くキリストを石にて撃たんとせしは、全く其律法に従へるものなり。是れ律法は明かに瀆神者を石にて撃ち殺すべしと命ずるを以てなり。

此に注意すべきは、右の諸文中一ヶ處だに、キリスト自ら主張せりと認定せらるゝものを否認し給へる

ことなく、又誤解なりと辨解し給ひしこともなきことなり。若し辨解をなし給へる場合ありとすれば、只一ヶ所あり。而して其際には舊約書の「我いふ爾曹は神なり」といふ文句に訴へ、且つ我こそ却て此語に一層適當せるものなれと言ひ給へり。其理由は、我は父より此世に遣され、父の事をなすが爲なりとなり。斯くてキリストは己れと父と一体なることを復説し給ひしが是れを正しく猶太人の反對せし點なりける。

之に加ふるに、キリストは其生涯を通じて自ら神と主張し給ひしのみならず、之がため其死を來せし時も尙ほ毅然之を主張し給へり。抑も猶太人がキリストを死罪に相當すと判決せしは、喪瀆の爲にして、他の何事の爲にもあらず。而してこは獨り一福音書の教に止まらずして、四福音書舉つて説く所なり。(太二十六〇六十五、可十四〇六十四、路二十二〇七十一、約十九〇七)。今日現存のキリストの傳記は、何れも皆之を以てキリストに對する眞の罪名となす。但し羅馬の方伯の前に審問せられし時は例外にして、其時は此の罪名に加ふるに更にカイザルに對する不忠といふ罪名を受けたり。以上記述せし所よりして下し得る結論は唯一あるのみ。他なし、キリストは實際超人者なり神なりと主張せしといふことなり。キリストは其在世中故意に頻繁に此主張をなせしといふことなり。猶太人の敵意之が爲に勃興し、屢次キリストを殺さんとするに至れりといふことなり。キリストは一たびも斯く主張せしことなしと言ひ給ひしことなく、却て死に至るまで毅然之を主張し給ひしといふことなり。而して其結果、遂に死に處せられ給ひしといふことなり。

(丙) 大なる代説

次に論すべきは大なる代説なるが、こはキリストの教説と主張とを併せ考ふる時は、吾人の取らざるべからざるものなりとす。倍此の代説オカルターチテューの大切なることを指摘するに先だち、一言せざるべからざるは反對論者の常套手段として用ふる困難を逃避する方法なり。曰く、キリストの教説は其觀福音書に存し、其主張は第四福音書に存す。此を以て、此の第四福音書の精確を否定さへすれば、困難は即ち解決せらるゝなりと。されど此の反對論の爲には不幸といふべきか、我は神なりとの主張は主として第四福音書中にあるも、超人者なりとの主張は他の三福音書に頗る著るし。されば、前段にこれを説明する文句を撰ぶにも、故意に只之を共觀福音書より取りたり。且つ夫れ、キリストにして若し單の人間ならんには、此の兩主張は共に其徳性を傷つくること甚だしきものなり。是れ我は世界の絶對的主宰者なりとは甚だしき高慢の主張なり、更に我は其贖罪者なりとは是れよりも甚だしく、唯一最終の審判者なりとは最も甚だしきものなり。斯る主張は單の善人のなす筈なく、否悪人すら之をなすものは稀なるべきを以てなり。

果して然らば、此の反對論は之を顧みずして可なり。而してキリストの完全なる徳教と、其超人性及び神性に關する不斷的主張とは兩々相伴へりとは、是れ吾人必然の結論なり。此の點はキリストの自ら

承知し給へる所なるが故に、之に關する記事は眞實なるか、然らざれば故意の偽言たることを言ふを待たず。随つてキリストは神なるか、然らざれば故意の欺騙者に相違なし。換言すれば、福音書に顯はれしキリストは(而して歴史上には是れより以外のキリストはあらず)單の善人にあらず。其主張する如く神なるか、然らざれば斯る主張をなすを以ての故に惡人なるべし。此の兩者は吾人が其一を取らざるべからざるものにて、即ち所謂大なる代説なりとす。

之に加ふるに、此の代説は世界の歴史に取りても絶對的に無比のものなり。抑も他の諸宗教の創立者は、偉大の道徳を具へて、而も誤謬の教理を傳へしものか知り知るべからず。されど彼等の誠實は通常は之を疑ふべきにあらず。即ち彼等は其口にせし所を心に信せしものなり。勿論偽宗教家なるものありしには相違なきも、其場合には彼等の徳性は正道を外れたりき。獨りキリストにありては然らず。其徳性と教説とは、數百年に涉りて世界の人々を渴仰せしめたり。而も其主張にして眞實ならずとせよ、彼は絶大の自負家、偽言家、演神家たらざるを得ず。こは前條講究せる諸の事實より出づる唯一の論理的斷案にして、古來此の斷案を避けんとするの舉は悉く失敗に歸せり。

偕此の斷案は基督教の眞理に關する目下の研究に如何なる關係ありやといふに、是れに取りて有利の論證たること明了なり。是れ基督教創立者の徳教は、古今未曾有の完全なるものたるを顯すのみならず、之と共に、清淨無垢にして世界に絶對的無比のものなるを以てなり。然るに、此の兩點には更に超

人性と神性との主張ありて伴へり。若し此の兩主張にして不當ならんか、此の主張者は、極端的なる惡人たるべし。之を要するに基督教若し眞ならずば、其創立者は人類中の最善人たるべき筈なし、是れ彼は欺騙者なりと共に又演神者なるべし。随つて彼は人類中の最惡人なるべし。こは何人も免かるゝを得ざる相關論法なりとす。

## 第二十一章 基督教の歴史も亦基督教の眞理を保證する事

### (甲) 其初代の勝利

- (一) 其非常なる困難
- (二) 其驚くべき成功
- (三) 成功の所謂自然的原因。此の原因は皆基督教の眞理を含む。
- (四) 回々教との對照

### (乙) 其後の歴史

- (一) 其既往に於ける活氣は眞に驚くべし。
- (二) 其現在に於ける効果は眞に有益なり。
- (三) 其將來に於ける見込は眞に有望なり。偏理論より來る反對。されど、これは必ずしも事新らしき困難にあらず。否此の反對論は却て基督教の實力を示すもにて、且つ單に破壊的なるが故に、基督教の代りたるを得ず。

### (丙) 結論

基督教の歴史は其創立者の已に豫知せるものと思はるゝが、此の歴史は基督教に取りて有利の一論證なり。

次に講究すべき論證は、基督教の歴史に根據したるそれなり。此に記憶せざるべからざるは、基督教は有史時代に入りて起源し、傳播し、而して遂に文明諸國に勝ちしものなることは是れなり。而して此の勝利の事實は、争ふべからざること、又無視すべからざることなるを以て、之を説明する必要あり。借問す、今より凡そ一千九百年以前、重罪人として磔殺せられし無名の一猶太賤民が、如何なれば、今日世界の最も開化せる諸國民を始め、三億以上の人類に崇拜せらるゝに至れりや。これは單の歴史的問題として一應解釋の必要あり。是れ歴史に顯れし結果も、他の場合のものと同しく、適當の原因なかるべからざるを以てなり。且つ此の結果たる、人類の歴史に顯れし結果中の最も驚くべきものなりといふも、恐らく過言にあらず。果して然らば、こは吾人の論明せざるべからざる問題にして、初めに先づ基督教初代の勝利を講究し、次で其後の歴史に及ばん。

### (甲) 其初代の勝利

基督教の征服すべかりし困難の如何に大なりしか、又之を征服して得たる成功の如何に驚くべきものなりしか、筆舌の能く盡くし得べからざる程なりき。

### (一) 其非常なる困難



第一に講究せざるべからざるは、基督教の如き宗教を創立するは非常に困難なることなり。今日の人は余り基督教に慣熟したるを以て、充分此の困難を想像する能はざれど、今若し其類例を擧げば、稍之を明かにするを得べし。昔今日倫敦及びエデンバラの如き歐羅巴の都會に幾多の宣教師出現し、而して波斯の或地方に重罪人として死刑に處せられし無名の一賤民あり、死より甦りしが、こは天地の神にましませりと説くと假定せよ。彼等は之に由りて、一人たりとも改悔者を起すことを得べきや、實に一大疑問なり。而も初めて基督教を羅馬やアテンスに傳へたる事業は、頗る之に類したるものにて、只一層困難なりしのみ。げにや、十字架に釘けられし教主の教理を其要點となせる宗教を創立せんとする困難は、如何なる詞も之を形容するに足らず。されど記憶せよ、初代の基督教徒等は曾て此の教理を隠蔽せざりしことを。即ち聖パウロは、其猶太人には礙く者異邦人には愚なる者たるを承知しながら、尙ほ敢然として之を宣説せり(哥前一〇廿三)。而もこは凡て非常に開化せし國民間に於て行はれしことにて、且其時代は文學的時代なりき、否道理一偏の時代といふも差支なき程なりき。即ち此の時代の人は、最早在來の異教を信するに堪へず、漸次之を放棄しつゝありたるなり。此時に當り、是等異教の何れよりも一層不道理(外觀上)にして、十字架に釘けられし者を拜するが如き、新宗教を創立するは、其の困難知るべきに非ずや。

之に加ふるに基督教は尙ほ其他の幾多の困難と闘はざるべからざりしなり。蓋し基督教は余りに包容的なるを以て、非猶太教的なりき。是れ基督教は猶太人に持有なる一切の宗教的權利と特權とを蔑如し、從來輕視したる異邦人を今後彼等の同等者と宣言したればなり。又基督教は其主張絶對的なりしを以て、非異教的なりき。是れ基督教は、一切他の宗教とは兩立せざる宗教にして、其成功は一切の異教の神壇の破壊に當り、又一切の異教の神の排斥に當るを以てなり。其他、基督教は非羅馬的なりしといふも差支なかるべし。是れ基督教創立者に對する罪名の一は、カイザルに不忠なりといふことにて、又テサロニケの傳道者の如きも、之に類似せる罪名を負ひたればなり。

最後に基督教は道德的見地より大なる困難と闘はざるを得ざりき。是れ基督教は克己犧牲の宗教にて斯くの如き宗教は、自然人類に歓迎せらるべきに非ざるを以てなり。之に加ふるに、基督教の傳道者等は特に此の道德的方面を標榜することを常とせり。即ち罪を捨つることは基督教の道德的要件にて、是れ恰かもキリストの罪の贖を信するは、其心的要件なりしと等し。此の兩者は何れも困難にして、殆んど不可勝の觀なきにあらず。

(二) 其驚くべき成功

而も前陳の如き種々の困難ありしに拘らず、基督教は全勝を得たり。即ち此の宗教は非常の速力を以て傳播せり。而してこは、助もすれば誇張と思はれ易き基督教學者より傳知し得ることたるのみならず、又公平なるスエトニアス、タシタス、小ブリニー等よりして傳知し得ることたるなり。スエトニア

スは曰く、グラウデラの代に(紀元四十一年—五十四年)在羅馬の猶太人等、クレスタスなるもの(即ち基督教徒たる猶太人)に煽動せられしが、其數非常に多くして、皇帝は之を追放するを宜しとせし程なりきと。タシタスは曰く、大火災の時(紀元六十四年)夥しき基督教徒羅馬に於て發見せられたりと。プリニは小亞細亞に於ける羅馬の方伯の一人なるが、トラジヤン皇帝に訴へて曰く、基督教徒は其數非常に多かりし爲め、多くの寺院は久しく荒廢に歸せりと。但しプリニが此書を草せし頃には(即ち紀元百〇五年)、諸寺院は再び參詣者を見たりといふ。又プリニは基督教徒(プリニは貧富貴賤各階級を網羅すといへり)の生活の模範的なること、其宗教に對する誠實の堅固なること、キリストを神とし禮拜することを説けり。而して基督教は羅馬又は小亞細亞に起源せしにあらざるを以て、基督教徒は自ら他處にも其數多かりしこと、察せらる。

又基督教徒は只貧者及び無教育者の間にのみ發見せられたりしには非ず。是れ前節に引用せるプリニの證言に由りて明なるのみならず、聖パウロの正銘の書翰たる羅馬書の如きは(第十七章に指摘せし如く)、其讀者を教育あるものと看做し、能く難解の論理をたざるに堪ゆとせし著述なるを見て知らるなり。

反對論者は、基督教徒の中能ある者多からず、貴き者多からずといふ句(哥前一〇廿六)を擧げて自説の證據となすことあるも、是れとても實は余の見解を保證するものなり。即ち此句は、有能高貴の基督教徒は多からざりしも、多少は是れありし意を含むものなればなり。且つ夫れ、他の處を見れば、現に若干の知名の人士の名記されたり。例せば、コリントの邑の庫司エラスト、アレオ山の裁判人デラヌシオ高位のテヨビロ(貴きといふ形容詞にて之を知るべし)の如きは是れなり。是等の人々は確證を握らずして基督教を信せしとは思はれず(羅十六〇廿三、徒十七〇卅四、一〇一、廿三〇廿六、廿四〇三)。

猶斯る驚くべき進歩の原因は何ぞや。之に答ふるには、其原因にあらざりしものより説く方容易なるべし。曰く、腕力や政府の權威は、此の進歩の原因にあらず。其宣教師は手に劍を握りて説教したることなく、又政權の擁護を受けしことあらず。彼等のなせること、彼等のなすを得たることは、只人の理性と良心とに訴ふる外なかりしにて、且つ此の舉は成功せり。此の成功は、使徒行傳の如き基督教徒自らの記せしものに據るに、其重なる理由二あり。第一は、キリストの復活の如き基督教の事實は、確實不可争の事として、怯めず憶せず之を説きしにあり。第二は時々奇蹟によりて之を證明するを得しことなり。吾人は、少くとも此の二原因中の一方を認めずしては、基督教進歩の事蹟、愈々解し難きを覺ふ。是れ基督教の傳播は、單の哲學や、倫理學や、科學の理論などの傳播と相同じからざればなり。基督教傳播の原因は、全く其主張せる事實にあり。而して此の事實たる、決して舊きことにあらず又決して遠き地に起りしとに非ず、何れも近き頃の事實にて、且つ現に其場處にて起れる事實なり、又全國民の批評を受けつゝありし事實なり。斯くの如きは、是れ歴史上無比のことたるは言ふを待たざるな

然るに論者はいふ、基督教は最初斯くの如き長足の進歩をなせしに拘らず、其文明世界に全勝を制する迄には、殆んど三百年の日月を費せりと。然り、それに相違なし。而も其全勝の價値は之がために減ずるものにあらず。否、此の期間中教會が頻々劇烈なる迫害に遇へるを思へば、却て増すのみ。即ち教會が此の劇烈なる長期の奮闘に堪え、遂に全勝を得たりといふは、其固有の力を示すと謂はざるべからず。斯くの如きは、歴史上に其類例を求むるも、蓋し徒勞ならん。基督教以外には、一として斯くの如き執拗の攻撃に堪えしものなく、一として斯くの如き完全且つ怪しき程の勝利を得しものなし。文明世界の皇帝が、重罪人として磔殺せられしものを禮拜するに至れるが如きは、全く無類のことなり。之を要するに、基督教の進歩は、其起源の特絶なるが如く特絶にして、充分此の理由を説明せんとすれば、其眞理なるが爲といふの外は非ざるなり。

(三) 成功の所謂自然的原因。

次に一瞥すべきは、基督教の驚くべき傳播の理由として唱道せらるゝ自然的原因なり。ギボンが羅馬帝國衰亡史(第十五章)の中に提示せるものは、其數五つあり。而してギボンは、此の五原因を合併する時は、基督教傳播の理由を知り得べしとするもの、如し。されど第一に問はざるべからざるは、此の五が合併するに至れる理由如何といふことなり。此の五原因は其性質互に甚だしく不同なり。而して

假りに是等はそれに應じたる結果を來せしものとすも、此の諸原因が同時に相合して基督教を益したる事實は、眞に驚くべき符合にして、偶然とは看做し難し。且つ仔細に之を調査するに、何れも皆基督教の眞理を含むに非ざるはなし。

五の原因とは、第一は初代基督教徒の猛烈なる熱心なり。こは勿論基督教傳播の大切なる要素たりしに相違なし。されど此の猛烈なる熱心を彼等に授けたりしものは何ぞや。彼等をして斯くまで其新宗教に熱衷せしめ、爲めに親族關係の破壊を顧みず、之を傳ふるに當りて、苦難の一生と殉教者の死とを辭せざらしめしものは何ぞや。此の問題に對しては、其答只一あり。他なし、彼等は絶對的に其眞理を確信せし爲なりしと言ふこと是れなり。此の眞理には彼等の認めて不可抗となせる證據の保證あり。隨つて彼等は此の眞理の爲め何ものも賭することをも辭せざりき。果して然らば、彼等の熱心は即ち彼等の確信の證據に外ならずして、彼等の確信は又彼等の確信せることの眞理たる證據なり。而してこは單の證據に非ずして、貴重なる證據なり。是れ彼等は、之が眞偽を判知するため、今日の人よりも遙かに良好の便宜を有したりしを以てなり。

第二は、來世の教を説き、之に賞罰ありとなせしことなり。是れも亦基督教の成功に大關係ありしには相違なかるべし。蓋し靈魂不死の慾望は人類固有のものなるが如く、而も異教哲學者の漠然たる想像は、此の慾望を満足せしむるに足らざりき。人類の復活は或は眞實ならん、而も彼等は是れより以上の

ことを言ふ能はざりしなり。然るに、基督教は獨り、キリスト復活の事實に基き、こは眞實なりといへり。此に於てか、人類は初めて其必要とせし保證を得たり。而も基督教若しキリストの復活に就て多少の疑惑を抱けりとせんか、此點に於て斯く完全に人を満足せしむることは有るべからずと思はる。第三は初代基督教徒等の行へりと稱せらるゝ奇蹟なり。ギボンの此點に關する論法は、其意稍解し難し。夫れ是等の奇蹟にして實際行はれしものとせんか、勿論新宗教を補益せること決して少からざるべし。されど其場合には、奇蹟は成功の自然的原因に非ず、寧ろ超自然的原因なるぞかし。之に反して是等の奇蹟は虚偽のものなりとせんか、初代の基督教徒が自ら有せざる奇蹟力を有せりと詐稱し、其同時代のもの又此の眞相を承知しながら、尙ほ且つ之に由りて其宗教を補益せること解し難しと謂ふべし。

第四は初代基督教徒の唱道し實行したる純潔の道徳なり。こは勿論基督教を補益すること尠からざりしならん。されどこゝにても復た質問せざるべからざることあり、即ち此の當時の如き不徳不正の世にありて、獨り基督教徒をして純潔の生涯を送るを得せしめしものは何ぞやと。基督教徒は自ら之を其創立者の模範と能力とに歸したるが、實際他に之が説明の方法は非ざるなり。基督教の道徳は源なき流れにはあらず、而も他には之が源と認むべきものなし。單の人間たる教師が能く斯くの如く人間以上の感化を數千の信者に與ふるを得るか。況んや其多數は一面識もなきものなるをや。

第五は初代教會の一致及び訓練是れなり。こは多少の齟齬を重ねし後の基督教には益を與へしなるべし。されど最初にありては、多く用をなさざりしに相違なし。之に加ふるに何故斯く其國を異にし、階級を異にせる基督教徒が、此の一事に於ては能く互ひに一致したりしや。是れ其無二の大切なものたるを確信せし爲ならずや。之を要するに、此の所謂自然的原因は、其嚴正の意義よりいへば、寧ろ第一原因なり。而して此の五原因は何れも基督教の眞理を含みたるが、此の眞理こそ基督教成功の眞原因ならぬ。

基督教傳播の説明としては、之に優れる一の説あり。是れとて尙ほ不精確を免かれざれど、今日之を採用する人多し。そは基督教が好都合の時機に起れりと謂ふこと是れなり。而して此説をなす人は言ふ猶本人は當時の滿天下に散在したれば、猶本人の創立したる宗教の傳播には恰かも好都合の時代なりき。又當時の希臘人は神の道即ちロゴスに關して思索に耽りたれば、學者社會は三位一體説及び神子成肉説につき、何等の困難をも構ふることなかりしなり。更に當時の庶民に至りては、皆希臘、羅馬の舊神話に嫌厭を感じ居たりしなり。而して是等は人性を満足せしむる能はざりしかば、次第に衰廢し、人は皆之に優れる何物かを渴望しつゝありたるなり。即ち彼等は人の皆要求する如く宗教を要求せり。而も異教の背理、不道徳の點を有せざる宗教を要求せり。此時に當りて基督教は出現せり、而して基督教は多くの人々に由りて恰かも此の需要に應ずるものなるを發見せられしかば、自然に成功せり

今之に對して答辯せんに、基督教は羅馬やアテナスにて開創せられし哲學に非ざるを記憶せざるべからず。若し其場合には需要ありて供給起れるものかも知るべからず。されど基督教は元來猶太の小宗派として起れるものにて、其教理の根據は其設立者の生活其者に外ならず。且つ夫れ、基督教は激烈の迫害に遇へるを以て見るに、決して當時の要求に應せしものとはいふべからず。況んや磔死者を禮拜すといふは、是れ種々の大困難を伴ふことなるをや。

されど、今は議論の都合上、是れは然らざりしと假定し、即ち世界の事態は基督教を受入るゝに適當なりしかば、長足の進歩を見たるなりとし、借問ふべきことあり、果して然らば、基督教は神より出でしものと言ふべからざるかと。否斷じてさることなし。是れ基督教と世界の事態との符合は、余り密接にして之を偶然に歸すべからざる程なればなり。此の符合は、是れ意匠を顯はす。而して此意匠は宗教の眞實なる以上必ずあるべき筈の意匠なり。蓋し神の此の世界を統御し給ふを信する者は、又適當の時機に眞の宗教の與へらるべきを信せざるはなし。故に基督教と時機と相符合せるは、歴史を支配する神と基督教を與へし神と同一の神たるを證す。果して然らば、一步を譲り論者の提出せる説明を承認すとも、此の説明は依然基督教の眞理なる間接の證なりとす。

(四)回々教との對照

右の斷案の一層有力なるを覺ゆるは、基督教の傳播を回々教のそれと相對照したる時にあり。而して之を回々教と對照するは、基督教の傳播と比較し得る宗教の傳播は、歴史の示す所此の一例のみなるを以てなり。而も此の二宗教は、其進歩の方式より見るも、將た其眞實の證據と自稱するものを以て見るも、其相違甚だ著るし。

第一は進歩の法式に關してなり。マホメトは十三年の久しき、唯、人の理性のみに訴へしが、是れより得たる信者は驚くべき程少數なりき。斯くて、彼は此の平和的手段の失敗後腕力に訴へしが、爾後其宗教は急速力を以て傳播せり。而も其進歩は少しも基督のそれに比すべきに非ず。是れ其使用の手段全く反對なればなり。即ち一方の進歩の理由は、マホメトが能く大軍を集め得たると、其大軍勝利を得ること、其戦敗者は戦勝者の宗教を奉すべく自由行動を取るを得ざる場合多かりしこと等是れなり。斯く戦勝と改悔とは兩々相並行し、而して回々教を奉するに至れる國民は、先づ回々軍に敗られしに由るに非ざる者、歴史上殆んどあることなし。又マホメトは往々にして人間の劣情に訴へしことありて、例せば自身も其門徒等も數妻を蓄へしかば、其成功は左迄怪しむに足らず。之に反して、基督教は其傳播のため何等の暴力を用ひしことなく、否前にも言ひし如く、種々の大困難と戦はざるべからざりしなり。果して然らば、此の兩宗教の相違は、必ず宗教の自然的傳播と超自然的傳播との間にあるべき筈のものにて、一方は世の力によりて進歩し、一方は之に反抗して進歩したるなり。

されど、是れよりも尙は一層大なる相違の注意すべきものあり。そはマホメトは其主張辯護のため、明○的○奇○蹟○に訴へざりしことにて、換言すれば、人の判断し得る外部的事實に訴へざりしことなり。而して此の事情を一層顯著ならしむるものは、マホメトがキリストの奇蹟を初として前の豫言者たちの奇蹟を信頼すべきものと言ひながら、自ら奇蹟を行へることを粧はざることなり。是れが明白の斷案は他なし、人皆奇蹟を公行せしことなくば、之を行へりと斷言するは、其大困難と感ずる所にして、マホメト亦然り。此に於てか彼は腕力に訴ふることゝなりぬ。是れ腕力の外には訴ふべき道なかりしが故なり。然るに、基督教初代の傳道者等が、奇蹟を説きたりしことは、前に記せし如く否定すべからざる事實なり。彼等は信經の辨護者に非ず、復活の如き奇蹟の如き諸の事實の證人にて、彼等は實際之を目撃せりと信せしなり。回々教又は其他の宗教には、恰かも之に比すべきもの一もなし。論者或は謂はん、回々教は宗教が奇蹟に由らずして長足の遠歩をなし得ることを示すと。然り回々教は之を示す。佛教も亦之を示す、佛教も亦急速力の進歩をなしたればなり。而も基督教の如き、其根柢を奇蹟に据ゆと自稱する宗教が、奇蹟の虚偽なる場合にも進歩するを示すには非ざるなり。

(乙) 其後の歴史

以下基督教初代の勝利より移りて其後の歴史に及ばん。而して其既往の活氣と現在の効果と、將來の見込とを順次に講究せん。

(一) 其既往の活氣

初めに基督教に取りて有力なる一論證は其活氣なり。基督教は外部の攻撃と内部の分争とに拘らずして生存せしが、其傳播と永續とは之を其眞理なるが爲と解するの外はあらず。此の論法たる、愈々年月を重ねて新たなる困難に出會し、而して之に勝つ毎に益々其効力を増すものなり。勿論論者は謂はん、こは只適種生存の一例たるに止まり、初代の諸宗教中、基督教獨り最適種として生存し得たるを示す而已と。されど、こは基督教が人性に最も適當すと言ふと異語同義のみ。若し眞ならば、基督教に取りて有力の一論證なり。

之に加ふるに、世界の社會的狀態は其後甚だしく變更したるが、而も基督教は常に之と其歩調を共にせり。即ち基督教は如何なる時代にも、如何なる國柄にも、又如何なる社會的狀態にも適せることを顯はし、他の宗教とは異にして、依然最も高等の文明と相調和す。之を要するに、基督教は千五百有余年の間文明世界の覇權を握り、年老にして而も元氣あると猶ほ其年少の時の如し。只其繁昌の長期に涉り、もはや人目に慣れたる爲め、人却て其價值を看過するの危険もなしとせず。敢て問ふ、今日人ありて一の宗教を創設し、二千年の久しきに涉りて能く其隆盛を維持し、能く其進取を續けしめ、且つ己れを其創立者と仰がしむるのみならず、又其神として仰がしむるが如き人あるべきや。萬一是れありしとすも、是れ只基督教と同等と言ふに止まる。基督教は獨り古今幾多の變遷の中にありて變化せず。其

信經の中に記載せられたる教理(少くとも重要な教理)は、代々を経て替らず。其創立者は今尚ほ依然として幾百萬の人に禮拜せらる。

(一)其現在の効果

基督教の世界に及ぼせる効果は基督教の歴史と密接の關係あり。繁昌の時期久しきに涉り、且つ最高の文明に達せし國民を支配したるものは、必ずや善惡何れかの感化を有せしに相違なし。而して基督教に就ては如何といふに、此の答辨上殆んど疑はしき點あることなし。即ち文明世界の現狀は其恩澤を説く常備證人とも謂ふべきものなり。是れ今日、文明國民の道德の古代國民に優るは、殆んど皆基督教の賜なるを以てなり。

例せば基督教は全く婦人の地位を一變せしめ、婦人は最早今日にては従前の如くに賤しまるゝことなし。又基督教は小兒の地位をも一變せしめたるが、小兒は昔は財産視せられ、両親の任意に處置せられて、殺兒は勿論普通のことたりしなり。更に基督教は病者に對する人の感想を一變せしめたるが、病院は殆んど基督教の創意に出づといふも差支なきものなり。又基督教は勞働に對する人の感想を一變せり。古代にありては何れの國にても、又今日にては非基督教國にて、勞働者は輕蔑せらるゝを免れず。又基督教は、人命を人命として、人の地位の高下に論なく之を重んずべきものなるを教へたり。要するに、今日人間の權利なるものを認むるに至れるは、殆んど全く基督教の賜なり。而してこは毫も怪しむ

に足らず。其理由は、神は萬民平等の父にして、キリストは萬民を平等に愛し給ふものなれば、人間も自ら平等の權利を有する筈なるを以てなり。而して基督教は、其初め奴隸制度と戦争とを禁壓せず、又之を禁壓する能はざりしかど、當初より其弊害を減殺せしこと多く、今日現に之を絶滅しつつあり。

以上は數多き基督教の効果の中の見本に過ぎず。而して是等の効果は實際基督教の賜にて、單に文明の賜に非ざりしことは、古代の羅馬確かに之を證明す。夫れ文明は羅馬に於て非常の高點に達し、文學美術は隆昌を極めしが、而も其道德上の腐敗は、始終を通じて甚だしく、蠻風以て捕虜を待遇し、劍士を格闘せしめたるが如きは言はずもがな。而して人類の進歩には、種々の原因ありしこと勿論なれど、最も重要な原因とし言へば、確かに是れキリストの教なり。斯くの如くにして、基督教が明白に又公然に益を與へたりしことは、是れ不可争の事實なりとす。

之に加ふるに、基督教には此外尙ほ歴史に多く記載せられざる感化あり。而してこは寧ろ其感化の大部分かも知るべからず。即ち基督教は歴史には記載せられざれど、幾百萬の私人の幸福を進捗し、其徳を増加し、其不徳を滅じたるかも知るべからず。否こは當初より實際然りしこと之を疑ふを得ず。是れ聖パウロの書翰は、其信者の多數が醜陋極まる罪惡を改めしを記するを以てなり(例せば哥前六〇九—一一)。

論者或は謂はん、基督教の功徳は多かりしならんも、其善惡も亦なからずや、中古に於ける宗教戦争及

び迫害の如きは如何と。されど、戦争に就ていへば、宗教は通常その口實たりしにて、原因には非ざりき。是れ基督教にして全く傳へられざりしとも、中古には他の時代と同様幾多の戦争ありしに相違なきを以てなり。更に迫害に就ていへば、こは勿論其事實を承認すると共に、亦之を悲まざるを得ず。而も吾人は敢て問はんとす、基督教以外何れの宗教が、果して斯る迫害の渦中に投じ、而も人類の嫌惡を免かるゝを得たるかと。基督教は之を免かるゝを得しものなり。其理由は、迫害の責任者は基督教そのものに非ずして、其偽友人なることを人皆看破したる爲なり。こゝに大切の事實は、新約書がコーラン經と異にして、信者を得るため腕力を使用するを許さざることなり。況んや之が使用を命令することをや。

次に此の問題の他の方面に移るべし。抑も基督教は、既往に於て其功德多かりしのみならず、又現在多くの功德をなしつつあり。此點も亦殆んど異議なきことにて、何人も自ら此の事實を證明するを得る所なり。幾千の男女は、只キリストの爲にとて其身を犠牲にして、一生を貧者と病者との間に費せり。勿論論者は之を罵りて愚なりといひ、人は皆自ら己れのため又は國家のために同胞人類の益を謀るべしと言ふかも知るべからず。されど、愚と愚ならざるを問はず、事實は兎に角事實なり。貧者と病者とを訪問する人の大多數は、國家の爲にとて斯くするにあらず、又主として貧者の爲にとて斯くするにあらず、純然たる基督教的の動機よりして之を爲すものなり。彼等は信すらく、キリストは是等の貧

者を受す、故に我も彼等を受し、而して彼等を助くるため喜んで我一生を費すものなりと。

斯くキリストが人の心に對して奇異の引力を有し給ふは、歴史上無比の事實なり。試みに問ふ、其一生を費して大都會の病者を歴問し、而して我之をなすは、或はメヒデ或はフラト或はマホメトを受するが爲なりといふが如き人は是れありやと。而も、文明の諸國を通じて、キリストを受する爲に斯くなしつゝある男女は數へ難きは多し。而して此に注目すべきは、此の感化は他の偉人のそのの如く地方的一時のならず、世界的なりと言ふことなり。斯くの如くにして、キリストは曾に前章記載の如く人中の最聖者たるのみならず、又人中の最大者なり。略言すれば最も多く人類を感化せし人なり。而して此の感化の全然良好なりしは、極めて少數の例外者を除けば異議なきことなり。此故に成肉せる神を信する信仰は、世界を改良するの功、宇宙の神を信じ、又は猶太の神を信じ、其他既往現在諸他の宗教を信するの信仰に比し、遙かに大なり。果して然らば、其結果を以て判断する時は、基督教は當然神より出でし宗教といふべきものなりとす。

然り而して、基督教は其功德も多けれど、未だ世界を全く感化するに至らざるは、之を認めざるべからず。而して基督教が、幾百年の久しき之に努力しながら、尙ほ其功なきは、其主張に反するものと思ふ人なしとせず。されど一方には又此の半成功半失敗の有様を見て、基督教若し眞ならば、當然のことなりと思ふ人もあり。殊に之を切實に感せしむるものは、是れ其創立者の豫期なりしものゝ如しといふ



こと是れなり。蓋し善と惡(麥と燕麥)とは、世の終まで雜居するものなりとは、キリストの常に暗示し給ひしことなるが故なり。之に加ふるに、此の世界の改革は基督教唯一の目的にあらず。其重大の目的は人類に來世の準備教育を施すにあり。此故に、來世に於ける信者の状態如何を知らざる間は、基督教の成功不成功は容易に口にすべきことにあらず。又其所謂失敗に就て言はんは、こは全く信者の言行不一致に因す。萬民若し皆基督教信徒にて、基督教徒皆其口にする宗教を實行せば、よしや世は斯く不完全なりとも、今日の如き不平はあらざるべし。

之を要するに、基督教の効果は、これに有利なること一點疑なし。基督教は功德多かりき。而して今後年月の経過と共に、其効果一層多かるべし。但し基督教は全然世界を改革したりと謂ふにはあらず、今後も亦恐らく改革し盡くすことあらざるべし。されど、其顯せる功德は、是れ争ふべからざる實際の事實にて、其功德一層多からざるべからずといふ反對論は、少くとも是れ疑ふべきものなりとす。

(三)其將來の見込

最後に基督教は今後も尙ほ引續きて傳播すべしと思はる。而して早晚世界は一般に之を信奉すること、猶ほ今日の西歐の如くならん。但し其場合にも個人として之に反對するものあるは勿論なり。斯くの如き樂天的希望を有する理由は他なし、概言すれば、其感化を四方に及ぼすものは、只基督教のみなること是れなり。論者は往々、基督教は只五大洲中の三大洲(歐羅巴、亞米利加、澳洲)を支配する

のみと稱すれども、世界の前途は、係りて此の三大洲の上にあるが如きことも事實なり。勿論日本は之が例外として擧ぐるを得べし。されど一奇とも謂ふべきは、日本が漸次、基督教化しつつあること是れなり。

尙ほ之に附言せざるべからざる事實あり、即ち基督教の外國傳道は今や盛んに勃興し、而して其成績は悉く良好といふに非ざるも、概して言ふ時は夥しき信者を得といふこと是れなり。之に加ふるに、此の論證には裏面なし。即ち、基督教は或國に採用せらるるも、或國には放棄せらるると言ふが如きことなし。故に、大なれ、小なれ、其收得は悉く皆純利益なり。唯一の例外を除けば、幾百年來一たび基督教を採用しながら、之を棄て、他のものに換へし國民又は民族は一もなし。而して其例外とは革命時代の佛國を指すものなるが、是れとても著しく通則を證明す。是れ其變更は永續せず、數年ならずして基督教は再び佛國全土に行はるゝに至りたればなり。

されどこゝに一つ調査すべき大切の反對論あり。即ち論者はいふ、今や基督教諸國にては、公然基督教を否認するか、然らざれば只之に名義だけの同意を與ふる人、日に益々其數多しと。此の反對論は偏理説の傳播より生ずる反對説とも言ふべく、且つ大切の反對論なり。其理由は、基督教の武器即ち理性に訴ふることを以て基督教に對抗するもの、即ち此の反對論なるを以てなり。勿論今日行はるゝ不信仰は、推理に由りて起るに非ず、却て推理の欠乏に由りて起るもの多きは記憶せざるべからず。斯る不信

仰に對しては議論は全く無益なり。其理由他なし、人若し基督教と其他のものを問はず、其主張を調査するの勞を取ることなくば、争で能く之を確信すべきを、全く無益なるを以てなり。今は此種の人々は之を度外に附すべし、是れ本書は斯くの如き人の爲に著述せるに非ざればなり。而も此の人々以外に、尙ほ偏理論者と稱して差支なき人許多あり。即ち問題の表裏兩面を研究し、其推理に由りて基督教を否認するに至れる人々は是れなり。彼等は認定すらく、基督教にも有利の證據ありと。而も彼等はいふ、此の證據は未だ人をして確信せしむるに足らずと。而して多くの人々の信する所によれば、今日此の偏理論は、益々蔓延しつゝありと、遂には思想家間に普通のものとなるべしといふ。借本書は全部、實は此種の反對論に答へ、且つ基督教の爲の論證は、丁寧に講究すれば、却て基督教に反對の論證よりも多きを示さんとするにあるは勿論なり。されど今はこゝに三の短評を加へ置くこととせん。

第一は、此の反對論は別に事新らしき困難にはあらずと言ふことなり。即ち偏理論は中古以來常に存在し、特に第十八世紀には極めて進取的に、極めて自信力ありしこと、左の一文を見て明かなり。即ち監督バットラは、一千七百三十六年その宗教對比論に序して曰く、「余は其如何にして然るやを知らざるも、多くの人々は基督教を以て研究問題とするに足らざるものと臆断し、今日遂に其假作物たるを發見せりと稱するに至れり。随つて彼等の基督教を遇するや、最早現代に於ては、こゝは學者社會の定説な

るが如くにす。今や基督教は全く娛樂と侮辱の題目として世に立ち、其久しく此の世の快樂を妨害せし復讐を受くるの狀あり」と。監督バットラが此言を書きしより今日に至るまで約二百年。而して基督教は依然榮えつゝあり。此故に、從來の諸攻撃が無効なりし如く、今日の攻撃獨り功を奏すべしとは信せられざるなり。

第二に、基督教の受くる斯くの如き間斷なき攻撃は、或點より言ふ時は、基督教の爲には有利なる證據なり。蓋し攻撃は基督教の不可壊性を示すものにして、間斷なき攻撃の外は何物も之を示すことなればなり。即ち基督教にして曾て攻撃を受けしことなかりしとせよ、其實力は曾て判明せしことなかるべし。されど今日にては人皆例ひ數百年を費して此の宗教を除かんとしたりとも之を能くすべからざることを知るに至れり。

最後に記應せざるべからざるは、偏理論は全然破壊的にして、建設的には非ざること是れなり。偏理論は、基督教を信せざるの理由は多く之を示すを得るも、而も其代りとなすべきものを世に與ふこと能はず。又偏理論は絶えて人生の大問題に充分の解決を與ふること能はず。人は何故存在するや。人は何故自由意思を有するや。罪とは如何なる意味ぞ。罪の赦しなるものは果して是れありや。死とは如何なる意味ぞ。死後の生命なるものは果して是れありや。審判なるものは果して是れありや。人類は臆する所なく此の審判に當り得るものなりや。人皆現世に於て愛せしものを認識し得るや。要するに

人類が現世と來世との運命は如何。凡そ是等の諸問題は、既往に於て常に人類の注意を惹けるものにて、將來も亦常に然るべし。偏理論者は言はん、是等の諸問題に對する基督教徒の答は當を得ずと。されど彼等自らは、暫しなりとも熟考の價ある答辨を提出する能はざるなり。

(丙) 結論

此章を結ぶに先だち、多少重要なる他の點につき、尙ほ一言せざるべからず。他なし、基督教が間斷なき迫害の間にありて、間斷なき勝利を得たる初代の歴史は、創立者の豫知し給へるものなるが如く、又世界に及ぼす自己の感化も其豫知し給へる所なるが如しといふことは是れなり。

先づキリストには、自己の宗教の將來に關し種々の豫言ありて、是等の豫言は眞に驚くべきものなり。即ち一面に於ては、是等の豫言は、其教會の將來に關し非常に絶對的確信を顯はし、且つ其敵は到底之に勝つべからざるを説きたるが、他の一面に於ては然らず。教會の會員は間斷なく苦難を受くべきものにて、一生迫害を受け、普く人類に怨嫉せらるべしとの確信を顯せり(例せば太十〇十七、廿二、十六〇十八)。而も間斷なき苦難の中に間斷なき成功を得との奇異なる此の豫言は、奇異にも最初三百年間に於て照應せり。

又キリストは世界に及ぼす自己の感化に就ても豫言し給ひたるが、是れ亦前同様驚くべきものなり。余は此の中より只二の例を擧ぐることにすべし(約八〇十二、十二〇卅二)。キリスト曰く我もし地より

舉れば萬民を引て我に就せん。キリストは十字架上に擧げられ給へり。而して之の結果は、奇異にも幾百萬の人々、燃ゆるが如き熱情もてキリストに就くに至りぬ。キリスト又曰く、我は世の光なり。而して千八百年を経たる今日、キリストの教が人類を照らして新生せしめたることは、敵も味方も共に之を認む。キリストにして若し單に猶太の一賤民ならんか、斯くの如き豫言を發せしことは殆んど其照應の不可信なるほど不可信なるべし。されど是等の豫言の發せられしことも、又其照應せしことも、共に事實なりとせば如何。是れ基督教に取りては有利の一論にして、其力は殆んど無量といふべきに非ざるか。人或は此の文句は、信實のものならずと言はむ、困難を脱し得べしと思ふべきも然らず。此の文句は、たとひ福音書記者の偽作とするも猶ほキリストの自言なると同様に驚くべきものにてあるなり。

諸この基督教の歴史に關する一章を約説せんに、本章に於ては基督教初代の勝利と又其後の歴史とを講究せり。而して此の兩者は、嚴正に言ふ時は、共に無比無類にて、共に純然たる自然的理由にて之を説明するを得ず。而も此の兩者中、比較的に一層重要なるは、基督教が最初幾多の大困難に遭遇せしに拘らず、驚くべき成功を得しことなり。而して之が自然的説明は、前に言ひし如く、全然その効なし。果して然らば、歴史的論證も亦畢竟は奇蹟に歸するものなり。是れ基督教初代の勝利は、奇蹟以外の説明にては不充分なるに由る。然り而して、奇蹟にして若し眞實ならんには、基督教の設立は正しく是れ

當然の事件なり。且つ基督教の如き建築物の設立には、其基礎として偽ならざる眞實の奇蹟を要すること殆んど贅辯を要せず。世界無比の最聖最強なる宗教は、虚偽空談を基礎とすべきものにあらざらば、基督教奇蹟の事實たることを否認し、且つキリストより一切の超自然的分子を除去する時は、キリストは到底基督教の創立者たるを得ず。原因と結果との間に、掩ふべからざる不釣合の存するを以てなり。且つ夫れ、人類の心を握り、世界に全勝を得たりしものは、自然的のキリストに非ず、却て超自然的のキリスト即ち福音書中のキリストにまします。果して然らば、吾人は結論せざるを得ず、基督教の歴史を説明し得るものは、只其事實あるのみと。兎に角基督教の歴史は、基督教の爲の有方の一論證たること明瞭なりとす。

## 第二十二章 要するに他の證據も此の斷案を證明する事

### 基督教賛否兩面の種々なる論證

#### (甲)基督教と聖書

聖書に瑣細の錯誤あることは争ふべからず、されど此の錯誤は言ふに足らざるものなり。是れ聖書の記者は逐辭的靈感を受けたりと主張するものに非ざればなり。

#### (乙)基督教と祈禱

其普及せること。されど之に三の反對論あり。即ち祈禱は

- (一)科學的に不可信なること||是れ自然界の統一と相矛盾すればなり。
- (二)道徳的に不正なること||是れ神の能力と知慧と善徳とに反すればなり。
- (三)實際上無用なること||是れ統計上明了なり。されど此の三反對論は、一も成  
立せず。

#### (丙)基督教と人性

基督教は人性に適す。是れ基督教は、非常に人類固有の渴望に應ずるものにして、

殊に悲哀と罪、死と永遠とに關して然るを以てなり。利己主義なりとの反對論

### (丁) 基督教と他の宗教

其比較研究。クリシナ神話。ホラス神話。基督教の無比類なること。宗教は人種及び氣候に關すとの反對論。

本章に於て講究せんと欲するは、基督教の贊否兩論證中、前來未說のもの是れなり。幸にして、多少總斷案に關係あるほど大切のものといへば、只四ある而已。そは即ち基督教と聖書との關係、祈禱との關係、人性との關係、及び他の宗教との關係より起るものなるが、以下順次之を調査せん。

#### (甲) 基督教と聖書

舊聖書の如き、所論の題目雜多にして、著作の期間數百年間に涉れる幾卷の書を蒐集せしものが、一面に於て種々の批評を蒙り、他面に於て種々の贊成論を聞くは、是れ自然のこと、謂ふべし。舊其贊成側の證據に就ては、前に已に講究せしが、其反對側の論證に就ても亦然り。されど、此に一つ論すべき重大にして且つ頗る平凡なる反對論あり。曰く、聖書の中には瑣細の誤謬及び齟齬少からず(こは已に第十章と第十五章とに於て認めたりし所なり)而も聖書全体を通じて眞理なるは基督教に取りて必須のことなり、是れ聖書の著者等は、逐辭的靈感を受けしものなればなりと。されど、此の終りの點には異論あり。

今は混亂を防ぐため、啓示と靈感とは注意して之を區別し置くを要す。啓示とは直接に神より人に與へられし超人的知識なり。又靈感とは、啓示又は其他のことを記録するに當り、人の受けたる超人的指導なり。然るに此の指導にして、用語の末にまで及び、之に由りて記すは如何なる瑣細の誤謬をも豫防せられたりしとせんか、斯る指導を名けて逐辭的靈感といふ。舊斯くの如き靈感は、基督教に取り必須なりやといふに、斷じて然らず。是れ三の信經は、初より終まで、一辭も靈感のことを説かず、聖書の記者たち又其啓示と宗教的訓誨との神より出でしを説くと雖、逐辭的に靈感を受けたりとは主張せざるを以てなり。

勿論或文句は、最初一見せるだけにては、此の意味を含めるに似たり。されど確かに然りと云ふべきものは一も是れあらず。思ふに、之が最も有力の證句は、聖パウロの所謂「われら此事を語るに人の智慧の教る所の言を用ひず聖靈の教る所の言を用るなり」といふものは是れなり(哥前二〇十三、一〇十八、十四一十六、哥後十一〇十七。又太十〇十九約十四〇廿六、加三〇十六、來一〇五一十二、三〇七)提後三〇十六、彼後一〇廿一を見よ)。而も此文句とても其意義明確と言ふに非ず。是れ此の前章に十字架の言(和譯聖書には十字架の教とあり)とありて、其意義は十字架の教理又は教といふことにて、言といふ意味に非ざるにても明かなり。之に加ふるに、更に其少し前には聖パウロ自ら誤謬に陥れるを認め、而して後ち之を改めしことを記載せり。又他の章には、「わが言ところは主に循ひて言に非ず愚なる者の

如く言なり』と明言せる所あり。此の最後の一文には、他の處に一種の靈感の意を含める所あれど、それとて必ずしも逐辭的靈感の意にあらず、又其靈感が世間的問題にまで及びしとの意にもあざるなり。

果して然らば吾人は結論す、聖書の瑣細なる歴史的又は其他の錯誤は、基督教の反對論證として力あるものに非ずと。即ち聖書は諸他の書籍の如く大体上は眞實なるも、必ずしも不可誤と言ふには非ざるべし。さればとて、聖書は勿論靈感を受けし書に非ずとの意には非ず。基督教會は古今等しく其然るを信じ、而して此の信仰には有力の理由あり。されど此の問題は只基督教徒限りの問題にて、基督教を信せざるものには關係なく、又基督教若しくは其證據に必須のものにも非ず。聖書にして若し事實を記せる信用すべき記録たること普通の歴史書の如くならば、それにて基督教の證據たるに充分なり、否充分以上なり、靈感はなくとも可なりとす。

(乙)基督教と祈禱

次に論すべきは祈禱の問題なり。基督教徒は、諸他の宗教徒と等しく、祈禱を以て靈的祝福なるものを得る力ありとなすのみならず、又自然的事件を左右する手段なりと稱す。而も多くの人は、斯くの如き目的に使用せらるゝ祈禱を、科學的には不可信に、道德的には不正に、實際上には無用と認む。此を以て、初めに先づ祈禱の習慣の普及的なるを説き、次で上記の反對論を順次に講究せん。

諸祈禱なるものは、多少の異同こそあれ、殆んど凡ての宗教の通則にて、且つ古今共に然り。即ち祈禱は實際人類のある場合に必ず存せざることなし。されば何人も祈禱の發明者を指摘する能はず。又何人も人類が祈禱せざりし時代を指摘する能はず。宣教師は野蠻人に對しても祈禱せよと教ふる必要なく、只誰に祈禱すべきかを教ふれば足れり。之を要するに、祈禱は多少の相違こそあれ、普及のものなるが如く、恰かも人類の道德的正邪感の普及なるが如し。只兩者とも尙ほ訓練し、尙ほ琢磨することを得るものなるは勿論なり。又祈禱は固有の活力ありて、何處に於ても數千年の久しき其地位を維持し來れり。而して祈禱は動物が害を受けし時の苦痛の叫びとは同じからず(是れも普及的のものながら無意味なり)。其理由は、動物の叫びは人類の苦痛の叫びと相類似せるものながら、祈禱には何等の關係なきを以てなり。

されば祈禱若し迷謬ならば、それは實に驚くべき迷謬なり。特に多數の古代宗教にありては、答を與ふる能はざる偽神に祈禱をなせるを思ふ時に於て然り。而して如何ほど成功せざりしにもせよ、祈禱に對する信仰は、古今未だ曾て衰へしことあらず。即ち人皆何れかといへば、祈禱の不成功を以て自己の過失に由るとなし、祈禱に答を與へ給ふ神を信する信仰を棄つることをなさざりき。斯く祈禱の普及的なることは、其一事已に祈禱の爲め有力の一論證なり。其理由他なし、神若し斷じて答を與へ給ふ意なくば祈禱の普及的習慣を人類に賦與し給ふ筈なきを以てなり。

(一) 科學的<sup>〇</sup>反對論<sup>〇</sup>

第一に論者はいふ、祈禱に對する答は、科學的に不可信のものなり。是れ祈禱の答といへば、神が自然界の進行に干渉し給ふに當ればなり。一層通俗にいへば、奇蹟を行ふに當ればなりと。借之が最も近眞的の説明は他なし、祈禱の答なるものは、是れ超人的<sup>〇</sup>符合<sup>〇</sup>(第七章を見よ)の一種に過ぎずと謂ふこと  
是れなり。此説に據りて言ふ時は、神は豫じめ祈禱の捧げらるべきを知り給ひ、豫じめ之に答へ給ふ準備をなせるなり。若し然りとすれば、祈禱は之に照應せし事件の直接原因にあらず、而も之を間接原因といふは差支なかるべし。其理由は、人若し祈禱せずば、神また之を豫知し給ひて、其當該事件を起らざらしめしかも知るべからざればなり。勿論祈禱の捧げられし際、該事件は其前事件の自然的結果なりしかも知るべからず。否恐らくは然るべし。随つて之を起らざらしめんとすれば、神の特別行動に由るの外なかりしならん。而も既記の如く、此の祈禱は尙ほ間接に其照應の原因となりしかも知るべからず。

之と同じ論法は、最も極端の場合即ち事件後に祈禱をなせる場合にも、尙ほ當て符まる。例せば、或人その子の搭乗せる船の難破を聞き、彼れの安全を祈禱せりとせよ。借その安全は船の難破の關係せる限りは、是れ父親の祈禱前已に定まれることに相違なし。而も神は何事をも豫知し給ふを以て、父親の事後の祈禱も無用ならざりしかも知るべからず。その理由は、神若し父親の祈禱することを豫知し給

はずば、又子の安全をも來すことなかるべきを以てなり。

勿論論者は謂はん、こは原因を結果の後に來らしむるものにて、随つて背理なりと。然り、單に物質的勢力の關係より言ふ時は、背理に相違なし。而も祈禱は前見の力を具へて之に應せし行爲をなし得る人格者との關係なるが故に、原因が或意義に於て其結果たるもの、後に起ることも不可能にはあらず。例せば、余が來週一日の休暇を得て遊びに行くは原因にして、今週刻苦勤勉するは其結果と言ひ得るが如し。但し嚴正に言ふ時は、此の結果を生せしものは、即ち來週休暇を得て遊びに行くといふ余の豫知と、それが爲め余の取れる行動なるは言ふを待たず。今祈禱に就て言ふも之に同じ。之を嚴密に言ふ時は、結果を生せしものは、祈禱の捧げらるべしてふ神の豫知と、それが爲め神の取り給へる何等かの行動なり。されど事實の上よりいふ時は、祈禱が此の結果を生せしといふと異なる所なし。此故に、此説は祈禱の要用と價值とを減せざること、猶ほ神の諸他の點に於ける豫知が人の行爲を無價値のものたらしめざるが如し。神は如何なる場合にも結果を豫知し給ふ。こは此の結果を來せる人の行爲に拘らず豫知し給へりといふにあらず、却て之を豫知せる故に、此の結果をも豫知し給ふなり。之に加ふるに、神の自然界に於ける内在といふことを認め、世上百般のこと皆神の現在的直接的行動に由ることを認めなば(第七章)、祈禱に關して他に尙ほ如何なる困難ありとも、そは著しく其度を減すべきなり。之に由て是を觀る時は、祈禱の答なるものは、敢て其意義に害を及ぼさずして之を超人的符合と看做す

を得べし。果して然らば、超人的符合は毫も自然界の常則に抵觸するものに非ず。随つて一切の科學的困難は皆消滅に歸するなり。

(二) 道德的の反對論

次には道德的困難に就て論せん。論者はいふ、祈禱は道德的に不正のものなり。是れ神の三大屬性の何れにも反すればなり。即ち祈禱は神の能力に反す、是れ神が多少人の權下にある意を含めばなり。又神の智慧に反す、是れ神も人類の所要を報知せらるべきものたる意を含めばなり。又神の善徳に反す、是れ神も人の干渉なくては、人の好都合を謀るや否や、之に信賴するに足らざる意を含めばなりと。

第一に先づ神の能力に就て謂はん。凡そ祈禱をなす人にして、神は我祈禱の權下にありと思ふ人、一人も是れあらず。只祈禱に由りて動かさるゝと動かされざるとは、神の自由と思ふのみ。夫れ人は其創造者に比すれば、微弱にして言ふに足らざるものなり。されど神は人の幸福を顧念し給ふこと、是れ已に前に説きたる所なり。果して然らば、神は人の祈禱に動かさるべきこと、近眞的なりと謂ふべし。而も祈禱は決して神を勸めて其意思を變せしむるの所爲にはあらず。是れ神は何事をも皆豫知し給ふものなればなり。此故に祈禱は、それに関連したる一切のこと、共に、永遠の昔より已に神の意思の一部たりしかも知るべからず。

第二に神の智慧に就て謂はん。凡そ祈禱をなす人にして、祈禱を神に對する報告と思ふ人なく、神の同情を喚起する所爲と思ふ人もなし。只人をして神に對する信任を表せしめ給ふとて、神の撰び給へる方法と思ふのみ。而してこは無根の想像にあらず。是れ神は自由意思を有し給ふ人格者にて、此の自由意思に訴へ奉るは少しも不適當と思ふべきに非ざるを以てなり。否斯くするは神の人格に對する吾人の信任を表するものにて、之を事實たらしめんとする吾人に取りては有力の助なりとす。

第三に神の善徳に就て謂はん。實際神の祝福の多くは、人の祈禱を待ちて送り給ふには非ず。祝福の過半は却て人の協力に由らすして來るものなり。されど人の祈禱を條件としたるものもなきに非ず。而してこは少しも完全の善徳と相矛盾せず。人間の譬喩は能く此點を明かにするに足れり。例へば、こゝに一人の父親ありて、能く其子の所要を知り、又此の所要に供給する意あり、而も其子が自ら要求するまでは靜かに之を待てりとせよ。こは抑も何故なりや。曰く他なし、子の所要に供給することだけが、父の懷抱せる目的の全部に非ざる爲なり。即ち父は此外に尙ほ其子の品性を訓練するの意あり、父に依頼信任することを教へ、其信仰心感謝心を發達せしめんとすの意あり。而も斯くの如きは、父若し機械の如くに其子の所要に供給せば、成功すること無かるべし。即ち其場合には、子は恐らく父の機械にあらで人格者なるを忘るゝならん。

借吾人の知れる限りを以ていへば、右の譬喩は全く祈禱の場合と同様なるが如し。夫れ神は人の所要



に供給せんとの意あるのみならず、又其品性を訓練發達せしめんとの意あるもの、如し。然り、已に第五章に説ける如く、此世に惡の存在する以上は、吾人は此の斷案を下さざるを得ず。果して然らば、神が人に要求せらるゝ迄或祝福を與へざるは、其完全の善徳に矛盾すとの反對説は、齒牙に掛くるに足らず。斯くの如きは、寧ろ其善なる徵證かも知るべからず。然り、恐らくは然るべし。其理由他なし、已に前にも説きたる如く、神の善徳は單の恩恵だけにて成立せず、又義を以て成立するものなるを以てなり。而して通例は、神を信じて其祝福を求むる人が、即ち之を受くる人たるは當然のことの如し。果して然らば、祈禱は道德上不正なりとの反對論は、何れの見地よりしても維持するを得ざるものなりとす。

されど茲に或種の祈禱は不正なりと附言するは、蓋し至當のことなり。例せば人は、水を山に上らせ、死者を生命に還らすが如き奇蹟を祈禱するの權利なし。只、人の有するものは、降雨の如き、病氣平愈の如き、尋常平凡の出來事を祈禱する權利のみ。此の兩者を區別する理由は明瞭なり。即ち奇蹟なるものは、通俗の言を以ていへば、自然界の秩序に反するものなり。而して自然界の秩序とは、自然界を秩序したまふ神の意思に外ならざるが故に、奇蹟は取りも直さず神の意思に反するものなり。されば人も其意思に反すと知りつゝ、之を行へど神に迫るべきに非ざるなり。勿論々者は謂はん、祈禱をなさずんば降雨せざるべき場合に降雨を祈るは、即ち奇蹟を求むるなり。是

れ自然界の常道に干渉せんことを神に迫るものなればなり。されど今の場合には、何事も皆祈禱をなさずんば、降雨せざるべき場合にといふ斷りの文句に關係あり。即ち若し確かに之を知らば、降雨を祈るは不正なり。若し又確かに之を知らずば、不正に非ず。然るに、水は奇蹟に由らずんば山を上らざるは皆人の確かに知る所なるを以て、之を祈るは斷じて不正なり。之と等しく、五穀の豊穰を祈るは可なり。是れ豊かに人類を養ひ給ふは、明かに是れ神の意思なればなり。されど食物を取らずして生活し得んことを祈るは不可なり。是れ明かに神の意思に非ざればなり。勿論聖書には往々奇蹟を祈求せし例記載せられたり。されど之を祈求せしは、只神の指導の下に行動せし人あるのみ。果して然らば、それは今日の人々が之を祈求する證據とすべきにあらざるなり。

(三) 實際的の反對論

最後に論者は言ふ、祈禱は答を得ることもあるべし、而も亦全く答を得ざることも其證多し。此故に今日にては祈禱は無用なりと。されど此の反對論には掩ふべからざる困難あり。その理由は、祈禱は凡て答を得るものとは何人も斷言せざればなり。夫れ祈禱の答を得んとすれば、種々の條件を満たすを要す。而して其多數は現世の君王に對しての祈禱にも亦當て符するものなり。例へば、祈禱をなす人は神を信する而已ならず、併せて又祈禱に答へ給ふ神の能力と意思とをも信せざるべからず。且つ其答も之を求めて差支なき種類のものたらざるべからず。加之、神の我に望ませ給ふ如き行をなし、正直

に勤勉して所期の目的に達することを努力せざるべからず。是れ祈禱は勤勞の代用物と看做すべきものに非ざればなり。

斯くの如き理由なるを以て、此の問題は論者の往々唱ふるが如き實驗に由りて決すべきものに非ず。論者はいふ、何故一つの試験例により一舉に此の問題を決せざるやと。されど此は不可能のことなり。是れ多數の場合、前記の條件が満されたりや否やは之を知るを得ず。たとひ之を知り得たりとも、尙ほ實驗は實行すべきことに非ざればなり。其理由は、祈禱とは我熱望するものを神の我に與ふるを熱望することなり。然るを若し之を實驗として使用せば、祈禱は眞實の祈禱たらざるに至ればなり。斯くの如き精神よりする祈禱に答ふることは、現世の君主すら尙ほ其自尊心に反することとして之を拒絶すべきなり。

論者は尙ほ辯じて言はん、若し實驗によりて決する能はずとも、觀察によりて之を決するを得べしと。されど既掲の事實は之を兩説の中の何れによりしても説明し得るを如何せん。例へば、こゝに疫病初まれりとし、其撲滅のため直ちに祈禱を捧げられたりとせよ。然るに、疫病は依然行はれて、一週日の間繼續し、一百人の者之に倒れたりとせば如何。而も祈禱を捧げざりしとせば、一ヶ月の間繼續して、一千人の者之に倒れたるかも知るべからざるに非ずや。之と同じ論法は、尙ほ諸他の場合にも之を適用するを得べし。

是等種々の反對論と相對して思量すべき一の事實あり、即ち古今東西辯識ありて正直なる無數の人々が、其祈禱は答を得たりと證言すること是れなり。此の證據の集積的價值は頗る大いなるものなり。此の證據を握れる人々を以て見れば、或る事件は人の普通にいふが如く偶然に起れるにあらず、却て祈禱の答として起れるにて、此の確信は其人に取り絶對的に有力の證據なり。此點より言ふ時は、此の確信は、人の行爲は其自由意思に由りて定まる、必然に由りて定まるに非ずといふ確信と相似たり。以上、已に祈禱の答を得るといふは少しも不可信にあらず、又不正にも非ざること論定し、且つ此の事情を熟知せる筈の人々は、祈禱は無用に非ずと主張することを説けり。果して然らば、此の問題を根據とせる基督教反對論は成立せざること明瞭なり。而して此點正しく刻下講究中の問題なり。吾人は祈禱の答に何等證明的の價值ありとは謂はず。否多數の場合には却て是れあることなし。只吾人は、科學と實驗とよりいへば、此の題目は尙ほ未決のものなるを示せしに止まる。

(丙) 基督教と人性

次に講究すべき題目は非常に大切のものにて、基督教は人性に適應すといふことは是れなり。第一に基督教は社會各階級中の少くとも或人々に非常に有力に訴ふるものなるは是れ否定すべからざる事實なり。即ち貧者も富者と等しく之を貴び、無學者も學者と等しく之を重んじ、小兒も幾分か之を了解するを得ると共に、哲學者もそれより以上に及ぶ能はず。而して斯くの如きは、只今日の現状たるに止まら

で、實に千八百年間社會の狀態千變萬化の中を通じて然りしなり。

諸基督教が斯く多くの人々に非常の勢力を有する理由を探究するに、是れ全く人性固有の或る渴望に應ずるが爲なり。此中、人の祈禱の効力を信することの如き、責任の感の如きは、勿論諸他の有神論にても之を満足せしむるを得べし。又公義の感の如きも然り。公義の感とは、正邪善惡は此世に於て適當に報のられざるが故に、來世に於て報のらるべしと要求する感情をいふ。然るに以上列記せし外に尙ほ諸他の感情あり。而も基督教は悉く之を満足せしむるに似たり。

第一に、神は吾人々類を顧念し給ふものなるが、之に就て人の知らんと欲する所を悉く證言するものは基督教なり。こは勿論自然宗教の教ふる眞理なり。而も此の眞理は、科學の進歩殊に天文學の進歩により、之を信仰すること益々困難となる。而して前にも已に記載せし如く、(第五章)此の困難を減ずる論點種々是れなきに非ず。されど、基督教は一たび承認せらるゝ時は、悉く此の困難を排除す。其理由は、宇宙の主宰自ら甘んじて此の遊星に於て成肉せる以上は、人類は微賤のものなりとの感の如きは全く消滅すべきを以てなり。而して吾人は遠隔なる星界のことを思ふ時は、人類は弱小なりとの感に打たれず、却て神の愛は大なりとの感を催すべし、是れ神は人の爲めにとて自ら人となり給ひしものなればなり。

此點よりして見る時は、神は天に在す我儕の父にて、人類を顧りみ、人類を守り給ふこと、恰も此世の父

の如きものなりと言ふも差支なし。斯くの如き神觀は、或は神人同形的の嫌なしとせず、されど人類自然の要求を満足せしむるもの、此の神觀の外になし。此點に就て、基督教は人に其渴望せる保證を與ふ。其保證は、或は精確と言ふべからずとするも、誤謬にはあらず。是れ此の神觀は神の自ら吾人に望ませ給ふ神觀なるを以てなり。

以下四の點に就て詳かに講究せんとするに方り、悲哀と罪と死と永遠との四を撰べり。此中初めの三は、何人も遭遇せざるべからざるものにて、第四も亦恐らく然るべく、是れ人類共有の遺傳物なり。而して偏理説は、之に遭遇するため、人に力を與へず、單の有神論また確信を與ふること能はざれど、基督教は徹頭徹尾人類の要求を満足せしむ。たとひ然らざるも、兎に角諸他の宗教には優りて之を満足せしむるなり。

第一は悲哀に就て謂はん。夫れ現在にありては、人皆多くの悲哀と苦難とを忍ぶべきものなるは、是れ争ふべからざる事實なり。又悲哀の中にある時は、人の來りて我に同情し、我を助けんことを本能的に望むことも、是れ争ふべからざる事實なり。而も非ヘルソンの神は勿論之を能くせず。非ヘルソンの神若し之を能くせば、重力も亦吾人に慰藉を與へ得べきなり。亦ヘルソナルの神は人を助け得べしと雖も、人に同情するを得るや否や、吾人は確かに心に之を感ずるを得ず。之に反して同胞人類は互ひに同情するを得るも、必ずしも常に相助くる能はず。只全然人性を満足せしむるヘルソンはキリストあ

るのみ。其理由は、キリストは人なるが故に能く人の悲哀に同情するを得べく、又神なるが故に能く悲哀を軽減するを得ればなり。故に基督教は此點に於て人類一般の要求に供給するものなり。勿論神子成肉の教理も、他の點に於ては人類を満足せしむるものにて、殊に人類に其愛情相當の對象を與へ、亦完全の模範を示すことに於て然り。されど是等の點は、第十三章に於て已に説示したるが如し。次に罪に就て謂はん。而して之に就ても、事實は實際上争ふことを得ず。即ち人の罪の感は普及的なるが、之と同時に神の公義を信する信仰も亦然り。此を以て、古今を問はず、人皆神を宥むるの手段を求めたり。犠牲の習慣が廣く行はるゝは、全く之が確證なり。即ち犠牲は人に固有の罪惡感あるを示すと共に、又贖罪を必要とする感を固有せるを示す。而も基督教の行はるゝに至れる處にては、皆斯くの如き犠牲を廢棄せり。此の理由の如何は、今殆んどこゝに之を指摘する必要なし。基督教の贖罪説は、全然人類の此種の渴を満たすものなり。即ち基督教の贖罪説は、罪の事實を認めて、此罪に對し人類の自ら供ふること能はざる充分の犠牲を供し、斯くして人類の爲に完全の赦罪を保證す。さればとて、已に第十三章にも示せし如く、此説は罪の罪たることを割引するものにあらず、又人をして罰を受けざる様罪を續けしむるものにも非ず。否却て罪の大きさを他の宗教の及ばざる程度にまで擴大するものなり。其理由は、罪の赦しを得んとすれば、無限の犠牲即ち神自身の犠牲を要すること、即ち此説なるを以てなり。之に加ふるに罪は人性の必然にあらずとは基督教の示す所なり。其理由は、人

の如くに誘はれたれど、罪を犯すことなかりし者を指摘し得るは、宗教多しと雖も基督教のみなるを以てなり。之に加ふるに、キリストの此の模範の、人をして罪に抵抗せしむる一大助力たるは、是れ基督教徒の主張する所にして、又基督教徒の熟知し居るべき善のことなりとす。

次に死に就て謂はん。此點に就ても、事實は之を争ふべからず。夫れ己れの死を考ふることを好む人は稀にして、畏縮して之を厭ふ人また是れなしとせず。而も死は確かに人の期待し居るべき一事件なり。されど敢て問ふ、死後にも尙ほ生命ありやと。多數の人々は皆此の來世の生命を渴望し、多數の宗教また此の渴望を満足せしむるため種々其方法を盡くす。されど未だ全く成功せしものは非ず。人類には高等の性質ありて、マホメトが想像したる如き單の物質的肉慾的天國を好まず。マホメトの天國は、所謂現世の快樂だけを繼續せしめて、其苦痛を除去せしものに過ぎず。さればとて、純然たる靈的天國も人類を満足せしむるに足らず。是れ人は皆、此世に於て愛せしものを再び認識し得るや否やを知らんことを渴望するものなればなり。此の渴望たる、げに人類の最深最強最普及なる渴望なれば、此の渴望を感ぜざる人果して是れありや、而も亦肉体なき靈だけを認識し得るや否や、是れ古今人の等しく疑ふ點なり。然るに此點に就ても、基督教の肉体復活説は、獨り人類の渴望を満足せしむ。是れ凡ての疑は之に由りて消滅するを以てなり。かの時には、復活せし身体は、人の靈を集中し、局定すること、猶ほ今日の肉体の如くなるべし。而も其時には大變化あるべけれど、認識を妨ぐる程にはあら